
16. 私の心を捉えたもの

朝日の友好の門は広々と開かれている。

日本から少なからぬ人士や記者が朝鮮を訪れた。政界や社会各界の人士もおり、文筆家や美術家もいる。科学者もおり、記者もいる。喜んで門を広々と開き、日本の友人たちを迎え入れる朝鮮人たちの礼節に、人々は感嘆している。

平壤で開かれた世界反米記者大会に日本代表団の一員として参加した『朝日新聞』記者瓜生長三郎氏は、1969年11月10日、日本記者会議機関誌『ジャーナリスト』に、「私の心を捉えたもの——子どもたちと宮殿」というタイトルの記事を掲載した。その内容は次の通りである。

平壤に到着した9月16日、空港から市内中心に通じる道路の両側には、コスモスが美しく咲きほこっていた。そして帰国する10月3日には、同じ道路の両側に色とりどりの野菊が咲いていた。

街路樹と花で美しく装った平壤の中心街は、いまわしいアメリカとの戦争でことごとく破壊された当時の写真を見ては、想像もできない程度であり、その復旧の姿は素晴らしいものであった。

世界反米記者大会に一般商業新聞の記者として参加できたのは、わたしにとって貴重な体験であった。

それは短い期間ではあったが多くの施設を見学し、関係者たちと話を交わすことによって、朝鮮の人たちの心を自分なりに理解

することができたからである。

滞在期間、わたしの心をもっとも強烈に捉えたのは子どもたちの姿であった。

この国では重要行事に必ずといってもよいほど少年団員が登場する。

平壤空港に到着したとき、一番最初に花束を捧げ赤いネクタイを結んでくれたのも、大会の開幕式で歓迎の挨拶を行ったのも少年団員たちであった。

世界反米記者大会に参加した代表たちを歓迎する平壤市民大会のバックスタンドで文字を描いたのも生徒たちであることを知って驚いた。

……

少年団員たちは道端でわたしたちの車を見れば、右手を額の上に挙げる独特な敬礼で必ず挨拶をした。それは周囲が暗くなってこちらから見えないときも、必ず行われているようであった。

……

わたしたちが訪問した平壤学生少年宮殿は、210の研究室を有する13階建の立派な建物であった。そこでは、民族芸術、農業、通信、水力発電、看護から革命思想に至るまで少年、少女が各研究室で目を輝かせながら学習に没頭していた。

筆者は、学習に励む子どもたちの姿に関心を引いたのは、勉強の重点が主に科学技術の学習と民族問題、革命教育問題に置かれている点であったとし、通信サークルでは電話交換はいうまでもなく無線通信などすべてが少年たちだけで行われているのを見て、

大きな感銘を受けたと書いている。

さらに、平壤郊外の工場や協同農場など生産施設を見て回ったことは有益であったとし、朝鮮人民が軍事境界線を境にアメリカ帝国主義と対峙している緊張した環境のもとで生産に取り組んでいる姿を見ることができた、^{チョンサン}青山協同農場を訪れた時、有事に対処していることを知ったとも書いている。

筆者は最後にこう書いた。

わたしたちが訪問したどこでも幹部たちの挨拶は、南半部解放についての決意を固めることで語を終えた。

わたしはそのことから、通りにある反米スローガンやポスターなどで受けた印象とはまた異なる、この国の緊張感を感じ取ることができた。

朝鮮民主主義人民共和国の人民は、真心こめてわたしたちのお世話をしてくれた。

わたしは同じアジア人としての連帯感を改めて感じている。

このように『朝日新聞』の記者は朝鮮の姿をリアルに紹介することで朝鮮人民の信頼を勝ちえた。朝鮮人民に親近感を覚えさせた『朝日新聞』という名は、紙面の上だけでなく金日成主席の接見を受けた記者たちの姿とともに、朝鮮人民の記憶の中にいっそう強く残るようになった。

17. きわみなき人情味に惹かれて

成田知己氏は、1935年東大卒業後、三井鉱山に就職した。戦後政界入りして47年香川1区で日本社会党から衆院に初当選し、62年党書記長、68年に第6代委員長に就任し、9年余その任にあった。

氏は委員長在任中の1970年8月22日と1974年9月6日に朝鮮を訪問して金日成主席と会見し、深い感銘を受けた。

1970年、社会党代表団が共和国をはじめて訪問した際、当時は朝日両国間に国交がなかったので、ソ連か中国などの第3国を経由するのが通例となっていたが、一国を公式訪問する党代表団としては外国を経由するより直接行くのが礼儀だと考えた氏は、直行航空路も定期連絡船もない状況のもとで貨物船で直行することにした。こうして一行は咸興で船を降り、そこから汽車で平壤に向かった。

平壤は聞きしにまさる美しい都市だった。

同行の日本人記者も、「平壤がこんなに立派な都市だとは思わなかった。平壤は世界の都市の中で5指に数えられる実に美しい都市だ」と感嘆してやまなかった。

代表団は内閣庁舎で、金日成主席の接見を受けることになった。

宿所の迎賓館を出発した乗用車は内閣庁舎に到着し、代表団一行はエレベーターで接見場へ向かった。

エレベーターの扉が開くと、意外にも、そこに主席が立っていた。

主席は明るい微笑をたたえて、驚き、恐縮する代表団の一人一人と固い握手を交わした。

主席は執務室においてばかりでなく、昼食会まで催して、長時間代表団と席をともにして談話を交わした。

成田知巳氏は、その時の印象を次のように回想している。

「わたしは、世界各国を訪れ、多くの国家元首とも会ったが、金日成主席はもっとも傑出した指導者であることを感じた。

金日成主席は飾り気のない実におおらかな方であった。

主席は格式にこだわることなく、なんでも思ったまま率直に話されたが、その一言一言が確信と自信にあふれていた。わたしはこの点で非常に強い印象を受けた。

自信にあふれている人は概して高姿勢でうぬぼれが強く、相手の思惑にかかわりなく一方的に話を進めがちである。これが本当に自信のある人でないことは言をまたないであろう。

ところが金日成主席は非常に謙虚で思いやりがあり、明朗な方であった。

主席はわれわれと談話中、外国の政客にありがちな、一方的に話を進めるとか、相手の話の腰を折ってはばからないというようなことはなく、必要な問題については詳しく話されながらも、われわれに語る余裕を与え、意見を述べる機会を提供するなど、われわれがいつとはなく主席の話す世界に誘われていくようにされるのだった。これこそ真の自信であって主席のこのおおらかな品性には、主席自身の路線に対する確信が裏打ちされているのだと、わたしは思った」

成田知巳氏を団長とする社会党代表団は、1974年9月、2度目

の共和国訪問を行った。

訪問日程が終わりかけていたある日、多忙をおして代表団の宿舎を訪れた金日成主席は、温泉オンチョンで一緒に食事をとろうと言って一同を誘った。

成田氏は主席の車に同乗した。車中、主席は、これまでわたしが多くのお話をしたが、温泉までは2時間半かかるから、さしつかえなければ成田先生のお話を聞かせていただきたい、大いに話して欲しいと言って、ざっくばらんに話す機会を与え、また、温泉について一同が食卓を囲むと、主席は、格式張った挨拶は抜きにしよう、食事をしながら話し合おうと言ひ、なごやかな雰囲気をつくった。

このようなことは初めてのことで、主席の格別な思いやりに一同は大きな感動を受け、成田氏はそれまで頭の中に深く刻まれていた一つの先入観が粉々に打ち砕かれたとして、こう述懐している。

「われわれの若かった日本帝国主義時代のことである。

われわれは日本の新聞紙上で『白頭山の虎金日成』出沒という記事を読み、また、そうした話をたびたび耳にした。

言うまでもなくこれは、当時神出鬼没の戦法で日帝軍警を悩ませた抗日の霊将金日成將軍の勇猛果敢な活躍にあわてた帝国主義者の表現であったが、われわれ日本人のなかには『白頭山の虎金日成』といえば、普通の人間はあえて近づくこともできない、そのような英雄を連想する人が少なくなかった。

正直な話、わたしもやはりそう考えていた。

帝国主義によって植えつけられた先入観であっただけに、それ

は長続きせず、その後、金日成主席の人柄と徳性にかんする話を多く聞いてはきたものの、主席にお会いするまでは若いころの考えがきれいに拭い去られてはいなかったのである。

しかし、主席の慈しみ深くおおらかな人柄に接してその先入観は完全になくなり、私は深い尊敬の念を抱くようになった」

氏は、金日成主席はものごとにたいする鋭い洞察力と判断力、度量のある包容力、そして理路整然とした論理と心をうつ強い説得力を兼備した偉大な方であるとし、主席はすでに多くの労作を世界に出しており、それらはすべての革命家の指針となる闘争の教科書であると賞揚した。とくに、『資本主義から社会主義への過渡期とプロレタリアート独裁の問題について』のなかで、過渡期とプロレタリアート独裁の問題について独創的で科学的な解明を与え、あらゆる日和見主義の反動の見解に打撃を加え、『わが国における社会主義農村問題にかんするテーゼ』においては、懸案となっている農村問題解決の道を科学的に解明し、テーゼに基づいてこの難問題を朝鮮で真っ先に解決している、これは実にすばらしいことであるとして、こう続けている。

「こうしたいくつかの事実によっても、金日成主席は偉大な実践家であるとともにすぐれた政治理論家であることをはっきり知ることができる。

金日成主席のこれらの主な労作をほとんど読んだわたしは、主席が革命と建設のすべての分野にわたって理論的に非常に造詣が深いことを知ってはいたが、主席のお言葉を直接聞いて、その高く深い政治理論的見識に感嘆を禁じ得なかった。

その内容をここですべてしるすことはできないが、主席が全般

的な国際問題から日本の実情にいたるまで非常に詳しいばかりでなく、冷静にそして明快に分析しながらも、それらのひとつひとつの問題の本質をすべてずばりについていることにわたしは驚嘆してしまった」

氏は、主席の接見と共和国各地での見聞、そして氏自身の体験によって、金日成主席はすぐれた思想家、理論家であるばかりでなく、人民にたいする大いなる愛を抱いている人民の偉大な指導者、慈父であることがよく分かった、主席はつねに大衆のなかに入り大衆に依拠して活動し、つねに人民の立場に立って考え、人民の利益を代表して人民の意見を行政に反映する根本的立場を堅持している、そういう意味においても金日成主席は偉大な領袖であるとたたえた。

氏は、大衆のなかに入り大衆とともにあること、これは金日成主席の一つの特徴であるとし、あの有名な青^{チョンサン}山里に数十回も現地指導を行ったことはその一例と言えるが、多忙をきわめながらもつねに人民のなかに入って人民の意見に耳を傾け、通り一遍の指導ではなく実情に適した具体的な指導を行っているとし、こう語っている。

「金日成主席がある農村を現地指導していた時のことで、ある婦人農民が当地ではとうもろこしが適作だという意見を主席に申し上げたそうである。彼女はしばしば各機関にこの提言を行ったが実現されず残念に思っていた。

すべての事情を了解した主席は彼女の意見の妥当性を認め、現地で必要な措置を講じた。

こうして、その農村ではとうもろこしを栽培したが、結果が非

常によかったという。

われわれ代表団が金日成主席の招きで一緒に演劇を見物したときのことである。

公演が終わると、主席は主人公をはじめ出演者、演出家など会い、握手を求めて労をねぎらいながら、公演の成功を祝った後、問題点を正すようくわしく指摘した。

あとで知ったことであるが、朝鮮の芸術家はつねに随所で主席のこのような指導を受けているというのであった。

こうした細心の配慮と具体的な指導は、どの指導者にでもできるものではない。わたしはこの事実にたいへん感激した」

金日成主席のこうした深い心づかいと温かい配慮は、代表団と同行した日本人記者にもそのままめぐらされた。

記者たちは金日成主席との会見を切望したが、政務に忙しいため時間をさくのがむずかしいというので、主席との会見をあきらめていた。

ところがある日、主席は大同江のほとりにある代表団の宿所を訪れた。玄関に入った主席は、成田氏と一緒に出迎えた日本人記者たちを見ると、みなさんから会見を申し入れられたのに希望にそえずすまなかった、今からここで会見しようと言って彼らと20分間も話し合った。

成田氏はこのことについて「このような場合、一国の国家元首がいったん会見をことわった以上それで済むのが通例である。しかし金日成主席は、日本人記者の要請を記憶していて、彼らに会うと、会見できなかったことを詫び、意外にも異例の会見を行って下さったのである。

実に至れり尽くせりの配慮である。

主席のこのような配慮に記者たちが感激し喜んだのはいうまでもなく、わたしを含めわが代表団一同も感激を禁じえなかった」と述懐している。

一同の感激は、帰国に際して絶頂に達した。

代表団が共和国訪問の日程を終えて船で帰国するときのことであつた。

代表団を乗せて清津港^{チョンジン}を出発した船は途中しげにあつた。台風が近づいていたのである。

船酔いした人たちは食堂から立ち上がり、一人一人と船室へ戻って行った。

しかし、成田氏は一人の団員とその場に踏みとどまり、揺れるテーブルを肘で押さえて語り合った。左手でコップを、右手でビール瓶をつかみ2人はいつまでも話しつづけた。金日成主席の印象談であつた。

戦前は三井財閥の優秀な社員として働き、戦後政界に乗り出した氏にとって、戦争と革命の烈火にもまれ、今は朝鮮民主主義人民共和国の元首として、アメリカ帝国主義、日本軍国主義との対決の先頭に立っている主席の余裕綽々とした姿から受けた印象はあまりにも強烈であつた。

成田知巳氏は、金日成主席と同年であることは人生最高の光栄であるとして、感激を抑えることができないでいた。

船長の決心で船は興南港^{フンナム}に退避し、しげがおさまるまで興南ホテルで待つことにした。

ところが、金日成主席がこのことを知って、成田氏に長距離電

話をかけ、ホテルでは不便だろうから、平壤の宿所に戻って、疲れをいやしながら待つようにと言った。

恐縮した成田氏ら一行は強く辞退したが、結局平壤の宿所に戻った。

成田氏は以上の出来事を回想しながら、こう述べている。

「金日成主席は実に慈愛にみちた人情味豊かな指導者である。わたしは金日成主席と会って主席の偉大さを肌で感じた。

わたしは、朝鮮人民の敬愛する指導者金日成主席の万年長寿を心から祈願しながら、偉大な指導者の導きのもとに、朝鮮民主主義人民共和国がわたしの臉にあざやかな緑の山野とともにとこしえに栄えることを願ってやまない」

18. 明快な論理

1970年8月、成田知巳委員長を団長とする日本社会党代表団の朝鮮訪問によって、はじめて日本社会党と朝鮮労働党との、党と党との交流連帯の扉が開かれた。

朝鮮労働党代表団と日本社会党代表団との会談で、アジア情勢、日朝関係などの多くのことが話しあわれたが、最も大きな比重をもって話しあわれたのは、日本軍国主義の復活の問題であった。当時、日本の内閣は佐藤内閣であった。佐藤総理は、1969年11月の訪米で、ニクソン大統領との間で「日米共同声明」を発表していた。それには、極東の平和と安全のための米軍の役割を高く評価しつつ、「韓国の安全は日本自身の安全にとって緊要」であり、また「台湾地域における平和と安全の維持も日本の安全にとってきわめて重要な要素である」とうたわれていた。これは、朝鮮半島や台湾海峡で戦争がぼつ発した時は、日本はアメリカとともに戦争に参加するという決意を表明したものと受けとられた。

これについて、1970年6月には、1960年の大反対闘争を押し切って改定された日米安保条約の、10年の固定期限が終了し、廃棄の手續きが取られない限り安保条約は永久に自動延長されることになった。

これに見合うごとく、佐藤内閣は「自主防衛」というスローガンのもとに軍事力強化の政策を露骨に推進した。

こうした経過をふまえて、朝鮮側は日本軍国主義はすでに復活

したと主張した。これに対し日本側は、日本支配層には軍国主義復活の意図があり、そのための政策を推進していることは事実であるが、まだ復活したという断定はすべきでない、と主張した。もし復活したと断定すれば、日本の民主勢力の平和民主の闘争のあり方に重要な変更を加えなければならないと判断したうえでの主張であった。この論争は時にはエキサイトした場面もあったけれども、結局、「復活しつつある日本軍国主義の危険性に対してたたかう」という表現におちついた。

このあとの8月22日、代表団は金日成主席の接見を受けた。

社会党代表団には、党中央執行委員高沢寅男氏もいた。氏はその時の主席の印象をこう語っている。

「私にとって主席の第一印象は非常にソフトな人ということだった。かなり背の高い人だけれども、まるまると太った体躯の感じでそれが中和されている。つねにほほえみをたたえた温顔。そして握手した時のやわらかく温かい手のひらの感じ。すべてがソフトであった。

だが第2印象はすごい人ということであった。それは、主席の声からの印象である。それは、私がいままでに会ったいかなる人からも聞いたことのない、ドスのきいた太い声であった。

主席との会談で判明したことは、成田委員長と主席が同じ年(1912年)の生まれということであった。主席は4月15日生まれ、成田委員長は9月15日生まれだった。このことが成田委員長と金日成主席のあいだに、また日本社会党と朝鮮労働党のあいだに、独特の親近感と友情を生み出したと私は信じている」

席上、金日成主席は多くのことを語った。

日本政府は朝鮮に対して、かさにかかって国際原子力機関の核査察を受けろと要求していたが、南朝鮮に約1000発のアメリカの核兵器が配備され、それが北朝鮮に向けられているというこの不当な実態について、アメリカに対しても南朝鮮に対しても一度も異議を申し入れたことがない。さらには非核3原則という国是にそむいて、アメリカの核兵器が大手をふって日本へ出入りしていることについて、しかもその核兵器が北朝鮮を含む社会主義諸国に向けられていることについて、まったく口をぬぐって知らぬ顔である。日本政府は、北朝鮮に対して国際原子力機関の核査察を受けろなどという前に、日本に出入りしているアメリカの艦船や航空機の核の有無をみずから査察する責任があるのである。

情勢に対する正確な判断力をもっている金日成主席の明快な論理に感銘を受けた高沢寅男氏は、こう続けている。

「私は日朝の国交を樹立することによって、南北朝鮮の自主的、平和的統一への道を容易にすることができると考えていた。

そしていまや、日朝の国交樹立をめざす政府間の交渉が行われている。今後、いろいろと紆余曲折はあろうが、必ずや日朝国交が樹立されることは間違いないと私は確信している。

そのあかつきに、もしあの若々しい金日成主席が日本を訪問されたならば、日朝両国民のあいだの友好関係がどんなに進むであろうか。また、不当な差別のもとにおかれてきた在日朝鮮人にどんなに大きな喜びと自信を与えることだろうか。私はその日のくるのを心から待望するものである」

19. 安宅常彦氏の幸福

安宅常彦氏は、1920年に山形県で生まれて逓信講習所を卒業し、地元の栃岡郵便局に勤務した。1955年に山形県労評議長を経て1960年に社会党より山形2区で衆院初当選し、その後、日朝友好議員連盟事務局長を務めた。

氏は、朝鮮民主主義人民共和国が創建された1948年頃、全逓信労働組合の山形県内一支部の書記長を務めていたが、共和国創建の祝賀デモを組織してアメリカ占領軍の徹底した弾圧を受け、山形県米軍政府に軟禁された。氏は、この弾圧を契機に朝鮮人民との連帯の重要なことをあらためて認識し、日本人として何をなすべきかを深刻に考えた。近所に住む在日朝鮮公民から金日成將軍の話の聞いたり、夢中で文献を集めたりしながら、祖国の独立のためにたたかってきた朝鮮人民の輝かしい歴史を学び、民族の英雄であり、絶世の愛国者であり、チュチェ思想の創始者である金日成主席に大きなあこがれをもつようになった。

氏は、1970年を前後した時期、日本社会党の朝鮮問題特別対策委員会委員長として、在日朝鮮公民の帰国事業再開、朝鮮籍登録問題、出入国管理法粉碎のたたかい、民族教育擁護の問題など、主として在日朝鮮公民の民主的民族権利擁護を中心としたたたかいに取り組んだ。これらのたたかいをとおして、念願の朝鮮訪問をたびたび行うようになり、日本と朝鮮の両国人民の友好促進、朝鮮の自主的平和統一など朝鮮問題に専念するようになった。

そのころ朝鮮では、1961年からの人民経済発展7カ年計画によって社会主義工業国建設に向けて邁進し、青^{チョンサンリ}山^リ里^リ精神、大安^{テアン}の事業体系などで有名な雄大な計画が遂行されていた。朝鮮は、「プエブロ」号事件など幾多のアメリカ帝国主義の妨害による極度に緊張した情勢を勇敢にのりこえて、社会主義工業化の歴史的課題を完成させ、さらに思想、技術、文化の3大革命を推し進めていた。社会主義の物質的・技術的土台を強固なものに発展させながら、すべての部門で勤労者を骨の折れる労働から解放するという、新しい6カ年計画に取り組もうとする大躍進の時期であった。

安宅常彦氏はこうした時期の1970年8月、成田委員長を団長とする日本社会党代表団の一員として朝鮮を訪問した。

代表団は、8月15日の解放記念日祝賀式に参列することになり、各国大使や訪朝中の数多い代表団とともに会場に入った。

その時に目撃したある出来事について、安宅氏は次のように書いている。

「開会されるまえから会場には、あるいは静かにあるいはにぎやかに各国の音楽が流れていた。アラブのある国の音楽がかなでられたとき、突然厳粛な雰囲気は破られ、その国の代表団員たちが陽気に口笛をさかんにふきならしながら『アンコール』を連呼し出した。わたしたちは驚いていると、金日成主席がニコニコしながらその代表団の席をふりかえられ、言葉はわからないが、庶民的とでも言うか、とてもくだけた態度で笑いながら、『もう一回やったら……』というしぐさを係の人になされた。

この情景を目のあたりにして、『この方は朝鮮人民からだけでなく、世界の人民から慕われる方だ。こうしたことを自然にやれ

る元首が他のどの国にいるだろうか。おそらく金日成主席だけだ』とわたしはそのとき強烈に心に焼きつけられた」

日本社会党と朝鮮労働党との間の初めての共同声明ができあがった直後の8月22日、成田委員長ら社会党代表団は金日成主席の接見を受けて長時間、世界情勢、朝鮮の社会主義建設など広範な問題で談話を行った。

やがて昼食の時間になり、一同は主席の招きで食堂に移り、ここでも談話は続いた。

席上、主席は成田委員長に在日朝鮮公民の民族権利擁護問題について質問した。成田委員長は「安宅君がくわしいので、同君から説明させます」と答えた。

安宅氏が立ち上がって説明しようとする、金日成主席は、「テーブルが違っては話しにくい。こちらにおいでなさい」と手を上げて招いた。氏は「声が大きい方ですから、ここでよろしいです」と、そのまま話をはじめた。「話はそばで向かい合ってくださいの方が通じやすいものです。こちらに席をかえてください」と重ねて言われて、もじもじしていると、主席の言いつけで係の人がごちそうのはいった皿ごと、主席のそばに運んだ。

安宅氏はこう書きつづけている。

「一国の元首でこのようにさばけた態度をとれる人が他にいるだろうか。実に親しみ深く飾り気のない方である。さきの解放記念日のときのことと思ひ合せ、目がしらがジーンと熱くなってきて、どうしようもなかった。言葉が不都合かも知れないが、わたしは金日成主席を『大好き』になってしまった。

わたしは別の文章にもこのことを書いたことがあり、日本にお

いてもいろいろな機会にこの話をするのだが、『金日成主席が君にそのような待遇をするはずがない』とか言って、誰もなかなか信用してくれない。しかし、わたしの真剣な説明で最後にはやっとな得し、『朝鮮の人々は幸せだなあ。金日成主席のような人は、他にいないだろう』などといったところに話がおちつくのである」

20. 新聞記者ではなく友人として

1971年9月25日、訪朝中の朝日新聞社後藤基夫編集局長一行は金日成主席の接見を受けた。

後藤基夫氏は1941年に東大法学部を卒業した後、朝日新聞社に入社し、ロンドン支局長、東京本社論説副主幹、編集局長を歴任した。

会見席上、主席はまずこう語った。

「わたしがあなたがたとお会いするのは初めてですが、在日本朝鮮人総聯合会の議長や副議長とあなたがたとは旧友の間柄です。わたしは総聯の議長からあなたがたを友人として迎えるよう頼まれました。それで、われわれはあなたがたを単に新聞記者としてではなく、友人として、国の賓客として迎えています。わたしとあなたがたとの今日の談話は、首相と記者との談話というよりは、友人同士、親友同士の対面と考える方がよいでしょう」

厚い情のこもった言葉であった。

近しい友を前にしているかのように腹藏なく話を進める主席の言葉に力を得て、記者たちはこもごも謝意を表した。

主席は、あなたがたが提出した質問状を関係機関を通して受け取った、あなたがたはさまざまな質問をしているが、その趣旨は理解できる、朝日間の往来が頻繁でないことからわが国の実情に疎くてそのような質問が出されたのであろうと思う、だが、わたしはあなたがたの質問に善意をもって簡単に答えることにした、

と言った。

編集局長一行が提起した質問は多岐に渡っていた。

党と国家活動の全般を指導する多忙を極める身でそれら多くの質問にすべて答えるなど到底時間が許さないはずであった。

ところが主席は、その貴重な時間を惜しみなく割いていちいち回答を行ったのである。

21. 民族教育は当然保障されるべきこと

朝日新聞社編集局長一行との談話席上、金日成主席は在日朝鮮公民の民族的権利擁護の問題について分かりやすく意味深い回答を与えた。

「在日朝鮮公民が民族的権利を守るのは非常に重要な問題であります。いかなる民族でも民族的権利を守るのは当然のことであって、それは国際法にも抵触しません。われわれの知るところでは日本人も多く外国で暮らしているようですが、おそらく彼らも民族的権利を守ろうとするはずであって、それを放棄しようとはしないだろうと思います。したがって、在日朝鮮公民が民族的権利を守るのは当然なことであります」

ここで主席は、在日朝鮮公民には何よりも、民族教育の権利が十分に保障されなければならないと強調した。

「今、外国に行って暮らしているわが国の公民は、すべて自分の学校を持っています。朝鮮公民の少ないところでは、直接わが国の大使館で学校を運営しています。わが国の公民が比較的多く在住している中国には、北京や上海など各地に朝鮮人の学校があります。中国政府は、朝鮮公民の教育事業をあらゆる面から擁護し保護しています。現在、中国に在住している朝鮮人はすべて自分の学校を持っており、わが国の言葉と文字を習い、わが党の政策とわが国の歴史を勉強しています。

日本でも総聯傘下の朝鮮公民は、自分の学校でわが国の言葉と

文字を習っており、わが党の政策とわが国の歴史を勉強しています。これは在日朝鮮公民の堂々たる民族的権利であります。

在日朝鮮公民の民族教育が実現するようになったのは、日本にいる朝鮮公民が立派にたたかい、同時に、日本人民と各界の進歩的な人々が積極的に支持声援したからだと考えます。

もちろん、日本の支配層の中で反動的な傾向を持った一部の個人的な人は、在日朝鮮公民の民族教育事業を破綻させようとしています。圧倒的多数の日本人民と進歩的な人々の圧力のため、その意図を達成できずにいます。日本政府の内部にも在日朝鮮公民の民族教育事業に反対する反動的階層もいますが、支持している人も少なくありません。それで日本政府は、われわれが在日同胞に送る教育援助費の受け入れを許しているのだと思います」

民族教育に関する主席の指摘は、鋭くも強い説得力を持っていた。

海外の公民に民族教育を施すのは非常に重要である、周知のように、民族は何よりもまず言語と文字の共通性によって成り立つのであるから、在日朝鮮公民がわが国の言葉と文字を知らないということになれば、事実上朝鮮民族とは言えなくなる、よって、われわれは在日朝鮮公民の民族教育事業を非常に重視し、今後ともこの事業を積極的に支持し、援助を与えるであろうと語る主席の声は重々しく、時にはしわがれていた。そこから記者たちは、在日同胞に対する主席の深い愛情を感じ取っていた。

22. 在日朝鮮人を思う心

長時間をかけて朝日新聞社編集局長一行の質問に答える金日成主席の談話は、在日朝鮮公民の国籍問題に移っていた。

日本は人口の多い国だから、あえて朝鮮人を日本に帰化させる必要はなかろうと思う、われわれは今後とも日本人民と各界の進歩的人士が在日朝鮮公民の民族教育事業を積極的に支持擁護してくれるものと期待しているとした主席は、日本政府が在日朝鮮公民に「韓国国籍」を強要している反動的行為を糾弾した。

「現在、日本政府は、在日朝鮮公民が朝鮮民主主義人民共和国の国籍を持たないように妨害していますが、これはわが国に対する日本政府の非友好的な態度だと考えます。日本政府の反動的階層は、南朝鮮の傀儡一味と共謀結託して、在日朝鮮人に『韓国国籍』を強要しています。彼らは、在日朝鮮人が『韓国国籍』を持てば特別な『待遇』をし、朝鮮民主主義人民共和国の国籍を持っている人にはいろいろの条件をつけて不当な制裁を加えています。一部の人には、それがわずらわしくて『韓国国籍』を持つらしいのです。日本当局は、形式上国籍選択の『自由』を云々していますが、実際の内幕は国籍を自由に選択させるのではなく、不当に強要しています。日本に住んでいる一部の朝鮮人に、強制的な方法で『韓国国籍』を持つようにしたところで、大きな問題になることはありません。彼らはたとえ、日本反動層の強要に耐えられずやむなく国籍をかえても、今日、南朝鮮の人民がわれわれを一致

して支持しているように、彼らも朝鮮民主主義人民共和国を積極的に支持するでしょう。

日本に居住する朝鮮人が国籍を『韓国国籍』にかえるとといったような悲劇的な事態が生ずるのも、結局はわが国が南北に分断されているからです。しかしこの問題も、今後一定の時期がくれば正しく解決されるものと思います」

明快な指摘であった。

当時、日本政府はアメリカ帝国主義の教唆を受け、売国奴朴^{パク}正^{チョン}熙^ヒ傀儡一味と共謀して、在日朝鮮公民に対する弾圧を公然と働いていた。

福岡県の警察が在日朝鮮同胞ロ・ウンマンさんをいわゆる「外国人登録証」と関連して調査することがあるとして派出所へ連行し、無残に殺害したのをはじめ、東京都調布市ではリ・ジョングォンさんが右翼に襲われ12カ所を刃物で刺されて死亡しており、兵庫県ではチョン・ウォンソクさんが、横浜市ではリ・ジャンスさんがやくざに刺されて殺されている。

とりわけ白昼、派出所で罪のない在日朝鮮同胞が無残に殺害されたのは、重大というほかなく、朝鮮人民の民族的怒りを呼び起こした。

彼らの暴力行為はこれにとどまらない。

国土舘高等学校の20余名の暴力輩が東京朝鮮中高級学校高級部の生徒7名に集団暴行を加えたうえ、彼らの制服と所持品を強奪した。

20余名の日本人不良学生が同じく東京朝鮮中高級学校の6名の生徒を袋叩きにして重傷を負わせた。

福岡県では3人の暴力団が当地に住むチョンさんとペクさんをわけもなく刃物で刺して重傷を負わせている。

そして、白昼愛知朝鮮第1初級学校では、正体不明の男が忍び込んで倉庫に放火する事件が発生している。

また、およそ30名の日本人不良学生が東京朝鮮第1初中級学校の生徒3人に暴力をふるって重傷を負わせた。

このように、ならず者どもの暴行によって数多くの在日朝鮮学生が重傷を負うなど大小の暴力行為やいやがらせが続発し、朝鮮人子女たちは安心して学校に通うこともできない重大事態が発生していた。

にもかかわらず、佐藤政府は在日朝鮮人の民族的権利を守ることから目をそむけ、むしろ在日朝鮮公民を弾圧するための各種悪法を制定しようと躍起になり、多くの弾圧機構を動かし、右翼ファシストをも引き入れて在日朝鮮公民を迫害し、民主的民族教育の抹殺をはかり、卑劣に策動した。

金日成主席はそうした悲劇的実態を分析したうえで、在日朝鮮公民の帰国事業がいかにか実現したかについて振り返った。

「在日朝鮮公民の帰国事業が実現した問題について言うならば、これはあくまで双方の努力によって達成されたものです。すなわち、在日朝鮮公民の帰国事業は、わが方だけでなく日本赤十字社側でも多くの努力を払った結果実現されたものです。われわれは、朝鮮赤十字会の努力だけでこの事業が実現されたとは考えません。

このたび在日朝鮮公民の帰国事業が再開されて帰国船が行き来していますが、これは非常によいことであります。これは、朝鮮人民と日本人民間の友好関係の発展にとって一歩前進となります。われわれは今後も日本人民の支持のもとに、祖国に帰ろうとする在日朝鮮公民が誰でも帰国できるよう、この事業が継続されるこ

とを望んでいます。

われわれはまた、日本に在住する朝鮮公民が祖国へ自由に往来できるようにすることが必要だと考えます。新潟と清津チョンジンを行き来している帰国船が祖国に帰る人を乗せてくるだけでなく、祖国にいる親戚を訪問して再び日本に帰っていく人も乗せてくれるようになることを希望しています。

あなたがたは、われわれが今度初めて僑胞事業総局を設置したものと考えているようですが、この僑胞事業総局は、すでに在日朝鮮公民の最初の帰国事業が実現した1959年に設けたものです。その間、在日朝鮮公民の帰国の道がふさがれていたために、僑胞事業総局はその活動を行うことができませんでした。今度再び航路が開かれたのでその活動を行っています。僑胞事業総局では帰国同胞に、その希望と才能に応じて職場を斡旋し、彼らが望むところで生活できる条件を保障する仕事を行っています。

われわれは、帰国した人々がその才能と知恵を存分に発揮し、何不自由なく生活できるようあらゆる条件を保障しています。日本から帰ってきた同胞は、今誰もが無料教育と無料治療を受けており、社会主義建設に熱意を持って参加しています。今彼らは、希望と能力に応じて政権機関や経済・文化機関をはじめ各部門で知恵と才能を遺憾なく発揮して働いています。先ごろ日本に行ってきたスポーツ選手の中には日本から帰国した人もいます。このようにスポーツを好む人はスポーツをし、芸術の好きな人は芸術に従事し、技術のある人は技術分野で働いています」

金日成主席の一語一語には、在日朝鮮同胞へのあつい擁護の感情、自国人民へのあつい愛の感情がこめられていた。

23. 日本は朝鮮の隣邦

金日成主席は、朝日新聞社編集局長一行に朝鮮と日本との関係問題について語った。

「朝鮮民主主義人民共和国は創建当初から、わが国に平等と互恵の原則に立って友好的にたいするすべての国と親善関係を結ぶ政策をとってきました。

朝鮮と日本との関係について言うならば、日本はかつて朝鮮を侵略した国であり、朝鮮は日本に侵略された国です。朝鮮と日本は歴史的にこのような関係にあります。しかし、過去に朝鮮を侵略したのは日本帝国主義者であって、日本人民ではありません。また日本はわが国の隣邦です。したがって、わが国が日本帝国主義から解放され、朝鮮民主主義人民共和国が創建されたのち、われわれは社会体制に相違はあっても日本と善隣関係を結ぶことを希望しました。

しかし日本政府は、朝鮮民主主義人民共和国に対しては初めから非友好的な態度をとり続けてきました。ここにそのいくつかの実例を挙げようと思います。

1950年にアメリカ帝国主義者がわが国で侵略戦争を引き起こすや、当時の首相吉田は『日本は朝鮮戦争に軍隊と兵器を輸送することによって、国連と合作するであろう』と述べました。1953年に、『韓日会談』の席上で日本側代表は『日本が朝鮮を統治した

ことは、朝鮮民族にとって有益であった』という途方もない発言をしています。

岸内閣の時にも、日本の反動層はわが国に対して多くの敵対的な発言を行いました。

1958年6月の日本の雑誌に発表されたところによると、当時『韓日会談』の日本側首席代表は『日清、日露の両戦争はいずれも日本を脅かす勢力が朝鮮半島に進出してきたので、これを鴨緑江アムロクの外に押し返した戦争であった。…われわれは三たび立ち上がって38度線を鴨緑江の外へ押し返さねば、祖先に対して、先輩に対して申し訳がない。これは日本外交の任務である。日韓両国間に横たわる目前の諸懸案を解決するということもあるが、38度線を北に押し返すことに努力しなくてはならない』と述べています。彼はまた『38度線は韓国の運命線であると同時に、日本の運命線でもある』と述べました。

1960年、日本自民党の元副総裁であった大野伴睦という人は『日本、南朝鮮、台湾を合わせて“日本合衆国”をつくるべきである』と言いました。これらはみな日本の新聞に発表されたものです。

池田内閣においても事情は同じでした。……

池田内閣になってから、前首相の岸信介は衆議院本会議で『日本の自衛権が南朝鮮と台湾にまで拡張されなければならない』と述べました。

1961年2月2日、当時の外相小坂善太郎は『韓国を朝鮮における合法政府と国連の中において38カ国が認めておる。こういう関係で、われわれもこれを認めておるわけである』と述べ、『韓国の主権が北半部にまで及んでいないのは遺憾なこと』であると言

いました。

1962年9月、池田内閣の法相は『韓国は反共第一線であるので、われわれは朝鮮の統一を絶対に防止しなければならない』と述べました。

佐藤内閣の時にはもっとひどくなっています。あなたがたの首相を批判するのはあるいは聞きづらいかも知れませんが、佐藤についても二、三言っておかなければなりません。

アメリカ帝国主義者は、アジアで敗北するようになると、『アジア人同士戦わせようとする』いわゆるニクソン・ドクトリンなるものを打ち出しましたが、これを真っ先に受け入れたのはまさに佐藤であり、日本人民と各界の強い反対を押し切って侵略的な“日米共同声明”に調印したのもほかならぬ佐藤です。また彼は、南朝鮮人民がひとしく朴正熙パクチョンヒに反対していることをよく知っていながら、朴正熙が不正選挙で“大統領”になると、それを“祝う”ためソウルにまでやってきました。これは、彼がわれわれに対してきわめて非友好的な態度をとっている一つの証拠であると考えます。

日本政府はこのように、歴代にわたってわが国に対し侵略的で非友好的な態度をとってきました。

わが国はこれまで日本を侵略したり、日本の内政に干渉したりしたこともなければ、日本に対して敵視政策をとったこともありません。われわれは、つねに日本と友好的な善隣関係を持つために努力してきました。しかし、われわれの一方的な努力だけでは善隣関係は打ち立てられません。これまで朝鮮と日本両国間に善隣関係が実現していないのは、全的にわが国に対する日本政府の

敵視政策に起因します。

貿易関係を一つとってみてもそうです。われわれは、日本と貿易関係を発展させることを希望し、またそのために努力しています。日本はわが国と近接した隣国であるから、経済交流を行えば、輸送費も少なくてすむし、いろいろな面で多くの利点があります。しかし、日本がわが国に対して封じこめ政策をとっているので、やむをえずフランス、イギリス、オーストリア、オランダなどの遠いヨーロッパの国々に行って必要な品物を買っています。これらの国はわが国と国交関係のない国です。しかし、これらの国はわが国との経済交流を妨げてはいません。ただ日本だけがアメリカ帝国主義とともに、わが国に対し頑固な封じこめ政策をとっています。

現在、わが国と日本の商社の間で一部貿易が行われてはいますが、日本政府の敵視政策のため一方的な貿易となっています。日本の技術者はわが国に来て工場を見て回ることができますが、わが国の技術者は日本へ行くことができません。そのため日本の工場を見て回ることができず、したがって必要な品物を発注することもできません。日本政府は、わが国の技術者を入国させないだけでなく、軍需物資の統制を口実に日本商社とわが国との貿易を人為的に制限しています。

日本政府がこうしているのは、アメリカがこわくてなのか、あるいは南朝鮮の傀儡がこわくてなのか、われわれには理解できません。日本政府は、わが国の人たちを入国させれば共産主義の宣伝をするのではないかと恐れているようですが、それはとりこし苦勞というものです。日本には共産党もあり、共産主義の宣伝を

行っている人がいくらでもいるのですから、わが国の技術者が日本へ行って、共産主義の宣伝をしたところでしれたものではありませんか。

もし、日本の反動集団がわが国に対して経済的な封じこめ政策をとって、わが国の社会主義建設を破綻させようとしているならば、それはまったく愚かな考えです。わが国は日本以外の他の国々と貿易を行っており、わが国に必要な機械と設備をいくらでも買っています。日本がわが国との貿易を拒むからといって、わが国の社会主義建設が破綻するようなことは決してありえません。しかしわれわれは、できれば距離の近い日本と貿易関係を発展させることを希望しています。

最近聞くところによると、日本でわが国の技術者を受け入れる意思を表明したとのことですが、これが事実ならば、われわれはそのような措置を歓迎します。

朝鮮と日本両国間に友好関係を結び、ひいては国交関係を樹立するためには、何よりもまず、日本政府がわが国に対する態度を改めなければなりません。日本政府は、朝鮮民主主義人民共和国に対する敵視政策をやめなければならず、南朝鮮傀儡政権をそのかし、再び朝鮮人同士戦わせようとする行為を中止しなければなりません。

日本で佐藤内閣がかわるかかわらないかは、日本の内政問題であるので、われわれはそれに干渉しようとは思いません。問題は、日本で誰が首相になるかということにあるのではなく、わが国に対する敵視政策を放棄するか、さもなければ続けるかにあります。日本の首相がかわっても、わが国に対する日本政府の政策が変わ

らなければ、朝鮮と日本両国間の関係は改善されないでしょう。われわれは、日本政府が時代のすう勢にそって、その間違った政策を改める必要があると考えます。

最近、日本の進歩的な階層のあいだで、中国と国交を回復し、朝鮮民主主義人民共和国とも国交を樹立するための運動が展開されていますが、これはよいことだと考えています。

もし、朝鮮人民と日本人民が共同でたたかい国交を樹立するか、または国交を結ぶ以前にでも友好的な往来が実現されるようになれば、われわれはこれを歓迎するでしょう。われわれは、日本と国交を樹立する前でも、可能な範囲で記者や技術者などの往来を頻繁にし、経済分野や文化分野において交流を広く行う用意があります。しかしこれは一方的なものとなつてはならず、どこまでも相互主義の原則で行われるべきであると思います。

このたびあなたがたは、わが国の芸術団を招請したいと言われたそうですが、われわれはこれを歓迎します。両国間に道を開いて、互いに行き来するのはよいことです。

われわれは今後具体的な手順がどうであれ、朝鮮と日本両国間に友好関係が結ばれるかどうかは、もっぱら日本政府の態度いかんにかかっていると考えます」

24. 日本軍国主義は既に復活している

朝日新聞社編集局長一行を前にして第1、第2、第3…と指を折りながら語っていた金日成主席は、6番目の指を折った。

第6に、という言葉に記者たちは恐縮しながらも聞き耳を立てた。

主席は既に長時間を費やした記者会見であったが疲れた色も見せず、終始明るい笑みをたたえて明快な回答を与えていた。

第6番目の回答は、日本軍国主義の復活いかんについてであった。

「今一部の人は、日本軍国主義が復活したかどうかという問題で論争していますが、われわれは日本軍国主義がすでに復活したと見ています。これはわれわれの推測ではなく、実際の資料に基づいて到達した結論です。

あなたがたもご存知のように、日本軍国主義者は、久しい前にすでに『三矢作戦』だの『フライング・ドラゴン作戦』だの『ブルラン作戦』だのという具体的な侵略計画を作成し、そのような作戦計画にしたがって、アメリカ帝国主義侵略軍、南朝鮮の傀儡軍とともに東海で引き続き合同軍事演習を行ってきました。今年もそのような軍事演習をしばしば行いました。彼らは『防衛』の目的でそのような軍事演習をするのだと言っていますが、実際にはそれが朝鮮と中国、それにソ連を仮想作戦地域とした侵略的な軍事演習であるということは、二言を要しません」

ここでしばし間を置いた主席は、再び口を開いた。

「日本軍国主義者の海外侵略において、朝鮮民主主義人民共和国はその第一の攻撃目標となっています。彼らは朝鮮戦線に侵略兵力を投入する目的で、南朝鮮傀儡軍と共同で上陸作戦演習を大々的に繰り広げており、南朝鮮の傀儡を後押しして軍事境界線まで高速道路を建設しています。この高速道路は関釜連絡船と直接つながっています。これらのことは、すべてわが国を侵略しようというところにその目的があるのです。

日本の反動支配層は、朝鮮で戦争が起これば手をこまぬいておれないと公言しています。1969年12月1日、日本の国会で佐藤は『韓国や台湾のような近隣諸国の安全は、わが国の安全にとって重大な関心事であり』、『万一これが侵されるような事態が発生すれば…前向き態度をもって事態に対処することは当然』であるといいました。また彼は、昨年2月に『朝鮮で戦争が起きた場合、それを対岸の火災視することはできない』といい、はなはだしくは『日本が先制攻撃するのは自衛権に属する』とまでうそぶいています。

これらいくつかの資料を見てもわれわれは、日本軍国主義が復活し、海外侵略の本格的な準備段階に入ったことをはっきり知ることができます」

記者たちは主席の話に聞き入っていた。そこにはなんらの疑問も異議もさし挟む余地は見出されなかったのである。

主席の話は続いた。

「日本軍国主義が復活したかどうか、という問題を議論するときにはすでに過ぎ去りました。現在、彼らの行動からすれば、日本に軍国主義が復活したと見るべきであって、ほかに見ようがあり

ません。日本軍国主義が復活したことは厳然たる現実であるだけに、いまの段階ではどうすればその侵略の野望をくじき、アジアと世界の平和を守れるかということがさし迫った問題となっています。

日本軍国主義が復活はしたが、彼らが、あえて戦争を起こしかどうかは、全的に日本人民とアジアの人民がいかにかたかにかかっています。

日本軍国主義者の侵略策動に反対するうえで、日本人民のたたかいはきわめて重要です。われわれは日本人民が、日本の反動政府が侵略戦争を起こせないようにする制動力をもっているとみなしています。今日の日本人民は1910年代や1920年代の日本人民ではなく、1970年代の日本人民です。今日日本人民は、日本軍国主義侵略勢力に反対してねばり強くたたかっています。

日本の支配層内部にも侵略戦争を行うべきかどうかという問題で、意見の対立があるようです。日本は島国であり、工業原料を外国に大きく依存しているため、戦争が起これば国内で原料を手に入れることは非常に困難になるでしょう。こういった事情のため、日本独占資本家の中にも、戦争を憂慮する人がいると思います。

このように、日本の国内でも侵略勢力はごく少数で、反戦勢力が絶対多数を占めています。日本の広範な反戦勢力が固く団結して反戦運動をいっそう積極的に繰り広げるならば、日本の反動政府がいかにか戦争を欲しても、あえて戦争を起こすことはできないでしょう。

日本軍国主義者が侵略しようという国にしても、そう簡単に太刀打ちできる相手ではありません。かつて、彼らがアジアで主人ぶるまいをしていた時代はすでに過ぎ去りました。今日の朝鮮は

『韓日合併』当時の朝鮮ではなく、今日の中国も清日戦争当時の中国ではなく、今日のソ連も露日戦争当時のロシアではありません。今日朝鮮と中国、ソ連の威力は比べようもなく強化されました。

われわれは、朝鮮、中国、日本、それにインドシナ人民をはじめアジア諸国人民が固く団結して積極的にたたかうならば、いくらでも日本軍国主義者の侵略策動を阻止し、破綻させることができます。しかし、日本軍国主義はまだ復活していないとか、それとたたかう価値がないなどといって、彼らに幻想を抱き闘争を放棄するならば、それは、日本軍国主義者に手を貸す結果をもたらすでしょう。

もしも日本軍国主義者が変化した現実を直視せず、再び侵略戦争を起こすならば、彼らはアジアの革命的な諸国人民と全世界の平和愛好人民の団結した力によって、今度はいっそう大きな惨敗をこうむるであります。

朝鮮人民は、これまでと同様、今後も日本軍国主義者の侵略策動に反対して力強くたたかうであります」

固い決意をこめ、厳粛な面持ちで語る主席の言葉に編集局長一行は我知らず拍手した。

金日成主席は世界の名だたるアナリストも遠く及ばぬ天才的な言論人だと感服し、肅然と頭を下げる記者たちに、主席は丁重に言った。

「わたしの話を注意深く聞いてくれたことに感謝します。今後、朝鮮と日本両国人民の親善のために共同で努力することを希望します」

25. 高木健夫の転身

日朝文化交流協会初代理事長高木健夫氏は、1905年福井県の生まれで、25年北京法文学堂卒業後、国民新聞社、読売新聞社、大阪毎日新聞社などを転々とした末、中国に渡り北京で敗戦を迎えた。46年3度目に読売新聞社に入社して論説員となり、49年～66年同新聞のコラム「編集手帳」を担当して機知に富んだ風格ある名文によって人気を博した。氏は還暦をはるかに過ぎてチュチェ思想に接し、熱烈な信奉者、宣伝者となり、晩年、日朝文化交流協会の結成を主導し、初代理事長を務めた。

世界には劇的な人生転換をなした有名人の物語が少なからず伝えられているが、高木健夫氏のように人生のたそがれどきにジャーナリストから政治的信念が確固とした社会活動家に転身し、その信念をもって余生を送った例は稀である。

元来氏は金日成主席についての話をいろいろと聞き、その著書も読んで、大きく心を動かされてはいたが、すべてをそのまま信じていたわけではなかった。それは、わが目で確かめ、現実として共感を覚えた事実だけを真理として認めることに慣らされた、長年にわたる記者生活の中で身についた習性ともいえるものだった。

氏が朝鮮をはじめて訪れたのは1971年12月末であった。『読売新聞』記者代表団団長として訪朝した高木健夫氏は、12月31日夕、金日成主席が毎年新年を迎える大晦日の夜を平壤学生少年宮殿で

子どもたちと共に過ごすと思われ、招待を受けた。

世界的に偉大な政治家として名望の高い金日成主席はいったいどのような人であろうか、と氏は高ぶる胸を鎮めることができなかった。

待つほどもなく金日成主席が学生少年宮殿に到着した。

宮殿は「万歳」の声でどよめいた。数十人の少年少女が、「アボジ、アボジ」と叫んで下車した主席を取り巻き、腕にぶらさがり、手を伸ばし、涙を浮かべている。

波のように大きく揺れる子どもたちにつつまれて、主席の大きな体躯も左右に揺れていた。満面に笑みをたたえて子どもたちの頭をなで、腰をかがめて子どもたちの話を聞く主席。

高木健夫氏は言い尽くせぬ大きな感動に包まれた。

子どもたちの流れは
海の波の揺れるよう
この揺れる波に乗り
楽しそうに揺れ動く
船かとも思えるお方

後日、氏はこの時の光景をこう歌い、次のように語った。

「新年を大勢の子どもたちと一緒に迎える国家元首が、はたして世界のどの国にあるだろうか。

世界各地を巡り歩き報道を業とする新聞記者である私ではあるが、他の国では未だ見たことがない。……この目で見、聞いたすべてが極めて熱狂的であった」

氏の感動は少年少女の迎春公演の第1部が終わり、応接室で主席の接見を受けた時いよいよ深まった。

主席は氏の挨拶に答礼してその手を強く握り、風邪を引いているということですが、身体の具合はいかがですかと、見舞いの言葉をかけ、「あなたは新聞記者ですが、きょうは親友として新年を一緒に迎えましょう」と言った。

主席の全身と太い声から春の日ざしのような人間味を覚え、その謙虚でぎっくばらんな人柄に感嘆した氏は、新年を子どもたちと一緒に迎える偉大な政治指導者にこのようにお会いできて感動を禁じえません、と述べた。

主席は、「有難う。子どもたちと一緒にいると若返るようです。高木先生も10年ほど若返ったことでしょう」と言って豪快に笑った。

氏は自分の気持ちがおのずと主席に引かれるのを覚えながら、世界にこのような偉大な人民型の指導者もいるのだなあと、目頭が熱くなった。

人民といささかの距離も置かず、彼らの中にいることを真の楽しみ、喜びとする方、初めて会った人も直ちに旧知のようにぎっくばらんに話し合える雰囲気をかもし出すおおらかなこだわりのない品格。

この日の子どもたちの迎春公演で高木健夫氏が知ることになった主席の風格は、かつて経験したことのない真の人民的指導者の新しい世界であった。

氏のこのような心情を理解するうえで、氏が日本の言論界が公認するアジア専門家であるという事実を見逃すべきではなからう。

北京法文学堂を卒業し若くして記者生活の第一歩を踏み出した時から頭髪が白くなる時まで、政治には一切左右されないという態度で南朝鮮、東南アジアの熾烈な戦場をはじめアジアのほとんど全域を巡り歩いた。

さまざまな事件を取材し、有名人を訪ねて駆け巡ったこの人生遍歴で、有名無名の多くの政治家、指導者に会いながらも、そのどの誰についても注目すべき記録をとどめることのなかった氏の以前の文筆活動が語るように、彼らは理念と主張、品格のどの側面においても氏に衝撃的な印象を与えることはなかった。

主席の人間的風格に消し難い印象を受けた高木健夫氏は、朝鮮で体験したことが今更のように思い返された。

氏が平壤に到着したのは1971年12月下旬であった。

平壤に到着した時に、病弱な氏は風邪を引いた。このことを知った主席は氏をホテルから国賓用の招待所に移し、精密な検診を受けるようはからった。

医師たちは氏の身体を精密に検診し、腸が衰弱していることを知り、それはそしゃくが不十分なことに原因があるとして、総入れ歯を行った。

12月25日の夕方に歯を抜き、29日には主席から贈られたリンゴを食べることができた。入れ歯としては驚異的なスピードであった。それまで長年リンゴの味を忘れていた氏は、胸の奥底にまでしみとおる思いがするあまずっぱいその味が、故国日本でも、自分を生み育ててくれた両親からも受けたことのない、慈しみ深い人間的愛情として胸にしみ渡る思いを噛みしめた。

氏はのちに、主席の配慮は決して異例的なものではなく、朝鮮

人民すべてが主席の愛に包まれ、それが一介の平凡な外国人記者である自分にまで及んだということに思い及び、朝鮮滞在中に受けた強烈な印象、主席と人民大衆との関係は慈父とその子たちとの間にだけ見られる愛と信頼の関係であり、それは自然に醸成された関係であると理解できた。朝鮮人民にとって金日成主席は、国家の最高指導者である前に血の通うやさしい慈父だったのである。

氏が朝鮮で会った人たち、幼い子どもたちから高齢の老人に至るまで、主席のことを語る際は、「われらの領袖」と呼んでいた。

氏は、主席に対する人民のこの呼称こそ、主席の無限の愛への人民の信頼と敬慕のこだまだと信じた。

氏は主席に会った感激をこう語った。

「わたしは世界の多くの政治家に会っているが、金日成元帥のように広い識見と豊かな人間味を持つ偉大な人物に会ったことはない。

その識見と全身にみなぎる人間愛は、ただ惹かれるという程度ではなく、人の心と魂を完全に魅了させるものであった」

このように氏は、主席の偉大な風格から真の指導者の新しい世界を発見し、生涯忘れられない衝撃を受けたのであった。

氏がチュチェ思想の真理性に共感し、その熱烈な信奉者、宣伝者となったのは、主席に完全に魅了されたことと無縁ではない。

氏は朝鮮の各地を取材する過程で主席への尊敬心を高め、チュチェ思想の正当性を確信するに至った。

高木健夫氏は平壤、咸興^{ヘムフン}をはじめ各地の工場や農村、文化機関を巡り、平凡な労働者たちの家庭も訪れて、「金日成元帥は常に

人民の中におられ、人民のための真の政治を行っていることを肌で感じた」と書いているように、朝鮮の至る所で主席の偉大な指導の足跡を見、降仙のカンソンチョンリマ作業班運動の先駆者、青チョンサン山里協同農場の管理委員長、著名な博士や教授たちに会い、彼らの誰もが主席の指導によって朝鮮は力強い前進を続けており、その中で自分たちの運命も開かれていると誇らしげに語るのを聞いた。

長期間の取材活動を通して氏は、主席の人民愛は単なる人間的な慈愛にとどまらぬ、人民大衆を導き彼らが主人となった新しい歴史、彼らの無尽の力に依拠して新しい世界を創造していく、人民の歴史を展開する、世にたぐいのない偉大かつ崇高な愛であり、その愛こそ長期にわたる苦難の革命闘争過程で鉄石の如く固まった、人民大衆こそ世界で最も知恵深く、力のある存在だとする確信に基づく、永遠の愛であることを感得した。

氏は、「そうだ、これこそチュチェ思想であり、その偉大な力である」と心の底で叫んだ。

このように現実を具体的に取材した過程は、崇高な人間愛から出発し、それを理念として人間中心の新しい歴史を創造していく思想の英才、領導の芸術家金日成主席の内なる世界を発見していく感激の日々であった。

こうして高木健夫氏はチュチェ思想に深く引き込まれ、その真理性を体得し、熱烈な信奉者へと転身していく意義深い日々を送ったのである。

26. ただただ驚くばかり

年が明けた1972年1月10日、高木健夫氏は再び主席の接見を受けた。

この日の接見は一国の指導者との場合に普通に見られる公式的な枠を完全に脱した、相互に血が通うような会見であった。

主席は氏の手を取って体の具合を尋ね、椅子に腰を下ろすとタバコを勧めたうえで、わたしは先生を友人として遇するつもりでしたが、何かと行き届かなかったことをお詫びします、先生はわが国に10日余り滞在し、多くのものを御覧になったでしょうから、まず、われわれにたいする御批判をたまわりましようと言った。

なんらの隔意もなく気さくに話す主席の言葉に感動し、高木健夫氏は、「批判はおろか感嘆したとも言えず、ただただ驚くばかりでした。貴国ではチュチェ思想によってすべてが立派に進んでいます。人々の心と心がしっかり合わさっていると言ってよいかも知れませんが、最高の指導者であられる元帥のお気持ちと勤労する人民の気持ちが一つに溶けあっているということ、またこの結合が慈父と子女間の結合以上に強いということ、このような心情を抱く人が一人や二人程度ではないということ、ここに貴国が収めた巨大な成果の基本的な秘訣があるのではなかろうかと思えます」と述べた。

この言葉には真情がこもっていた。氏は語を継いだ。

「1年は365日ですが、金日成元帥にとっては1年が600日、700

日にも相当するのではないのでしょうか。まことにこれは超人的です」

こう言った氏は、上下が指導し指導を受ける関係ではない、はるかに温かく人間的なこうした関係は、朝鮮において他にはあり得ません、実に羨ましい限りですと語った。

主席は謝意を表し、今後わたしは決して慢心せず、国づくりに励み、先生の高い評価に応えたいと謙虚に語り、あなたがたはわれわれの現地指導について多く話しましたが、われわれは指導というよりは人民に学ぶために大衆の中へ入っていくのですとし、「われわれの教師は人民大衆です。われわれは常に彼らから学んでいるのです」と力をこめて言った。

主席は、朝鮮労働党がこれまで主観主義に走らず、過ちを犯さなかったのは常に人民大衆と呼吸を同じくしたことにありとて、その例を具体的に挙げた。それらの例の一つひとつは、常に人民大衆を固く信じ、彼らの力と知恵に依拠して革命と建設を勝利一すじに導いてきた輝かしい指導の生きた歴史であり、チュチェ思想の偉大な生命力を実証するものであった。

主席は4時間もの長時間をかけて、チュチェ思想とその具現で達成した革命と建設における成果について語り、祖国の統一と国際情勢に関する意見も述べた。

主席の言葉にはチュチェ偉業の正当性と勝利への確信がこもっていた。

主席の話聞いた高木健夫氏は、自分がすっかり生まれ変わったような思いにとらわれ、目の前には、チュチェの日ざしを生命力とし新しい歴史が開かれていく時代の荘厳な様相が浮かんでくるかのようであった。そして、時代の先頭に立ってチュチェ思想

を普及するためにペンを取る言論人として生き、たたかおうという衝動を覚えた。

氏はこれと関連して朝鮮の関係者に語った。

「わたしは日本に帰ったら尊敬する金日成元帥についての長い文章を書くつもりです。これはジャーナリストとしてのわたしの良心であり、義務です」

主席の接見を受けた席上でも氏は自分のそうした決意を語った。すると主席は両手を振って、「わたし個人についてはあまり書かないで下さい。わたしはただ地味に暮らしたいと思っています」と言った。

主席のその謙虚な態度に魅せられて氏はいつそう強く決心した。

その日、『読売新聞』（1972年1月10日）には、高木健夫氏と主席の間に行われた会見の様態を伝える記事がでかでかと掲載された。

日本に帰国した氏は直ちに執筆にとりかかり、知友たちにこう語った。

「今、一部の人は共産主義者と言えばヒューマニズムに欠け、革命達成のためには思いやりというものも慈悲も知らない人間たちだと誹謗しているが、しかし真のヒューマニズムは共産主義者が体現しており、その典型は尊敬する金日成元帥だ。元帥は人間中心のチュチェ思想を創始し、その思想を大衆指導に立派に具現して革命と建設で奇跡のような成果を挙げている。

金日成元帥のこのような人間に対する愛と大衆指導の歴史をこそ、わたしは書きたいのだ」

氏はこのような心情から表題を「首相と人民」とし、そこに「領導の芸術家 金日成」というサブタイトルを添えた。

氏の一生は執筆に始まり執筆で暮れ、その過程でさまざまな感情を体験しているが、この時のように興奮し、情熱に駆られたことはかつてなかった。

時には走らせていたペンを置き、取材当時の感動を噛みしめ、部屋の中を行きつ戻りつし、涙を浮かべもした。

実にその一日一日は、氏にとって金日成主席の高邁な徳性をさらに深く味わい、主席への敬慕の念をいっそう厚くした日々であった。

当時氏がいかに興奮していたかは、400字詰め2000枚に達する膨大な原稿をわずか1カ月余りで脱稿したことから理解できるであろう。

主席へのこの上ない敬慕の念で貫かれたこの書は、60年に及ぶ文筆活動で氏が初めて物にした偉人絶賛の物語として、そこには人民が運命を全的に託して従う真の指導者の新しい世界を発見した感激と歓喜が格調高く綴られている。

実際、氏はそのことに無上の誇りを覚え、その誇りをたたかいかいをもって守り通した。

高木健夫氏の文は、金日成主席の誕生60周年を迎えた1972年4月15日から6月1日まで数十回にわたって『読売新聞』に連載された。この文は後に『領導の芸術家 金日成物語』という表題で出版された。

数百万部の発行部数を誇る日本の一流新聞にこの文が連載され始めたことに驚いた南朝鮮傀儡一味と日本の反動層は、連載を中断させようとありとあらゆる策を弄した。

しかし氏は、彼らのたえまない脅迫と恐喝をはねのけて初志を貫いた。

氏が『週刊読売』に掲載した「チュチェの国」という記事で、南朝鮮のいわゆる「政権」をアメリカの侵略政策の道具だと決めつけて糾弾するに及んで、彼らのあがきは極度に達し、氏の生命を脅かすまでに至った。氏は住宅を抵当に供する程の経済難にも遭遇し、夫人を病気で失う不運にも見舞われたが、いささかも動揺せず、いわんや敗退することもしなかった。

共産主義者でもない氏がこのように断固たる立場を堅持しえたのは、正しいと信じたことはあくまでも貫かずにはおかないという良心にのみよるものではなかった。

金日成主席は氏との談話席上、国際情勢について語り、今日のアジアは昨日のアジアではない、その様相は根本的に変わった、今やアジア人民は自主性の旗のもと、独立し繁栄する新しいアジアを建設するであろうと語った。そして大勢は当時、主席の予言通りに流れていた。

この事実を前にして氏はいたく感嘆し、「このように国際情勢についての確かつ明確に予言した人物は尊敬する金日成主席のほかにはいない」と興奮して知友たちに語った。

こうして氏は、チュチェ思想を信奉することは絶対に正しい道であり、自分の行動は真理を守るたたかいだという信念を一段と固めたのであり、そのような信念が氏をして、試練にめげず決然と前進する力と勇気をはぐくんだのであった。

高木健夫氏が40余年間どっぷりと漬かっていた記者生活を潔く振り切って日朝文化交流協会結成の発起人の一人となり、理事長の重責を担うことになったのも、まさにこのような確固とした信念によるものであった。

27. 統一朝鮮との「不可侵条約」を

1940年京大を卒業し、63年社会党から鹿児島一区で衆院に初当選した川崎寛治氏は、70～77年の国際局長時代に第3世界外交の推進役を担当して、その間朝鮮を訪れ、1986年からは社会主義理論センター所長として「社会党新宣言」の具体化に当たった。

1972年の初め、日本の国会は沖縄返還協定を巡って荒れ、他方、中国の国連復帰で世界の情勢は大きく変わりつつあった。

そうした中、衆議院議員・日本社会党国際局長の川崎寛治氏は金日成主席と会見すべく朝鮮に向かった。

出発に先立って氏は、田中角栄通産大臣に会い、日朝貿易を進めるために通産官僚の相互交流を行うべきだと提案した。

東京を出発して北京で正月をすごした氏は、社会党国際副部長で『社会新報』の北京特派員をしていた館林千里氏と北京から同行した。

1972年1月11日、両氏は念願がかない、金日成主席の接見を受けた。

氏は政府庁舎に到着し、エレベーターから出たとたんに主席の出迎えを受けてすっかり恐縮し、この方は確かに人の心をつかむ偉大な人物だと敬服した。そして、よく陽に焼けた健康そうな体躯と丸いメガネに特別な親しみを覚えながら、軽い気持ちで質問した。

「閣下は国連にどう対処するお積りなのでしょうか」

国際的に注目されている朝鮮の対国連動向問題に、主席は沈着な表情で、中国の国連復帰でアメリカの指揮棒に従っていた国連は変わるだろう、わが国としては国連に加入してもよく、加入しなくてもよいと淡々と答えた。

その強い民族的自負と勝利の確信に、氏は深く感動した。感動冷めやらぬまま氏は再び質問した。

「アジアの平和のために、日本と朝鮮が不可侵条約を締結する意向はございませんでしょうか」

主席は、日本が南側とは軍事同盟を結び、北側とは不可侵条約を締結するというのでは困る、統一朝鮮と日本との不可侵条約なら一考に値する、と答えた。

統一朝鮮との不可侵条約という主席の言明に、川崎寛治氏はすがすがしい衝撃を受けた。なんと明快な回答であり、肝の太い見地であろうか。

駐日米大使館の政治担当書記官が、帰国した氏を訪ねて、朝鮮に変化が見られるのでいろいろ聞かせてほしいと、根掘り葉掘り質問した。しかし、日本の外務省は全く反応しなかった。

半年後、北南朝鮮両政府によって、平和統一に関する共同声明が発表された。

金日成主席があの時、統一朝鮮との不可侵条約をと言ったのは、このことを念頭に置いて答えたのではなかろうかと振り返り、氏は、統一にかけた主席の思いの深さに強く胸を打たれた。

28. 久野忠治の所感

1972年1月、朝鮮を訪問して金日成主席の接見を受けた日本の人士の中には、日朝友好促進議員連盟会長であった久野忠治氏もいた。

1910年愛知県に生まれ、49年以来、90年に引退するまで14回も衆議院に当選した氏は、自民党では珍しい朝鮮民主主義人民共和国とのパイプ役で、71年から超党派でできた日朝友好促進議員連盟会長、自民党総務局長、選挙制度調査会長、衆院予算委員長などを歴任した。

日朝友好促進議員連盟代表団団長として朝鮮を訪れ、金日成主席に謁見した久野氏は、その時の所感を次のように述べている。

1972年1月、わたしは、日朝友好促進議員連盟代表団の団長として朝鮮民主主義人民共和国を訪れ、親しく金日成主席にお会いすることができた。

金日成主席はまことに若々しいばかりか、ますますご壮健で、国事を指導しておられた。

われわれを接見された金日成主席は、おおらかに笑みをうかべながら、親しみをこめてわれわれと握手をされたが、その温かく大きな手の力づよさは、主席がいかにお元気であるかを感じさせるものであった。

同時にこの力づよさは、困難な建設と革命事業で人民を常に勝

利へ導いてこられた確信にみちた偉大な指導者のものであった。

接見当初からわれわれを大きく包みこむようで、はじめてお会いした感じを抱かせない、まるで旧知の間柄のような親近感を感じさせる大きな度量、国内問題、国際情勢、とくに日本との問題などを明快に強い説得力をもって、しかもユーモアをまじえながら論じるするどさ、われわれをぐんぐん引っ張っていく主席は、まさに英明な現代の指導者のなかの指導者だと、つくづく感じさせられたものである。

共和国を訪れてみて、実際に朝鮮人民の主席によせる敬愛の情が、いかに強いか身をもって感じたが、金日成主席にたいする人民の敬慕の念はまさに当然のものであった。

われわれは、朝鮮人民が、朝鮮戦争の廃墟のなかから、敬愛する金日成主席の指導のもとに、歴史上、類例のない速さで朝鮮を社会主義工業国にかえた姿を実際にみて、金日成主席の指導の偉大さに、いまさらのように敬服したものである。

金日成主席は早くから祖国解放と革命活動の困難な道に入り、その闘争を勝利へ導くなかで偉大なチュチェ思想を創始された。

このチュチェ思想は、自国の革命と建設にたいして主人らしい態度をとるといふ『チュチェの確立』、すなわち、すべての問題を自主的立場と創造的立場に立って、主として自らの力で、自国の実情に即して解決してゆくという思想である。

これは苦難の歴史をへた朝鮮民族の英知を反映したものであり、ひとり朝鮮人民だけでなく、われわれ日本国民にとっても非常に貴重で深奥な思想である。

金日成主席のこのチュチェ思想にもとづいた賢明な指導があっ

たからこそ、朝鮮のこんにちの発展がもたらされたのであろう。

しかし、この思想は、ただ共和国の革命と建設を勝利に導いただけでなく、こんにち世界の複雑な情勢を解明するうえで重要な思想である。

金日成主席はチュチェ思想にもとづいて常に原則を堅持しながら、同時に現実合った非常に柔軟で幅のある政策を打ちだしておられる。

朝鮮の自主的な平和統一について、統一を願うものであれば、だれでも直ちに受け入れることのできる、実に現実的な提案をしておられるのも、そのひとつである。

現在の不幸な日本と朝鮮との関係についても、主席は善隣友好関係を確立するために、きわめて妥当な提案をされた。

いま日朝友好を要求する声は、日本国民のなかでも高まっている。日朝友好関係にも、まさに、すべての氷を解かす春が近づいているのを切実に感じさせられるのである。

わたしは金日成主席が、ますます壮健に長寿なさるよう願ってやまない。

29. 「近くて遠い隣国」は非正常な事態

金日成主席との会見を要望し、朝鮮記者同盟中央委員会を通して主席に質問状を提出していた高木健夫氏ら『読売新聞』の記者たちは、1972年1月10日、主席の接見を受けた。

主席は、『読売新聞』記者の質問は非常に広範囲にわたり、多くの問題がそこにこめられている、便宜上、幾通りかの内容にまとめて答えるとして、一つ一つ回答を与えた。主席は、国際問題については、今、進歩勢力と反動勢力間の力関係に大きな変化が起きているとして、こう語った。

「現代になって、帝国主義勢力は衰退しており、平和と民主主義、民族独立と社会主義をめざす人民の力は成長し強化されています。

朝鮮戦争で歴史上初めての惨敗を喫したアメリカ帝国主義は、世界の至る所で連続的な打撃を受けて敗退しており、下り坂を転げ続けています。

現在、アメリカ帝国主義は、内外的に重大な危機に直面しています。アメリカ国内では人民の反戦運動が力強く繰り広げられており、支配層内部の矛盾も深刻になっています。経済は慢性的な沈滞状態に陥り、国際収支はたえず悪化しています。アメリカ帝国主義は、インドシナをはじめ世界の至る所で惨敗を重ねており、帝国主義の仲間からはもちろん、追随諸国からも孤立しつつあります」

主席は、核脅迫とドルの力で他国を抑え、率いていたアメリカ帝国主義も今や力が弱まって、核脅迫も通用しなくなり、手持ちのドルもゆとりがなくなっている、今ではアメリカ帝国主義者に追隨する国もあまりいなくなった、アメリカ帝国主義は窮地から抜け出そうと、アジアではアジア人同士をたたかわせ、中近東では中近東の人同士をたたかわせようという悪名高いニクソン・ドクトリンを打ち出しているが、佐藤のような愚かな人間を除いては受け入れようとする者がいない、アメリカ帝国主義は窮地からの脱却をはかって、今度は「平和」の看板をかかげ、ニクソンは腰を低くして哀願外交をせざるを得なくなった、しかしこれは決して、アメリカ帝国主義が完全に滅亡したとか、本性が変わったことを意味するものではない、アメリカは依然として帝国主義の元凶として存在しており、彼らの侵略性はいささかも変わっていない、元来帝国主義者は苦境に立つと、「平和」の看板をかかげ、その裏で侵略と戦争の策動を狡猾に進めるものだとして、こう述べた。

「今アメリカ帝国主義者も二面政策を用いつつ、より狡猾に他国を侵略しようとしています。それゆえ、革命を行う国の人民とたたかうすべての国の人民は『平和』の幕裏で企んでいる、アメリカ帝国主義の新たな侵略と戦争策動に常に警戒心を高めなければならず、固く団結してアメリカ帝国主義に反対する闘争をさらに力強く繰り広げなければなりません。このようにしてはじめて、平和を守り、民族独立と社会進歩をもたらすことができます。

アメリカ帝国主義は、アジアでニクソン・ドクトリンを実現するにあたって、日本軍国主義に特別な意義を与えています。

アメリカ帝国主義者は、すでに久しい前から日本軍国主義をアジア侵略の『突撃隊』に仕立てる芝居を演じ、日本軍国主義者はこれに便乗して自己の野望を達成しようと策してきました。数日前に行われた米日首脳会談は、従来より気抜けはしていますが、アジア侵略のための米日侵略勢力のこのような共謀、結託が変わっていないことを示しています。この会談ののちに発表した『共同声明』で、ニクソンと佐藤は『平和』と『安定』の看板のもとに悪名高い『米日安保条約』を再確認し、アジア侵略で互いに『緊密に協力』し合うことを誓いました。

アメリカ帝国主義の庇護のもとに日本で軍国主義が復活し、アメリカ帝国主義のテコ入れで日本軍国主義者がアジアの危険な侵略勢力として登場していることは、厳然たる事実であります」

主席は、帝国主義者の通例にもれず、今、日本軍国主義者も他国の侵略をめざし、商品と資本を大々的につぎこむことで経済的に従属させ、思想的・文化的浸透を強めてその国人民の自主意識を麻痺させ、さらには経済権の保護を口実にして侵略兵力を送り込む手口を用いており、現在日本軍国主義の海外侵略の第一の対象は朝鮮であるとして、こう続けた。

「日本軍国主義者は今、南朝鮮傀儡一味と共謀、結託して、政治、経済、文化、軍事などあらゆる面にわたって、わが国の南半部に侵略の手を深く伸ばしています。彼らはまた、わが国とアジアの社会主義諸国を侵略するための作戦計画の作成まですませ、連続的な戦争演習騒ぎを繰り広げています。はなはだしくは、佐藤のような人は、わが国に対する『先制攻撃』についてまで云々しています。

事実がこうである以上、今になっては日本軍国主義が復活したか、復活していないかということで論議する時はすでに過ぎ去りました。要は、復活した日本軍国主義の侵略策動に反対し、それを阻止するためにたたかうことであります」

主席は、日本軍国主義者の侵略策動を阻止するうえで、日本人民のたたかいは非常に重要である、すでに他の機会にも話したことだが、日本人民は過去の日本人民ではないと強調した。

「日本人民は、軍国主義の海外侵略による苦痛と悪結果を味わった人民であり、目覚めた人民であります。日本軍国主義者が再び侵略戦争を引き起こそうとするならば、日本人民は黙ってはいないでしょう。日本人民は今、軍国主義侵略勢力に反対し、民主・中立・平和のために力強くたたかっています。このたたかいは、日本の反動支配層に大きな圧力を加えています。

日本の支配層の内部でも侵略戦争を行うべきか、どうかという問題で互いに意見が対立しています。日本は島国であり、工業原料のほとんどを外国から輸入している状況のもとで、いったん戦争が起これば境遇が非常に苦しいものになるであろうし、侵略しようとする対象もとてもあなどりがたいところから、戦争に反対する人もいるようです。事実、今日のアジアは昨日のアジアではなく、その面貌は根本的に変わりました。

日本で戦争に反対するすべての勢力が団結し、朝鮮、中国をはじめアジアの人民が力を合わせてたたかうならば、日本軍国主義者がいくら戦争をしようにも、あえて戦争を引き起こすことはできないであろうし、その侵略策動を十分破綻させることができるでしょう」

主席は、今日アジアは反帝革命闘争の基本舞台となっており、アジアにおける情勢発展は全般的な世界情勢の変化に非常に重要な影響を与えているとして、朝鮮をはじめアジアの社会主義国と、たたかう国の人民は、折り重なる難関と試練に打ち勝ちながら、反帝革命闘争と新しい社会建設で輝かしい勝利を収めていると評価した。

主席は、朝鮮と日本の関係問題についてはこう語った。

「日本はわが国の隣邦であります。しかし、あなたがたが言っているように、現在われわれ両国は、『近くて遠い隣国』となっています。これは、きわめて非正常な事態だと言わざるをえません。

歴史的にみて、わが国は日本の侵略を受けた国であり、日本はわが国を侵略した国であります。しかし、かつてわが国を侵略したのは、日本の帝国主義者であって人民ではありませんでした。互いに隣り合っている朝鮮民主主義人民共和国と日本が正常な関係を結ぶのは、よいことであって悪いことではありません。

朝鮮民主主義人民共和国は、創建当初からたとえ社会制度は相異なっても、日本とも善隣関係を結ぶことを希望してきました。われわれのこのような立場は、平等と互惠の原則に立ってわが国に友好的なすべての国と親善関係を結ぶ、わが共和国の公明正大な対外政策に基づくものであります。

しかし遺憾なことに、日本政府は、最初からわが国に非友好的な態度をとってきました。吉田から岸、池田をへて佐藤に至るまで、内閣は幾度もかわりましたが、わが国に対する日本政府の敵視政策には何らの変化もありませんでした。

佐藤内閣に至っては、わが国に対する敵視政策がいつそうひどくなっています。日本政府は、南朝鮮傀儡一味と『韓日条約』を締結して南朝鮮に浸透しており、国の統一に反対し、同族あい争う戦争を挑発しようとする南朝鮮傀儡一味をそそのかしています。日本の首相佐藤と彼に追従する人々は、朝鮮民主主義人民共和国に反対する戦争に加担することを公言しており、朝鮮人民をみだりに侮辱しています。

今日までわが国と日本の中に善隣関係が結ばれていないのは、全面的にわが国に対する日本政府の敵視政策のためであります」

主席は厳しい表情をし、太い声で話を続けた。

「朝日両国間の関係問題に対するわれわれの立場は明白であり、また一貫しています。われわれは今も、両国間の非正常な事態を一日も早く終わらせ、正常な関係を打ち立てることを願っています。われわれは、それが両国人民の志向と利害関係に合致し、アジアと世界の平和のためにも有益だと信じています。

朝日両国間に友好的な関係を打ち立て、さらには国交関係を樹立するためには、何よりもまず、日本政府がわが国に対する態度を改めなければなりません。

日本で内閣が変わるかかわらないかは、日本の内政問題であるので、われわれはそれに干渉しようとはしません。要はわが国に対する日本政府の態度であります。日本で首相が入れかわったとしても、わが国に対する政策が変わらなければ、両国間の関係は改善されません。日本政府がわが国に対して友好的な態度をとるならば、すべての問題が順調に解決されるでしょう。

日本政府は時代のすう勢に即して自己の誤った政策を改めなけ

ればなりません。日本政府は当然、朝鮮民主主義人民共和国に対する敵視政策を捨てるべきであり、『韓日条約』を廃棄して南朝鮮再侵略の策動をやめなければならず、南朝鮮傀儡一味をそそのかして朝鮮人同士をたたかわせ、そこにわりこんで利をむさぼろうとする愚かな行為を止めなければなりません」

当時、日本軍国主義者は在日朝鮮学生に対する民族的迫害と悪辣な弾圧策動をやむことなく強行していた。

東京ではおよそ30名の日本人不良学生が東京朝鮮第1初中級学校中級部の3人の生徒に襲いかかり、よってたかつて袋叩きにした。

東京国士舘高校の20余名の不良学生は、「朝鮮学生を殺せ」と叫びながら、東京朝鮮中高級学校高級部の7人の生徒に集団暴行を加えたうえ、彼らの制服と所持品を奪い去る白昼強盗さながらの暴行を働いた。

東京朝鮮中高級学校の生徒に対する国士舘高校の不良学生らの暴力行為はその後も相次いだ。

日本反動支配層は在日朝鮮公民を常時民族的に差別し、暴圧機構を動かし無頼漢を駆り出して在日同胞と学生を刺殺し、撲殺し、集団暴行を加えるなどのおぞましい蛮行を毎日のように働いていた。

佐藤政府は「国際勝共連合」の無頼漢をそそのかして、朝鮮大学校に侵入し悪辣な挑発行為を働かせ、これに注意を与えて制止する朝鮮大学校教員を逮捕する暴挙をあえてした。

これら盗人猛々しいと言うべき非道な行為は、民族排外主義思想が骨髓に徹した日本軍国主義者ならではの由々しい挑発行為で

あった。

こうして、罪のない在日朝鮮学生が重傷を負っては入院治療を受ける事態がひんぴんと起こり、朝鮮学生は安心して学校に通えない重大事態が生じていたのである。

在日朝鮮学生に対する日本人不良学生の大規模の集団暴行は、日本における軍国主義化とファッショ化が強まっていることの必然的な結果であり、朝鮮公民の民主的民族教育を抹殺し、朝日両国人民の離間反目を引き起こす行為であった。

佐藤政府は朴^{パク}正^{チョン}熙^ヒ傀儡一味と結託して在日朝鮮人に「永住権」申請を押しつけ、「韓国国籍」を持つよう強要する一方、彼らの民主的民族教育を抑圧するための「外国人学校法」「出入国管理法」などいまだかつてなかったファッショ悪法をつくり出して在日同胞の弾圧を合法化しようと策し、また、佐藤政府の策動で、在日同胞の祖国への帰国はほぼ3年間中断状態に置かれた。

日本軍国主義者は、ニクソン・佐藤会談後、アメリカのアジア侵略の「突撃隊」の先頭に立つべく、国内のファッショ化を推し進め、南朝鮮傀儡との軍事的結託を一段と強める一方、南朝鮮再侵略の道を拡大しようと企てていた。

彼らはこのように侵略的目的の達成をはかり、国内で軍国主義侵略思想と民族排外主義を鼓吹する一方、総聯と在日同胞への弾圧を強めたのである。

しかし、日本の進歩的人民は反動政府の反人倫的な犯罪行為を糾弾、排撃するたたかいを積極的に進めた。

金日成主席は、日本人民と進歩的階層の中で朝鮮民主主義人民共和国と善隣関係を結ぶための運動が広範に繰り広げられている

として、先頃は234名の与野党出身国会議員が参加する日朝友好促進議員連盟が立ち上げられ、地方議会でも朝鮮民主主義人民共和国との国交関係締結を要求する決議が採択されていると述べ、朝鮮人民と日本人民が共同で強力な闘争を繰り広げるならば、両国間に国交を樹立することは可能であると言明した。

主席は、両国間の国交関係が樹立すれば、日本政府がわが政府に対してとってきた従来の誤った政策は水に流すであろう、国交の樹立以前でも、両国間に友好的な関係を打ち立てることはできる、現在の諸種の事情からして、朝日両国間に国交を結ぶにはある程度時間がかかるであろう、われわれは、日本と国交を結ぶ前でも、可能な範囲で相互往来をひんぱんにし、経済、文化の分野で交易・交流を広く行う用意があるとして、こう語った。

「朝日両国間の友好関係はあくまでも相互主義の原則で結ばなければなりません。現在、両国間に部分的な交流が行われていますが、日本政府の間違った態度によって一方的な性格をまぬがれていません。日本政府がアメリカの機嫌をそこねるのをおそれているためなのか、南朝鮮傀儡一味の機嫌をそこねるのをおそれているためなのかわかりません。このような方法では、決して両国の関係問題を解決することができないのは明白であります。

結局、その具体的な手順はどうであれ、朝鮮と日本両国間に善隣関係が樹立されるかどうか、それが早くなるか遅くなるかは、もっぱら日本政府の態度にかかっています。

日本にいる60万の朝鮮人問題について言うならば、それは本質上、過去わが国に対する日本帝国主義の植民地支配の結果生じた問題であります。在日朝鮮公民は今日、厳然として自己の祖国を

持っているにもかかわらず、外国人としての当然の待遇を受けていません。これもやはり、わが国に対する日本政府の非友好的な態度に起因するものです」

主席は、在日朝鮮公民は自らの民主主義的民族権利を守るため、折り重なる難関に打ち勝ちながら力強い闘争を繰り広げてきた、特に朝鮮民主主義人民共和国の海外公民団体である在日朝鮮人総聯合会を結成し、在日朝鮮人運動にチュチェ思想を立派に具現し、^{ハンドクス}韓徳銖議長を中心に固く団結して民主主義的民族権利を守り、祖国の平和的統一を早め、日本人民をはじめ世界の進歩的人民との国際連帯を強めるためのたたかいで大きな成果を収めたと評価し、総聯の指導のもとに、在日朝鮮公民が日本政府のさまざまな妨害策動にもかかわらず、こうした成果を収めたことは、日本人民と進歩的政党・社会団体および各階層人士の積極的な支持声援があったからであるとして、次のように述べた。

「われわれはこれに対して非常にありがたく思っており、この機会に『読売新聞』を通じて日本の友人たちに心からの感謝の意を表します」

主席は、日本にいる朝鮮公民が自己の民族的権利を守るのは当然であり、国際法にもかなうものである、おそらく海外に住む日本人も、自己の権利を守ろうとし、放棄しようとはしないであろう、これはどの民族にしても同様であると強調し、日本政府の反動層が、南朝鮮の傀儡一味と結んで在日朝鮮人に「永住権」申請を押しつけ、「韓国国籍」を強要している問題、形式のうえでは国籍選択の「自由」を標ぼうしながらも、内幕をみると、在日朝鮮人が「韓国国籍」を持てば特別待遇をし、朝鮮民主主義人民共

和国の国籍を持たば不当な圧力を加えている問題、日本にいる一部の朝鮮人がこのことがわずらわしくて「韓国国籍」を持つようとしている問題などについて分析を加えた。

また、ひところ閉ざされていた在日朝鮮公民の帰国の道が朝日両国の赤十字団体間の合意によって再び開かれるようになったが、これは、在日朝鮮公民の民族的権利を守るうえではもちろん、朝鮮人民と日本人民との友好関係を発展させるうえでもきわめて望ましいことであるとし、われわれは今後も、日本人民の支持のもと帰国を希望するすべての在日朝鮮公民がみな帰国できるよう、この事業が継続されることを望んでいると語り、こう続けた。

「日本にいる朝鮮公民の中には、いろいろな事情のため今直ちに祖国へ帰ってくるのでできない人たちもいます。だからといって、彼らの祖国への往来の権利まで奪ってはならないでしょう。今、日本に暮らしている外国人のうち、祖国への往来の自由がないのはひとり朝鮮公民だけです。こうした不当な差別措置と人権じゅうりん行為は、直ちに中止されなければなりません。清津チョンジンと新潟間を行き来する帰国船が、祖国に帰ってくる人だけに乗せてくるのではなく、祖国にいる家族、親戚、親友を訪問して再び日本に帰る人もも乗せて往来できるようにならなければなりません。

われわれは、日本にいる朝鮮公民の民主主義的民族権利を守るうえで、総聯の意見を尊重します。われわれは、日本人民と進歩的な政党、大衆団体および各階層の人々が、今後も総聯とよく協議し、在日朝鮮公民の正義のたたかいに、引き続き貴い支持と声援を与えるであろうと信じます」

30. 金日成主席に魅せられて

1972年1月、超党派国会議員で構成された日朝友好促進議員連盟の事務局長安宅常彦氏は、自民党の久野忠治氏を団長とする日朝友好促進議員連盟第1次朝鮮訪問団の書記長として訪朝した。

一行中安宅氏を除いて以前に金日成主席に会った人はいなかった。

主席との会見後彼らは、抗日武装闘争を戦い抜いた勇猛な将軍とは到底思われぬ、近寄りがたいいかめしい人物だろう、などと自分なりの考えを抱いていたが、実際に会ってみると、理路整然とユーモアを交えて話を進める主席を目の当たりにして、なんてすごい人だろう、世界でも屈指の大政治家だと口を揃えて称賛し、主席のすぐれた人柄にも深い感動を覚え、その印象を語り合いながら帰国の途についた。そんな彼らの姿を見て、安宅氏は深い思いに沈んだ。

主席に謁した人は例外なく主席への深い尊敬心にとらわれているが、その理由は一体どこから来ているのだろうか。

「金日成主席は偉大な政治家だ。安宅君がわたしに言ったまさにその通りだ。長い政治生活でこんな感激を覚えたのは初めてだ」と語った久野忠治団長の言葉がよみがえった。

久野忠治氏は、主席が玄関に出て一人ひとりの手を取るのを見てびっくりしていた。

安宅氏は、主席から「あなたはこの前にも会いましたね」と言

って肩をたたかれ、天にも昇る心地だった。

氏は随行したカメラマンが、そのときの光景を撮ったことを思い出し、帰国後頼んでコピーフィルムを手に入れ、ときどきそれを映写して友人たちにも見せた。見た人たちは誰もが氏を羨んだ。

氏の追憶は続いた。

日朝関係、南朝鮮情勢、国連軍の帽子をかぶって南朝鮮に駐屯している米軍の挑発行為、朝鮮の歴史的経験から主体性の確立がいかに重要な問題として提起されたかということについて、それに雄大な社会主義建設の状況、日朝両国人民の友好関係を促進することがアジアの平和と朝日両国の将来にとってなぜ重要であるかなどを懇切に説き明かした主席の言葉……

愉快的エピソードを交えながら話す主席にひきつけられて、いつ緊張がとけたのか、一同は夢中になって耳を傾け、ときどき爆笑があがりもした。

久野団長が、約束した時間が過ぎたのも忘れて、各党から一人ずつ感謝の言葉と決意を述べるようにしたいと言ったとき、安宅氏は腕時計を指して、時間だと久野団長に目くばせした。すると、主席はそれに気づき、時間は気にしなくてもよろしい、心置きなくどうぞお話し下さいと促して、一人ひとりの言葉を微笑を浮かべて聞き、あなた方のお言葉に感謝します、有難う、と謝意を表しさえした。そのおおらかな親しみにみちた主席の姿が浮かんで、長いこと頭から離れなかった。

かなり以前のことであるが、氏は金日成主席が チョンサンリ 青山里党総会で行った演説を収めた小冊子を多数入手して、日本の青年たちに読ませたことがあった。彼らの反響は大きかった。「とても分かり

易い。一国の領袖が農村の実情を何もかも手に取るように把握している。なんとも大したことだ。朝鮮農村の現実をこの目でじかに見たい。ほかに資料はもっとないのか」という声があがり、それがきっかけで、「朝鮮の農業と日本」というテーマをもって何度か座談会が開かれもした。

こうして日本の片田舎でも金日成主席のことが知られるようになった。

安宅氏は主席の接見を受けることで主席をもっとよく知り、その賢明な指導のもとに暮らす朝鮮人民はなんと幸せな人たちだろうかと羨望するまでになり、朝鮮の発展と自主的平和統一の実現を確信し、日朝両国人民の連帯を深める運動に生涯を捧げようとの決心を固めた。

31. 日本人民に対する朝鮮人民の親愛の情

1972年2月、雑誌『世界』には、美濃部亮吉東京都知事の長文の「金日成主席会見記」が掲載された。

美濃部亮吉氏は1971年10月25日から3週間にかけて朝鮮と中国を訪問したが、氏の朝中両国訪問は各方面の注目を引き、大きな波紋を呼んだ。

美濃部氏は東京都知事としてはじめて朝鮮を公式訪問し、2日間金日成主席と会見した。

1日目の会見は10月30日、朝鮮民主主義人民共和国内閣庁舎でおこなわれた。それは午餐会を含めて4時間半に及ぶ会見であった。

2日目は翌31日、氏の宿所で行われた。

以下には「金日成主席会見記」のほぼ全文が転載されているが、便宜上内容を九つの部分に分け、それぞれに小見出しを付けた。

主席 日本の記者のみなさんは、はじめての訪問なので写真をたくさんとるようですね。

美濃部 これからひきつづきもっと訪ねるようになるでしょう。

主席 それはよいことです。たばこをどうぞ。

美濃部 わたしはたばこを吸わないもので……

主席 わたしはまず美濃部先生を団長とする一行のわが国訪問をありがたく思います。きょうこうしてあなたに会えたことをたいへんうれしく思います。

わたしはあなたがたとは初対面ですが、在日本朝鮮人総聯合会ハンドクスの韓徳銖議長とキムピョンシク金炳植副議長を通じて、あなたがたが在日朝鮮公民の事業に多くの支援をよせておられることをよく知っています。わたしはあなたと初対面ですが、あなたがたがわれわれの親友である韓徳銖議長とは旧知であり、親友であるため、日本人民の使節であるあなたを単に東京都知事としてばかりでなく、親友として迎えます。たいへんうれしく思います。

このたびのあなたがたのわが国訪問は、朝鮮人民と日本人民との親善をつよめる上で大きく寄与することと思います。

話しあいに入る前に、まずわれわれの同志を紹介します。(同席の幹部を紹介したあと)

健康のぐあいはいかがですか。

美濃部 ありがとうございます。わたしたちは貴国に到着してからいろいろ配慮していただき、たいへん気持ちよく、健康にすごしております。いま東京は、空気もよごれており、水もにごっておりますが、みんな平壤の清潔さと美しさに驚嘆しております。

主席 それはどうも。

美濃部 わたしはこのたび貴国を訪問することになりましたが、実は、5年前、わたしが東京都知事になったときから、できるだけ早く朝鮮民主主義人民共和国を訪問しようと考えていました。そうしてやっとこのたび貴国訪問が実現しました。今度わたしは三つの目的をもって訪ねて来ました。ひとつは、戦前に日本が朝鮮人民にたいしておかした数多くの過ちについて心からお詫びすることです。

わたしは1100万の東京都民と、そして1100万都民と志を同じく

する日本国民を代表して、朝鮮民主主義人民共和国を代表しておられる金日成首相に心からお詫びの気持ちを申上げるものです。これが、わたしのこのたびの訪問にあたっての第一の目的です。

二つ目は、東京と平壤、日本と朝鮮民主主義人民共和国はきわめて近い距離にあります。このように近い両国であるにもかかわらず、いまのところ日本から平壤に来るのに2～3日もかかる不自然で非合理的な状態にあります。それで一日も早く両国の関係を政治面で正常化し、文化、経済など各分野での交流を進めることが、アジアの平和を確立するための大きな問題の一つになると思います。そのため貴国と日本との関係を正常化するうえで何らかの寄与はできないものかというのが二つ目の目的です。

三つ目に上げたいことは、わたしは、1925年に大学を卒業して以来約40余年間マルクス経済学を勉強してまいりました。それ故にわたしは社会主義者であり、社会主義の実現を理想とする人間です。したがってわたしは戦争には絶対反対です。

もちろんわたしが、金日成元帥がなされたような活動はできませんでしたが、日本国内でわたしのないうることはやりましたし、反戦運動をやったという理由で2年間も獄中につながれたこともあります。わたしは今でも戦争には絶対反対であり、帝国主義に反対する立場に立っています。このような立場にたっているわたしとしては、貴国ですすめられている社会主義建設の早いテンポに非常な尊敬の念をいだいてきました。それで、直接自分の目で社会主義建設の状況を見たくもあり、また直接自分のからだで感じとってみよう、このように考えてきました。いうまでもなく、貴国と日本は社会主義と資本主義という体制の異なる国でありま

す。しかし、貴国ですすめられている社会主義建設が多くの点でわれわれにとってたいへん参考になるものと考えますし、その実際を見ることができるところをうれしく思います。

一昨日からいろいろなところを参観しています。工業農業展覧館、金日成総合大学を参観しましたし、昨夜は、歌と舞踊を見物しました。わたしは、お世辞でいうのではなく、金日成首相の指導されておられる社会主義建設にまったく頭がさがるばかりで、感心しています。

主席 ありがとうございます。

美濃部 わたしといっしょに来た小森君とも話したのですが、資本主義と社会主義の競争では、平壤の現状を見るだけで、その結論は明らかです。われわれは、資本主義の負けが明らかであると話し合いました。

これから残っている数日間に、できるだけたくさん見てまわり、非常に困難な状況にある東京都の建設にわれわれが利用できるものは、できるだけ利用したいという考えをもっております。わたしたちはいろいろと配慮していただいていることについて心から感謝の意を表するものであります。

主席 さきほど美濃部先生が、戦前に日本人が行ったことについて朝鮮人民に詫びると言われましたが、日本人民としてはわれわれに詫びることはありません。日本人民が朝鮮人民を侵略したのでもなく、朝鮮を侵略したのでもありません。それはあくまで日本帝国主義反動集団のしたことであって、日本人民がしたものだとは考えておりません。もちろん、宗主国であったため、そのようなすまないという気持ちをいただくかもしれませんが、朝鮮人

民も、日本人民も、人民はすべて善良でよい人民であるため、朝鮮人民と日本人民の間には、謝罪すべきこともなく、敵味方になるはずもありません。あるとすれば、日本帝国主義者がおかした犯罪的な行為があるだけです。これは過去においてばかりでなく、これからもありうることと思えば、朝鮮人民は日本人民と、過去にそうであったように今後とも親善的な関係を維持しなければならないと思います。われわれはこの問題について、このように理解しています。

わたしは日本帝国主義に反対して数十年間たたかいましたが、日本人民に反対してたたかったことはありません。われわれはつねに日本の共産主義者、社会主義者たちと手をたずさえてたたかいました。

さきほど、美濃部先生がマルクス主義者、社会主義者として活動してこられたといわれましたが、これはよろこばしいことであり、同志であると認めます。

われわれはいまでも、わが国の人民に過去について話す時、日本帝国主義と軍国主義にたいしては、反対しなければならないといいますが、日本人民とはどこまでも親善関係を保たねばならないと教育しています。そういうわけなので、あなたがたがわが国の各地を参観される過程で、朝鮮人民が日本人民の使節であるあなたがたをいかに熱烈に歓迎しているかを身近に感ずることができると思います。

32. 全人民の支持を受ける国づくり

美濃部 金日成首相のお話を聞いてたいへんうれしく思います。なぜなら、金日成首相が話されたように、東京都民もそうですが、日本国民の大部分が戦争に絶対反対し、平和を支持する人びとであると確信しているからであります。

ことしの4月、わたしが再選された選挙のさい、第一に民主主義をめざす憲法を守るべきであること、第二に平和を守るべきこと、第三に佐藤内閣の軍国主義政策に反対しなければならないこと、この三つを中心スローガンとしてたたかいました。その結果、有権者の65%がわたしに賛成投票しました。これは東京都民がいかに戦争を憎み、平和を愛しているかを示すものだと思います。しかし、国家としての日本は、平和をめざし、戦争に絶対反対する国だとはいえません。今日の状態からして残念ながらそうとはいえません。

……

主席 まったくその通りです。われわれは、今日の日本人民が過去の日本人民でないことをよく知っています。したがって、日本人民が少数の反動分子、支配層の戦争策動と軍国主義的な戦争政策にたいしブレーキの役割を十分はたしうるし、またそれを破壊しうる力量に成長していることもよく知っています。

われわれは、一貫して、日本人民が平和、独立、自主、中立をかかげてたたかっているのを支持声援しています。この点で、美

濃部先生の所感はわれわれと完全に一致していると思います。

われわれは常に、民主主義、中立、自主の道をめざす日本人民の闘争に大きな意義をみとめており、アジアで日本軍国主義が復活し再び侵略勢力として登場できないよう、これに反対してたたかうことが非常に重要なことだと考えており、それがアジアの平和に大きく寄与するものと考えています。とくに、日本の東京都民があなたのような、いわば、自主と独立を主張し、また帝国主義に反対する、そういう進歩的人士を東京都知事に推戴し、65%以上の賛成投票をしたということですが、これは、東京都民がいかに平和愛好的であるかをよく物語っています。われわれはこの事実に感嘆しています。これはよいことだと思うし、こんごさらに団結して闘争をうまくおこなえば、日本軍国主義の侵略的行動を阻止することができると思います。あなたに賛成投票したのが65%だということですが、実際にはもっと多いかも知れません。内心では賛成しながら棄権した人もいるだろうし、また圧力によって別の方向についていった人もありえます。このような人びとをみなあわせるならば、もっと多くなるだろうと思います。

美濃部 いくらそうだとしても、金日成首相がうけておられる程の支持をうけることはできません。(笑)

主席 とんでもありません。

わが国は、社会主義国です。わが国の人民は、8・15解放後20年の間、民主主義的で社会主義的な教育を受けており、社会主義制度を熱烈に擁護しているので日本のように複雑な状況にはおかれていません。

美濃部 わたしには、反対者が全くいないように思われます。

いくらか反対者はいるのですか。

主席 それはわかりません。

この20年の間に新しい世代が育ちましたが、この新しい世代は社会主義教育をうけているので、みなわが社会主義制度を熱烈に擁護しています。

わが国にはいまだに統一戦線体が存在しています。民主党もあり、青友党もあり、ほかの党もあります。かれらとの統一戦線はうまくいっています。われわれは社会主義制度をうちたてましたが、この社会主義制度に反対する人びとは極めて少数です。

帝国主義に反対する立場はみな徹底しています。帝国主義に反対しない人は一人もいないと思います。というのは、かつて朝鮮人民は被圧迫民族であったからです。このような点から見て、帝国主義に反対することでは共通しています。現在、社会主義建設においても、一致団結してすすんでいます。

美濃部 わたしは、自分の国である日本の東京にいる時は、わたし一人を護衛するため朝から夜おそくまで何人ものガードがついています。そのため、わたしには自由に行動するゆとりがありません。

主席 わが朝鮮民主主義人民共和国では、思想教育をまんべんなくつばにおこなっている所以人民はみな団結しており、よくないことをする人はごくわずかです。もちろん、いまのところ、わが人民の生活は裕福だとはいえません。しかし、わが人民は、食べるに困らず、衣服にこと欠かず、住む家があり、また学ぶ自由があり、治療を受ける自由があります。

.....

あなたはさきほど護衛する人のために自由に活動できないといわれましたが、きのう南朝鮮から来た同志のはなしによれば、南朝鮮の朴正熙パクチヨンヒが道を通るときにはサイレンをならし、3～4時間も人民の通行を禁止するので人民の不満がつのっているとのこと

です。

われわれにはそういうことはありません。

わたしは歩きます。わたしは建設場へも歩いて行き、商店へも歩いていきます。しかしこれまでテロにあったことはありません。学校へも急にでかけたり、工場へもでかけます。しかしわたしを射つ者はいません。これまでわたしは事故らしいものにあつたことはありません。それに人民は、わたしを射つ必要もありません。なんのためにわたしを射ちますか。わたしは人民のために服務しているので人民を恐れません。あなたもそうです。あなたが人民を恐れるのではなく、反動分子があなたを恐れるのです。

ここには反動分子がほとんどいません。わが国で反動分子がいなくなったのは、彼らをみな監獄に入れたからではありません。反動分子は戦争の時にその一部が南朝鮮へ逃げました。南朝鮮に反動分子がよりあつまってわれわれに反対しています。

ここにいた商工業者は、アメリカ帝国主義の爆撃によってみんな破産し、失業者になりました。われわれが共産主義、社会主義の政策をとって破産させたのではなく、アメリカ人どもがことごとく破産させました。そこで停戦後、かえって国が商工業者を助けてかれらの生きる道を開いてやり、協同組合を組織するようにしました。技術のある人は技術を提供し、知識のある人は知識を出して協同組合をつくるようにし、国ではかれらに長期貸付をお

こなうことによって、かれらの生きる道を切り開いてやりました。そのために彼らはわれわれに反対しません。宗教者の礼拝堂もわれわれがこわしたのではなく、アメリカ人どもの爆撃のためにすべて破壊されました。

宗教者たちは、はじめはアメリカのために祈りましたが、礼拝堂などを爆撃されてからは、アメリカに反対するようになりました。そのためかれらは「神」やアメリカのために祈ることは全然しなくなったのですが、ではだれのために祈ったのでしょうか。朝鮮民主主義人民共和国が発展することを願って祈りました。

例をひとつあげましょう。ある宗教者の夫人が語った話を紹介します。夫は宗教家でしたが、わが国の制度に反対しました。後退期に、アメリカ帝国主義が北朝鮮に残っていると原子爆弾をおとすというので、この脅かしとぎまん宣伝にのせられて彼は南へ逃げました。彼には、子どもがたくさんいたのでくらしもらくではありませんでした。それで、おそらく毎日のように子どもを幸せにしてほしいと「神」に祈りをささげたようです。

夫は逃亡しましたが、共和国ではその夫人の子どもたちに勉強をさせ大学にも行かせました。子どもたちはみな大きくなり成長しました。そこで夫人が子どもたちにむかってなんといったのでしょうか。おまえたちの父親は「神」を信じ、アメリカを崇拜して南朝鮮へ逃げたけれども服一着くれたわけでもなく、お前たちに勉強をさせることもできなかった、しかし、現在おまえたちは朝鮮民主主義人民共和国の社会主義制度のもとで中学校を終え、技術学校を卒業し、大学も出た、それだから永遠に朝鮮民主主義人民共和国を支持し、立派に生きなければならない、このようにこの

べました。この夫人もキリスト教をまったく信じなくなりました。このようにわが国では、宗教者がいなくなりました。老人の間には部分的に信者がいます。

この問題についてももうひとつの実例をあげましょう。ここから遠くないところに大同郡というところがあります。わたしは停戦後、復興建設のため一度そこをおとずれたことがあります。ところがそこには牧師が一人いました。いまの彼は熱誠者ですが、戦争前にはわが国の制度に反対しました。土地改革法令にも反対し、その他の民主改革にも反対し、そのうえアメリカのためにたえず祈っていました。戦争が起こって、一部地域から後退するさい、かれの家にアメリカ人がきました。かれはまっ先に信者をひきつけて旗をかかげ、アメリカ人どもを歓迎しにでかけました。かれはアメリカ人を「神」のように信じていたのですが、アメリカ兵は、はいり込むや否や、ジープの上からカービン銃でにわとりを射ち、婦女子を見ると、「ガール」、「ガール」と叫びながら追いまわし、ついに牧師の娘を陵辱しようとかみかかりました。そのためかれは、アメリカ人を崇拝する思想をすっかりすてさりました。かれは、わが人民軍が反撃に転じた時、自分が以前にわが国の制度に反対していたことを告白し、これからはわれわれを支持するといいました。したがって宗教もわれわれがほろぼしたのではなく、アメリカ人どもがすっかり破壊したのです。そのためわが国には礼拝堂がないのです。

イタリアやフランスからわが国を訪れる民主的な人たちが教会を見たいといいますが、わが国には教会がありません。

美濃部 儒教、仏教のお寺などありませんか。

主席 寺はあります。

美濃部 しかし、あまりみかけませんね。

主席 儒教寺院は平壤市内にはなく、遠い農村にいけばすこしあります。農村には昔のままの家があります。ところがいまの人たちは儒教を信じません。過去、儒教を信じていた人たちもみな年をとりました。若い人たちはみな現代的教育を受けているので、儒教には関心がありません。

もちろん、わが国は戦争によってひどく破壊されましたが、アメリカ帝国主義が犯したこのような罪悪のために社会主義建設はいつそうやりやすくなりました。

農村の協同化も、わが国では容易に行われました。あなたはマルクス・レーニン主義を研究したのでよくご承知でしょうが、ロシアでは協同化を実現するにあたって大きな難関にぶつかり、激しい闘争がくりひろげられました。このことは作家ショーロホフの『開かれた処女地』という小説によってもはっきりと知ることができます。この小説の内容をみると非常に複雑です。

われわれは、ロシアの複雑な闘争経験を参考にしました。ところでわが国には容易に行える条件が一つありました。それは、戦争によって農村が破壊されたことです。アメリカ帝国主義が農村にまで無差別爆撃を加えたために富農がみな破産しました。したがって富農たちの敵はアメリカであって、われわれではなかったのです。そこで私たちは停戦直後、すぐに協同化の問題を提起しました。

わたしは1955年4月に発表したテーゼで協同化の問題を提起しました。当時なぜ、わたしがその問題を提起したかといえば、農

村がまったく破壊されたからです。

レーニンも、機械化がなされていなくとも協同化をおこなえば大きな力になるとのべたことがあります。われわれは、この点を考慮に入れ、富農が復活したあとで協同化を行うよりも、みんなのくらしが苦しい時に協同化を行なう方がよいと考えました。当時、富農といってもなにももっていませんでした。もっているものといえば土地だけで、生産道具はありませんでした。われわれが1955年4月テーゼで協同化問題をうちだしたとき、ある国ではわれわれに工業化も行わずに、どうして協同化ができるのかとひぼうしました。工業化水準の高いヨーロッパ諸国でさえ協同化を実現できないでいるのに、なにもない朝鮮がどうして協同化を行なえるかといいました。

しかしわれわれは、かれらのことばに耳をかさず、教条主義をおかすわけにはいかないといいました。なぜならば、わが国農村の実情は、力を合わせてやる方がいっそう有利だからでした。一部の富裕な中農の中には破産せずに残っているのもありました。しかしわれわれは、かれらを強制的に協同組合に入れたりはしませんでした。われわれは、どこまでも競争の方法ですすめました。われわれは、貧しい人びとから先に協同組合を組織するようにしました。当時は牛も、農機械もない条件のもとで力を合わせなければなりません。青年たちはそろって軍隊に入っていたので農村には婦女子と老人しか残っていませんでした。

国家では協同組合を組織する人たちを優先的に支援しました。銀行でも、かれらに長期貸付をおこない、個人農には短期貸付しか与えませんでした。さらに税金政策面でも、協同組合からは少

なくとり、個人農からは多くとりました。こうするには、合理的な理由があります。協同組合の人たちは生活が苦しいので税金を少なくし、ゆたかな富農にたいしては生活が楽なので税金を多く納めようというものでした。

国家ではトラクター賃耕所を組織して協同組合に生産道具を供給し、個人農は牛で耕すようにしました。こうした結果、貧しい生活をしてきた人びとで組織された集団の生活水準がいちはやく向上しました。このように協同組合は、個人中農よりもすぐれており、生活条件もかれらよりよくなりました。

美濃部 農産物は現物で分配をうけ、組合員たちが個別的に売るのでですか。

主席 分配をうけて売ります。農民たちは現物の分配をうけるほか、現金の分配もうけます。いいかえるならば、米も与え、その他の収入として現金を分けあたえるのです。例をあげれば、ある家で米4トンをうけとったとすれば、その中から自家消費分として1トン半か、2トンだけを残し、あとは国に売ります。各郡には収買所があり里には収買商店があります。里収買商店には工業製品もあります。農民たちは、その商店に米を売り、工業製品を買います。これは強制的におこなうものではありません。買いつけは自由です。一部の都市には農民市場もあります。郡にも農民市場があります。大きな都市にはありません。郡には収買所があり、里にも収買商店がありますが、価格は同じです。

農民にとって米が不足していれば闇市場が生まれますが、米が豊富なので闇市場がありません。国家市場ですべて買えるのに、どうして裏で高く買うのでしょうか。裏で買う理由はありません。

われわれの商業政策は、工業製品の価格を都市、農村を問わず同じくすることです。同一の価格です。マッチ、たばこも価格が同じです。しかし、協同農場で農民が手工業的につくった一部の品物は、かれら同士で価格を定めます。

美濃部 工業においても私企業というものはまったくないのですか。

主席 私企業というより、協同経営があります。個人経営はありません。なぜかというと、先ほどのべたように、個人企業がすべて破壊されたからです。都市という都市はすべて破壊されました。平壤もすっかり破壊され、3～4軒の家しか残っていませんでした。商店も工場もすべて破壊されました。そのためにわが国の社会主義建設を比較的順調にすすめることができたのですが、このことが他の国と異なる特徴的な点です。

社会主義建設で商工業者たちがわれわれの恩恵を受けこそすれ、被害をうけたことはありません。したがってわれわれに反対する派はありません。商店、工場などが残っていたならば、われわれに反対する人びとが多かったでしょうが、そういうものがなかったので反対する人たちもいません。

協同経営をおこなう工場も国家の恩恵をうけています。日本から帰国した人たちの中にときたま個人資本をもってくる人もいます。その人たちも個人企業をしにくるではありません。かれらは、自分たちがもってきた財産を国に売り渡し、その金を銀行に貯金しておき、利子だけでも一生暮らすことができます。一部のものは朝鮮総聯に寄付してくる人もいます。個人企業といえ、ただこういうものがあるだけで、新しく生まれるものはありません。

われわれは、日本で企業管理をしていた人たちを企業所の支配人、あるいは副支配人に登用します。かれらは、みな適材適所ではたらいています。わが国では社会主義制度がこのような形で発展してきました。いふなれば農業の協同化も、都市における協同化も、他の国より順調にすすめられました。そのため、かれらはわが国の制度と国家にたいして不満を抱いていません。

33. 思想教育と国づくりを共に

美濃部 朝鮮と日本、あるいは、社会主義と資本主義の間で一番大きな違いがどういう問題であるのかということですが、日本やアメリカなどでもそうですが、資本主義国では政治にたいする不信感が非常に強いものになっています。そのために結局は、アヘンを吸い、麻薬をうつという現象などが生じています。

ところが、いま金日成首相がいわれたように、社会主義国、とくに貴国では首相を中心とした社会関係が確立されており、国民の政治への信頼がきわめて厚い。これが社会主義と資本主義間の差異、とくに貴国と日本との根本的差異ではないだろうかと思えます。

ソ連も革命以後、反革命勢力が強くなり、レーニンが「1歩前進、2歩退却」する戦術を使わざるをえなくなりました。しかし朝鮮民主主義人民共和国では、社会主義建設が非常に円滑に進められています。これは実に驚くべきことであると思えますが、いま金日成首相のお話をうかがってみると納得がゆきます。

わたしたちが特に感ずるのは、貴国の青少年たちが金日成首相と一体となり、朝鮮民主主義人民共和国の建設に全力をつくしていることです。日本やアメリカの青少年たちは、政治的関心が次第にうすくなっているか、まったく無関心であり、はなはだしくは虚無的におちいる傾向があります。こうした傾向は資本主義が頹廢していくのに関連しているものと考えます。ほんとうに憂慮

せざるをえない傾向だと思えます。このような点で、社会主義国、とくに朝鮮民主主義人民共和国をうらやましく思います。

主席 ありがとうございます。わが国でおこなっている青年たちに対する社会主義教育問題についてすこしのべたいと思えます。

青年が腐敗するのは必ずしも資本主義のもとだけではなく、一部の社会主義諸国でもそうした現象がおきています。われわれは多くの国の共産党幹部に接触もし、話もするのですが、或る国の共産党幹部たちは、豊かになれば自然にそうなるのだといえます。

さいきん、ある共産党の代表が、このような話をしながら、わたしにたずねました。わたしは、そのような考えは正しくないといいました。いま社会主義諸国で青少年が墮落するのは、資本主義から社会主義へ移行する過渡期において文化、思想活動を立派に行わなかったために生じるものだとのべました。

ことしある国の代表団がわが国を訪問しましたが、われわれと教育の問題でいろいろと意見を交わして帰りました。この問題は、非常に重要です。なぜなら、世界に社会主義が建設される前に、世界革命をなしとげる前に、途中で社会主義国の青年が腐敗するのは非常に危険だと思われるからです。青少年にたいする教育をよくおこなわないで、これに注意をはらわないと青少年は腐敗してしまうと思えます。

われわれは、物質生活の一面だけを強調するからといって社会主義建設が立派におこなわれるとは思いません。われわれが朝鮮労働党第5回大会でもいったことですが、資本主義から社会主義・共産主義に行く途上で二つの要塞をともに占領しなければなりません。つまり思想的要塞と物質的要塞を占領しなければなら

ないとのべました。そのうちのひとつだけを占領したのでは駄目だといいました。このことについてはこれまでもいろいろのべてきました。

ある国の人々は物質的生活さえよければすべてがうまくゆくと考えています。マルクスやエンゲルスが示した共産主義の原理によれば、共産主義社会とは、自分の能力の限り働き、自分の要求するものがすべて与えられる、そのような社会だといいました。もちろん、人民が豊かな生活ができるように物質的基礎をきずくための建設をしなければなりません。そうしてはじめて人民が自己の要求をみたすことができます。しかし同時に思想的要塞を占領しないと物質的要塞を占領することはできません。

社会主義国で大学生がデモをしたり、労働者階級がストライキをしたりすることがあります。これは思想活動をよくおこなわなかったところから生じたものだと思います。もちろん、これは社会主義国の恥です。

物質的要塞とともに思想的要塞をも占領するためには教育全般を強くおしすすめなければなりません。さきほどのべましたように、わが国では青少年教育についてだいたい三つの方向を与えています。ひとつは、過去の苦しい生活を忘れてはならないということです。過去、地主や資本家に圧迫をうけていたこと、また帝国主義侵略をうけたことを忘れてはいけないと教育しています。

今の青年たちはわらじがどんなものであるかを知りません。

美濃部 日本もそうです。

主席 以前、わたしは軍隊にいつて試験をしてみたのですが、小隊長たちが小作料が何であるかも知りません。これは祖国解放

戦争後のことです。

新しい世代は小作料も知らず、わらじも知らず、わらぶき家も知りません。

これはなにを意味するでしょうか。過去の貧しかった生活を知らないことを意味します。そして過去に抑圧され、侵略されたことも知らないのです。今わが国では『血の海』を公演しています。これはあなたがたに反対するものではありません。これを通してわれわれは日本帝国主義者が朝鮮人民を虐殺した蛮行について教育するのです。これは日本人民に反対するためのものではなく過去を忘れないようにするためのものです。

二つ目には、社会主義制度の優越性をもって教育することです。社会主義制度の優越性と社会主義的愛国主義思想で教育します。これに共産主義道徳教育をあわせておこないます。利己主義、個人主義、個人享楽主義、機関本位主義、地方主義、分派主義、資本主義社会と封建社会のあらゆる余毒を取り除くための社会主義的愛国主義教育をおこないます。

三つ目には、南朝鮮を忘れないように教育します。以上にのべたことが、われわれの教育方針です。これとともに共産主義未来にたいする確信と信念で教育するようにしています。

われわれは、すべての活動に必ず思想教育を結びつけます。この前、日本の記者とも話したのですが、われわれは全民教育を実施しております。われわれは、国の手で17歳まで、9年制義務教育を実施するだけでなく、高等教育をうけていようが、いまいに関係なく、全党が学習し、全人民が学習し、全国家が学習し、全軍が学習する制度をうちたてました。

美濃部 いわれる通り、過去を忘れないようにするということが大切なことです。日本でも、広島、長崎に落ちた原子爆弾がどういうものであり、東京を焼夷弾で焼けばどうなるか、したがって再び戦争が起きてはならず、平和を破たんさせてはいけないといったことで青少年を教育しなければならないのですが、現在日本の文部省が実施している教育政策をみてるならば、金日成首相のいわれたこととは全く逆に、過去のことは早く忘れてしまえ式に教育しています。学校の教科書をみても原子爆弾についての資料を次第に削除していますし、戦争に関する資料もできるだけ簡単にしなければならないといっています。こうした現状についてわたしは、非常に不安でなりません。というのは、これは日本を軍国化することと結びつきはしないかと思われるからです。

主席 その通りです。

34. 二つの朝鮮は許せない

美濃部 金日成首相が導いておられるこのようにすばらしい国が日本のすぐ隣にあるという事実を日本国民と東京都民に知らせることは、日本を平和の道に進ませるもっとも大きな要因になると思います。こうした面からみて、できるだけ日本と朝鮮民主主義人民共和国に国交関係が正常化できることを願い、もしそれがいますぐというわけにはいかないとしても、経済、文化、体育などの分野において交流しあってゆく事業はどうしても実現したいと思います。わたしは帰りましたら政府と話をしてこのことの実現につとめたいと思います。

こんどの訪問に際しても、努力すればある程度のことが実現できるということも改めてわかりました。このたびわたしが朝鮮民主主義人民共和国に来るときも、新聞記者の皆さんが是非一緒に行きたいと希望を提出したのですが、その際、日本の記者が貴国を訪問する以上、朝鮮の記者のみなさんも日本に行けるようにしなければならぬとのべ、そのことを外務大臣に強く申し入れて説得しました。もちろん外務大臣が十分に答えたとは申せませんが、かなり考え方に影響を与えたと思っています。わたしはこんど帰りましたら、貴国と日本との間の交流を促進するために、できる限りの努力を払おうと思っています。

主席 ありがとうございます。日本と朝鮮との国交樹立問題はわれわれにも興味ある問題だと思っています。しかしこれには重大な

難関がひとつあります。佐藤内閣のときだと思いますが、日本と南朝鮮の間に「韓日協定」が締結されたことです。その協定の第3条には朝鮮半島での唯一の「政府」は「大韓民国」であると指摘されています。これは佐藤内閣の侵略性を示すものであり、朝鮮にたいする内政干渉と見なすことができます。朝鮮が分裂している条件のもとでどうして「大韓民国」だけが唯一の「政府」となりうるのでしょうか。もちろんそれにはこれが国連の決定によるものだとしていますが、国連というものはアメリカ帝国主義の指図のもとに動く機構であります。

ですから国交を樹立するための運動とともに「韓日協定」を破棄する問題がともなわれなければならないと思います。だからこそ南朝鮮の大学生や進歩的な人民が「韓日協定」に反対してたたかいました。

わが朝鮮民主主義人民共和国政府声明でも「韓日協定」を認めず、無効であることを言明しました。もちろんそれが軍事同盟の性格を帯びるものではありません。しかし朝鮮半島で唯一の政権を「大韓民国」であると認めたことは内政干渉であり、「大韓民国政府」の「勝共統一」、つまり「北進統一」を手だすけすることになります。だから、それは、ひそかに侵略性を含んでいると考えられます。朝鮮半島における唯一の政府が「大韓民国」であるというのですから、朝鮮民主主義人民共和国を消滅しなければならないということにつながるのです。したがって、日本の反動内閣が38度線を鴨緑江アムロクの外におし上げなければならないといっているのは偶然ではないと思います。

わたしがあなたと日本の親友のみなさんにのべたいことは、「韓

日協定」を破棄し無効にすべきだということです。なぜなら、それがわが国にたいする内政干渉であり、「大韓民国」の侵略性を助長し、わが国の分裂を永久化しようとするものだからです。もちろん信念にもとづいて一部の人は南朝鮮と取引をし、また一部の人は朝鮮民主主義人民共和国と取引することができると思っています。進歩的な人はわが国を訪ね、反動的な人びとは南朝鮮へ行くでしょう。そうすることは信念上の問題だから当然なことだといえます。

しかしわれわれは「韓日協定」第3条を朝鮮にたいする内政干渉とみなすからこそ、朝鮮民主主義人民共和国と国交関係を樹立するためには「韓日協定」を破棄しなければならないと思います。

「韓日協定」を破棄しなければ、1894年に南朝鮮で農民運動が起きたとき、日本帝国主義者が「治安」を維持するという口実で南朝鮮農民の運動を鎮圧するために入ってきたような条件をつくらせてやるのと同じことになります。

わたしは、日本の記者と話をしたときには、この問題についてこれほどまでに深くたしりませんでした。しかしあなたが進歩的であり、社会主義にもとづき、社会主義を志向する親友のひとりであるので、またこのような事実を日本人民と日本の親友に知らせる必要があると思い、お話するわけです。

朝鮮を承認する問題はまだ時期尚早です。

「二つの朝鮮」をつくってはなりません。われわれはこれに反対します。いま国交樹立のための運動を展開することも必要ではありません。われわれは日本でおこっているこうした闘争を支持し歓迎します。と同時に「韓日協定」で「大韓民国」を唯一の「政

府」としたことを破棄するようにならなければなりません。

往来問題についていうならば、われわれは全面的に歓迎します。以前に帰国同胞を乗せた第一船がついたとき、日本の記者が大勢やってきました。そのときわれわれがまず譲歩して入国させました。その後日本政府はわが国の記者が日本に入ることに反対しました。はなはだしくは、わが国の赤十字代表が日本の東京に行くことまで拒んでいます。新潟港の帰国船のまわりでだけ動けるようにし、他所には行けないようにしています。もちろん、だからといってわれわれは、日本の反動内閣がとっているのと同じような行動をするわけにはいきません。しかしながら、あなたもいわれたように、いつまでも一方的であってはなりません。それは、わが国の体面にかかわる問題です。日本の記者や人士は、わが国を自由に訪れ、われわれの方からはひとりも行けない、このような不平等な条件に甘んずるわけにはいきません。

それに、日本政府がとっている態度でいまひとつ正しくないことは、日本にいる居留民団の人たちは南朝鮮に行き来できるようにしながら、総聯の幹部は朝鮮に行き来できないようにしていることです。これは国際法上からしても正しくありません。日本にいる朝鮮民主主義人民共和国公民には、どうして自分の祖国に往来する権利がないのですか。日本にいる韓徳銖ハンドクス議長は、日本で朝鮮民主主義人民共和国を代弁しており、積極的に支持するわれわれの同志であるのに、かれにまったく会わせようとしません。ですから、このように不平等で一面的な外交がどうしてできましょう。わたしは『朝日新聞』編集局長、『共同通信』記者と話したときには、ここまで深くはふれませんでした。問題を正し

くとらえるならば、当然かれらに祖国に往来できる権利があたえられなければなりません。

日本の記者にもいいましたが、日本人がわれわれを恐れる理由はありません。共産主義の文献とマルクス主義の書籍は、日本で自由に出版されています。わが国から何人かが行って宣伝したところで、どれほど宣伝ができるというのでしょうか。それに、ほかの国の共産主義者の入国は認めながら、どうして朝鮮の共産主義者の入国だけを禁止するのか、これは日本の反動政府が南朝鮮反動どもと結託してわれわれを無視しようとするものであり、「勝共統一」のための共謀、さもなければ助長であるといえます。

日本は南朝鮮にたいしては「大韓民国」とよびながら、朝鮮民主主義人民共和国にたいしては、朝鮮民主主義人民共和国という呼称をつけずに北朝鮮としています。

日本がこのようにいろいろと差別待遇する目的は、南朝鮮かいらいと結託して「韓日協定」第3条を朝鮮人民にむりやりにおしつけようとするところにあります。

最近、少しはよくなってきたようですが、これはあなたがたや日本の進歩的政党、社会団体と人民の闘争によるものだと思います。あなたがたは全権代表ではありませんが、東京都知事という地方全権代表としてこのたびわが国を訪問するようになったことは、朝鮮人民と日本人民との関係をいちだんと発展させるのに大きく寄与するでしょう。

われわれは、記者交流、文化人の交流、また経済交流にも反対しません。しかし、われわれの方でこれを無理に要求はしません。互惠、相互主義の原則にもとづいてすすめられるならば大いに歓迎します。

35. 民主的で中立的な日本を

美濃部 いま金日成首相が話されたことはまったく正しいことだと思います。私個人としては「日韓協定」が非常に不合理であり不当なものであることについてはよく知っております。また、総聯の人たちから、朝鮮民主主義人民共和国、即ち祖国との往來の不自由さからくる切実な問題についてもよく聞いております。わたしはこの不当な事態をなくするというにまったく賛成です。わたしはこういった事態を改善して自由な往來を少しでも実現できるよう一生懸命に努力したいと思います。

ところが佐藤反動内閣というのでしょうか、自民党保守内閣というのでしょうか、彼らは朝鮮民主主義人民共和国に対して不当な態度をとる以外ないのです。わたしはこれが実状だろうと思います。こうした事態を一日も早く解消しなくてはならないということは当然であります。最近になって情勢は若干好転しつつあるのではないかと思います。また、中国が国連で自己の正当な権利を回復し、中華人民共和国が唯一の正当な政府として認められました。こうした論理は朝鮮にも拡大されていくはずだと思います。すなわち朝鮮民主主義人民共和国も朝鮮を代表する唯一の正当な政府であるという考え方がつよまるのではないかと思うのです。

そうはいつでも「日韓条約」がすぐさま廃棄される可能性は極めて少ないので、そのことの実現にいたるまでには一定の時間がかかるだろうと思います。しかし、辛抱強くわたしたちは努力し

たい、努力すべきだと思います。

そうした「日韓条約」廃棄までの段階として、文化、経済、新聞記者の交流、そして在日朝鮮人の人たちの往来の自由などを実現し、その積みあげで条約の廃棄までもってゆく。今回のわたしたちの訪問も、その第一歩です。

このたび日本の記者が貴国に入国できるようになったことに際してはすでに政府の約束をとってあり、朝鮮民主主義人民共和国の要人をお招きして、その方の訪日を受ける場合、その方に随行して記者がくるといえば、日本政府も承認せざるをえないと思います。このような方法で徐々に交流していき、やがては「日韓条約」を廃棄するところまでもってゆきたいと思っております。

主席 ありがとうございます。われわれはそれがすぐにできるとは考えていません。これも革命闘争ですから長期性をおびており、ながいあいだにわたってたたかわなければならないと思います。

美濃部 いうまでもないことですが、佐藤内閣が倒れたからといってすぐに万事が解決するというものではないでしょう。

主席 その通りです。

美濃部 佐藤が問題なのではなく、保守党自体の性格が問題だと思います。

主席 そうです。わたしは日本の記者たちに佐藤が倒れようが、第二の佐藤が登場しようが、それは日本内部の問題であるので関与しないといいました。問題は佐藤ではなく、反動的な政策を実施するのが正しくないのですから、朝鮮民主主義人民共和国にたいする政策自体を改めるようにたたかうことが重要であると話しました。

現在あなたがたがかかげている平和と民主主義、独立と中立のためにたたかうというスローガンは全面的に正しいものであり、また将来そうなるだろうと思います。民主的で中立的な日本を建設するのは、絶対に必要だと思いますし、われわれはそれを全面的に支持します。これは非常によいことだと思います。

わが国の事情については、すでに新聞記者たちにくわしくいっておきましたが、もっと知りたいことがありましたら聞いてください。

美濃部 昨夜わたしたちが音楽や舞踊の公演をみて考えたことです。日朝両国間で、いちばん交流しやすいのは、貴国の万寿台^{マンステ}芸術団を招請し、同時に日本の芸術団を貴国に送ることです。これがいちばん実現しやすいのではないかと考えてみました。それはいつ頃実現されるかと考えてみたのですが、首相のお考えはいかがでしょうか。

主席 日本から招請さえあれば行かれると思います。この問題は「朝日新聞」編集局長がきたときに出されたと記憶していますが、かれは、具体的に120名ほど招請するといっておりました。これについて合意をみたとの話もあります。もしも日本が招請するならば、わが方は行く用意があります。われわれは、軍隊を送るのではなく、民間芸術団を送ろうというのです。万寿台芸術団は民間芸術団ですが、この芸術団を送ろうと思います。

美濃部 日本の芸術団を貴国に派遣する問題についてはどうお考えでしょうか。

主席 それに反対はいたしません。

美濃部 それが難しいとすれば、日本側の問題だと思います。

主席 わが方には問題はありません。

このたびの訪問の機会にあちこちみて下さい。われわれは、いまも建設をさかんにおこなっています。人民生活をいっそう高めるため、いろいろな方面で建設をどんどんしております。いたるところで建設がすすめられている状況を目にされるだろうと思います。今のところ、われわれには、いろいろな面で不十分な点がたくさんあります。それでいま大々的に建設する闘争をくりひろげております。

美濃部 現在ほどの部門の建設に力を注いでおられますか。

主席 まず電力工業部門、すなわち発電所の建設に多くの力を注いでいます。水力発電所と火力発電所などをたくさん建設しています。それに外国と契約して製鉄所も大きなものを建設しています。わが国では原油化学工業が十分に発展していません。いまままでカーバイト化学工業を発展させてきましたが、6カ年計画の時期には原油化学工業に中心をおいて建設しています。いま主に化学工場をたくさん建設しています。原油加工工場もたくさん建設しています。

もっとも重要なのは、軽工業建設をさかんにすすめていることです。もともとわが国には軽工業の基礎がありませんでした。解放後、大いに力を注ぎはしたのですが、需要をみただけの軽工業には発展しませんでした。現在、軽工業を大々的に建設しています。

現在、日本の商人や外国の企業体がきて契約を結ぼうとしていますが、さいきん、アメリカのドルの価値が落ちているので、下手に契約すれば価格の上で損をするのではないかとためらってい

るということです。そこでわれわれは日本のような国が、なにゆえドルを基本にしているのか、日本の貨幣とわが国の貨幣で直接計算することもでき、あるいは、小国ではあるが動揺の少ないスイス・フランを標準にすることもできるのではないかといいました。

しかし、かれらはドル建てでやってきた習慣のせいでそうなのか、ドルで取引しようといっていました。その後どうすすめられているのかはわかりません。

………

日本はドル危機の影響を受けて相当苦境におち入っているようです。

現在、わが国は日本と小規模の取引は、たくさんしておりますが、大きな取引はまだ始められていません。われわれは自分で製作できない大型のものは大部分ヨーロッパ諸国から買入れています。たとえば、発電機も大型のものはわが国でつくれないので、ヨーロッパの資本主義国から輸入します。小型のものはつくっているのですが、大型のものはまだつくれません。化学工場設備も大きなものはヨーロッパの国から買ってきます。日本との取引がうまくいき、日本から買入れるようになれば、運賃も安くつき、お互いに好都合です。ところが、これがまだ解決されないので、大きな発展を見ることができずにいます。まえに日本の記者が書いたのを読んだのですが、朝鮮は近くて遠い国だといっていました。事実そのとおりです。

美濃部 おっしゃるとおりです。もし工場設備などを日本側が輸出する方針をとるとすれば、貴国では、それをうけ入れるものと考えてもよろしいでしょうか。

主席 うけ入れますよ。

美濃部 わたしには財界人の中にも知人がいますから、その人たちとよく相談してみましよう。

主席 わが国の技術者たちは、日本から設備を買入れればヨーロッパ諸国から買うよりもよいともいっています。たとえば、昨年わが国は紡績工場設備を日本からとヨーロッパの国であるドイツから買入れましたが、日本から買ったものがヨーロッパから買ったものより、はるかによいといえます。ドイツのものが自動化の水準が高いという点もありますが、日本のものがわれわれの背丈に合うようにできているのであつかいやすく、便利だということです。また、文字も、われわれが日本語を教えるわけではないけれども、日本語に漢字がたくさんまじっているので、見るのに便利だそうです。われわれは日本の機械を買入れることに反対ではなく、賛成です。政府もそれを支持するつもりです。

36. 革命は人民大衆とともに

(午餐会にて)

主席 わたしはながい演説をしようとは思いません。わたしは、美濃部先生と御一行のみなさんをいま一度、熱烈に歓迎するとともに、朝日両国人民間の親善強化のため、美濃部先生と御一行のみなさんの健康を祝して、乾杯したいと思います。

美濃部 わたしはただ「ありがとうございます」という一言であいさつにかえさせていただきます。

主席 魚の刺身はお好きですか？

美濃部 日本の刺身に似ていて大変おいしいですね。わたしは、金日成首相がまだ山にいらっしゃった1940年を前後にして約3年ばかり平壤におりました。その当時の平壤と現在の平壤とは比較にもなりません。様子のがらりと変わってしまいました。

主席 停戦になってから初めのうち、われわれは復旧建設の仕方がよくわかりませんでした。しかし、最初の街を建設し、つぎに2番目、3番目の街を建設していくうちに、だんだんとよくなりました。技術者もいなかったのので、建設の途上で学び、実習しながら実践を通して少しずつ、改善していきました。

もともと、日本人は朝鮮人に技術を教えませんでした。日本統治の時期に、法律や医学を学んで弁護士や医者になった人は少いました。しかし、その法律というのは天皇をあがめる法律なので、いまではなんの役にも立ちません。朝鮮人の技術者はほんと

に何人もおりませんでした。20名ぐらいだったでしょう。いや、20名にもなりません。15、6名いただけです。それも日本にいた人たちです。朝鮮にいた人は技術を身につけることができませんでした。また、社会科学を学んだ人も少々おりましたが、それは改良主義社会科学なので、やはりいまでは役に立ちません。

現在われわれは、自国の大学の先生をもっており、自国の技術者によって工場を運営しております。われわれは、民族幹部の養成に多くの力を注ぎました。

日本統治の時期、平壤に大同工専テドンというのがありましたが、学生数はせいぜい200～300人にすぎませんでした。

美濃部 朝鮮の軽工業はどうですか。

主席 北半部にはもともと軽工業基地がありませんでした。沙里院サリウォンに小さな紡績工場がありましたが、そこには500錘しかありませんでした。南朝鮮には釜山プサンと仁川インチョンなどに大きな紡績工場がありました。しかし、われわれは基礎もなければ、技術者もないという非常に困難な条件から出発した関係上、軽工業製品の質が向上しませんでした。技能、技術の指導が難点でした。

中国では上海、天津などに以前から軽工業が発展していました。中国にはある程度の技術者がいました。わが国とちがって、中国は完全植民地ではなかったのです。民族的手工業があったのです。社会主義諸国の中で中国の軽工業製品がもっともすぐれています。

われわれは、6カ年計画の時期に軽工業を発展させようと思っています。

美濃部 製紙工業は以前からあったのですか。

主席 製紙工業も、もともとありませんでした。日本の統治時期、王子製紙というのがありましたが、その生産能力は1000トン以下でした。現在では外国の力も借りて少しやっています。われわれは、いまフィンランドと契約を結んで製紙設備を買入れようとしています。ところがフィンランドでは大部分木材を原料としています。しかし、われわれは木材を建設に多く使わなければならないので、これも問題です。

美濃部 貴国には天然資源が豊富だということを聞いております。でも石油がないのがいちばんお困りではないのでしょうか。

主席 石油がないから困るということはありません。われわれは原油を中国からも買入れ、ソ連からも買入れます。さらに、エジプト、クウェート、イラクなどのアラブ諸国からも買ってきて使います。

わが国にない資源は原油、コークス炭、ゴムです。

美濃部 工業農業展覧館を見て、貴国では人造ゴムを生産していることを知りました。

主席 人造ゴムを生産するにはしていますが、大規模に生産しているわけではありません。6カ年計画の期間に大々的に発展させようと思っています。

美濃部 わたしたちは、昨日金日成総合大学を見学しました。ところで、金日成総合大学の学部が別々にわかれているのか、いわば部門別大学になっているのですか。

主席 いいえ、そうではありません。総合大学には専門学部がみな総合的にあります。この総合大学では、高い水準の理論と技術を学びます。総合大学のほかに工業大学があります。それに、

道ごとに医学大学、農業大学、師範大学、教員大学、共産主義大学があります。共産主義大学というのは、党の働き手を養成する学校です。それに、鉱山の多い道には鉱山大学があり、炭鉱の多いところには石炭大学があります。このように地方によって水産大学もあれば、林業大学や海洋大学もあります。

美濃部 義務教育は9年制ですか。

主席 そうです。わが国では勉強することが法的義務となっていて、勉強しなければ国家的制裁をうけます。いまわれわれは10年制義務教育に移行する準備をすすめています。

美濃部 その9年間はどうか区分されているのですか。

主席 人民学校が4年で、中学校が5年です。今後10年制を実施するようになると、人民学校を5年、中学校を5年にする方法もあり、あるいは人民学校を4年、中学校を6年にする方法もあります。われわれは、いま試験的におこなっているのですが、5年と5年にするのがいいのではないかと考えております。

美濃部 貴国には民族的な演劇が盛んなのですか。

主席 現在行われているのはみな民族的なものを基礎にしたものです。昔のものは封建色があり、当時の上層の者たちが好んでいたものです。われわれは現在、民族的形式に革命的内容を盛った芸術を発展させています。そこでは社会主義的リアリズムの方法に依拠しています。

美濃部 平壤には劇場が多いのですか。

主席 多いですよ。

美濃部 映画館も多いですか。

主席 映画館も多いですよ。市内にあるもののほか、工場や企

業所、機関が所有しているものもたくさんあります。

美濃部 上映する映画は貴国の映画だけですか。外国映画は上映しないのですか。

主席 外国の映画のなかでもいいものは上映します。テレビでも放映しています。外国映画は主に革命的なもの、教育的意義のあるもの、歴史ものなどを上映します。外国との文化交流計画に基づいて上映しています。

美濃部 首相が事務室で執務される時間はどれくらいですか。

主席 わたしはむかしから朝早く起きる習慣がついています。

わが国では、幹部はだいたい遅くまで働いています。労働法令では8時間労働制を規定していますが、幹部はもっと働きます。労働者はそうではありません。かれらは、8時間働いて家に帰ります。しかし、工場でも幹部は責任があるので早くは帰れないのです。

美濃部 首相は、工場や農村によく出かけられると聞いておりますが……。

主席 よく行きます。そうしてこそ、官僚主義や主観主義をおかさずにすみませう。社会主義国で執権党が官僚主義と主観主義をおかさないためには、指導的立場にある働き手たちが工場や農村に出かけなければなりません。そうしてこそ、大衆の意見を聞くことができます。

ことしわが国では豊作にめぐまれましたが、天候がとくによかったから豊作になったのではありません。昨年、黄^{ファン}海南道で道党拡大総会がありました。そこへ幹部が出かけました。われわれは、この総会に当地の農民を参加させました。すると、農民のな

かから田植えを5月20日までに終われば、1町歩当り1トンないし1トン半を増収できるという意見が出されました。

党政治委員会ではこれを全国的に普及することにして、今年はその通りやってみました。その結果、豊作になったのです。これは、農民の意見を聞き入れた結果です。技術者とももちろん相談しなければなりません、それだけでは駄目です。革命というものは大衆のためのものですから、大衆の中に入って大衆とともにおこなわなければなりません。

.....

主席 美濃部先生は、総聯の活動にいろいろ協力してくださっているようですが、今後ともいっそうのご協力をお願いします。

美濃部 できるだけことはしたいと考えております。

主席 われわれは韓^{ハンドクス}徳銖議長に総聯が日本の法律に触れるようなことは絶対しないようにとっております。それに、朝鮮人だけが団結するのではなく、日本人民ともよく団結しなければならないと強調しています。総聯の重要な活動は、祖国統一のための活動であり、在日同胞が朝鮮民主主義人民共和国を支持するようにすることです。それとともに、民族権利を擁護するための活動、とくに子弟の教育活動をりっぱに行うことが重要です。美濃部先生は、朝鮮大学の認可問題でわが国に広く知られています。先生は、今後とも、総聯の活動に協力してくださるものと信じます。もちろん、総聯自身が法に違反したなどという、ぬれ衣を着せられないように注意しなければなりません、あなたがたのような日本の進歩的な人たちがよく協力してくださればと思います。

美濃部 できるかぎりの支援を惜しまないつもりです。ところ

で、さいきん憂慮されるのは右翼学生らが総聯系の学校の学生に暴行を加えるという事件がひんばんに起こっていることです。東京では近ごろこうした事件が少し減っていますが、大阪ではしばしば起こっているようです。

主席 民族教育問題は重要な問題です。民族を形成する上で言語と文字は基本をなします。われわれは、韓徳銖議長と金炳植^{キムビョンシク}副議長が、つぎの世代に民族語を忘れないよう教育する事業を立派におこなっていると思います。この事業のため日本にいる同胞、とくに商工人たちが少なからぬおかねを出しています。

……

美濃部 わたしたちのためにこのように午餐を催し、ながい時間を割いて下さったことにたいし感謝の意を表します。

37. 人道主義的な措置

1971年10月31日、前日につづいて金日成主席と美濃部亮吉知事一行との談話は続けられた。

美濃部 昨夜、ここで『新しい朝鮮』という映画を見ました。ところで、この建物はいつ建てられたのですか？

主席 15年ほどになります。1955年か56年に建てました。成員の数が少ない代表団は、ここに多くとまっています。いままで、スカルノ、シアヌーク、モディブ・ケイタ、コスイギン、周恩来など、多くの人がとまっています。日本から飛行機にのって直接わが国にきたのはスカルノだけです。

美濃部 そのほかにもう一つあるのではありませんか。(笑)

主席 それは、まっすぐにきたのではなく、ソウルを経てきました。あの事件（「よど」号事件）当時、あなたがたも複雑だったでしょうが、われわれにとっても予想もしなかったことが起こりました。思ってもいなかった人たちがきたのに、日本の外務省から送り帰してほしいとやってきました。われわれに、日本の警察の役割をはたしてほしいとやってきたので、われわれは、それを認めることはできませんでした。直接きたのなら別ですが、途中で日本の飛行場に降りた時もどうすることもできなかったものを、われわれに捕らえてほしいといました。それは、無理な要求です。自国の警察でさえつかまえることができず、また、ソウ

ルに降りた時にも、その飛行機がそこへ行くことがあらかじめ通報されていたにもかかわらず、どうすることもできなかったのに、われわれにたいして捕らえてほしいと行ってきました。

その学生たちは、われわれにとってなんの必要もない人たちです。かれらがわれわれになんの間があるでしょうか。なんの間もありません。しかし、われわれは人道主義の立場から、かれらを送り帰すことはできませんでした。送り帰せば、かれらは日本の警察に逮捕され、監獄生活を送るようになります。…… 将来、両国間の関係が正常化されれば、かれらも日本に帰るでしょう。

……

われわれにとっても、かれらの将来の問題が心配の種です。

美濃部 みなさん方には大変ご迷惑をかける問題です。

主席 われわれがかれらを送り帰せば、日本で裁判にかけられるだろうし、そうかといって、こちらにいつまでもおいておいても、なんになりますか？　すでに2年あまりの期間がすぎました。かれらが年をとれば、家族のこともいっそう心配になるでしょう。

美濃部 「よど」号事件に際して金日成首相がとられた措置は、大変適切で、しかも人道主義的な措置でした。ですから、日本国民の大部分は、金日成首相に感謝しております。

……

主席 あまり緊張しないようにして下さい。

わたしも外国を訪れたことがあります、行けば方々につれてゆかれるので、疲れる時が多いです。招待者のいうことを聞かなければならないし、行くところにはみな行かなければならないの

で、疲れた時が多々あります。しかし、あなたは、不便なことがあれば、いつでもおっしゃって下さい。そうすればあなたのいわれる通りにしてあげます。散歩なさってはいかがですか。コスイギンは、歩いてチェスン台に登りました。ここは反動派もいないし、空気もいいです。汚れた空気がありません。

美濃部 東京にいる時にくらべれば、本当に楽しく過しております。この迎賓館も都知事の公邸にくらべれば、本当に立派ですし、食事もおいしい、空気もきれいですし、水も澄んでいます。東京では、わたしは、いろいろな問題で悩んでいたのですが、こちらへきてからは大変愉快に過しています。

主席 ありがとうございます。あなた方が満足しておられるので、招待者としては大変うれしいです。

それに、食物で口に合わないものがありましたら、おっしゃって下さい。そうすれば、ほかから料理師を呼んででも作ってあげることができます。

美濃部 どうもありがとうございます。

ところで、わたしたちがこちらへ来る直前に、東京都内では、ゴミ処理問題が大問題になっていました。東京では、毎日1万3000トンのゴミが出るのですが、これをどう処理するかというのが大問題なのです。わたしは、いまや東京のような大都市では“ゴミとの戦争”を宣言しなければならない時期にきたといったのですが、わたしが出発したあとに、その問題がどうなったのかが心配です。汚水は、下水道を通して流して処理していますが、ゴミが問題です。ゴミ処理のために利用してきた東京湾の埋立てもすでに限界にきており、しかもゴミの増加率は急速です。もちろん、

焼却炉をつくれればよいのですが、それが住民に大きな被害をあたえることはなくても、住民はその近所に住みたくないといいます。さらに、焼却炉の建設を予定している地域の地主がこれに反対します。なぜなら、その近所に住みたいという人がいなくなるので、地価が下がるためです。ゴミの問題をはじめ、大都市問題解決の基本は、土地問題にあるといえますが、かねてからわたしは、東京が社会主義諸国でのように土地が国有化されていれば、このような問題はおこらないのではないかと考えました。わたしは、こちらにきて、このことをいっそう痛切に感じました。

38. 革命歌劇『血の海』について語る

10月31日、金日成主席は美濃部亮吉東京都知事一行が催した昼食会に参加し、一行と食事をともにしながら、談話を行った。

美濃部 わたしたちの一行は、貴国に到着して以来、金日成首相閣下のこまやかなご配慮のおかげできわめて愉快的な日々を送っております。わたしはまず、このようなご配慮にたいしお礼を申し上げます。

わたしたちは金日成首相閣下を中心にして朝鮮民主主義人民共和国国民の皆さんが一体となって社会主義建設をいっそう前進なされるように願っています。

最後に、日本と朝鮮民主主義人民共和国の両国間の交流がいっそう緊密になり、両国間の国交が正常化される日の一日もはやからんことを願い、祝杯をあげたいと思います。

主席 きょう、このようなお招きをうけたことをありがたく思っています。

美濃部先生と御一行のみなさんがたの健康のために、朝日両国人民の親善、団結のために、この祝杯をあげたいと思います。

美濃部 わたしたちは昨夜、金日成首相が創作された歌劇『血の海』をみました。わたしは、もともと、むかしから日本軍隊と憲兵に憎悪をいだいていたものですので、なんら考えを異にするということはありませんでしたが、しかし、日本国民の一人として、この歌劇をみていてつらい思いをすることがあり、朝鮮の

みなさんにすまないという気持ちをいっそう深くいたさざるをえませんでした。

もちろん、歌劇そのものが大変すばらしいことはいまでもありません。

主席 この作品は、もともと簡単な演劇でしたが、わが国の芸術家たちが、現在のような歌劇に仕上げました。われわれは現在、芸術をこの歌劇作品のような方向で、発展させています。

『血の海』の内容は、過去を忘れまいという精神で教育するということが基本になっており、決して日本人民に反対するということではありません。われわれは、このような作品をつくる時、日本人民に反対するような印象をあたえないように十分の注意をはらっています。

現在、『血の海』歌劇団が中国に行って公演していますが、中国人民もかつて、日本帝国主義の圧迫を受けたので、この歌劇の内容について多くの共感をよせているようです。

美濃部 よくわかりました。

わたしがかつて、大学に通っていたとき、植民地政策の講座を担当していた矢内原忠雄という先生がおられました。矢内原先生は『日本帝国主義と朝鮮』という著書も書かれましたが、先生は、われわれ学生に、日本帝国主義が朝鮮にたいし、どれだけ多くの悪事をはたらいたかを具体的に説明してくれました。そのとき、先生は、日本帝国主義の圧迫に抗しきれず、朝鮮の北部の人たちが、“満州”にわたり、実にみじめな生活をしている事実についても話してくれました。わたしは、昨夜『血の海』の公演を重い気持ちでみながら、矢内原先生の講義を思い出しておりました。

主席 当時は、朝鮮国内でも「討伐」がありましたが、一番ひどいところは間島での「討伐」でした。それは実に残酷なものでした。

ところが、日本軍兵士のなかにもよい人たちがいました。間島「討伐」のときにあったひとつの事実について話しましょう。

地下活動をしていた同志の一人がいましたが、かれがちょうど熱病にかかり、「討伐」をうけたとき、身をかくすことができず、家でねていました。他の人たちは身を避けたのですが、この同志は身をかくすことができませんでした。かれは帝国大学出身で日本語も上手でした。そのとき、日本の将校が兵士に彼を焼き殺してしまえと命令しました。しかし、この日本の兵士は裏門を足でけり開け、その人を抱きおこし、外にはい出るようにさせました。その人が畑の中にはい出したあとで、その日本の兵士は家に火をつけました。こうして、わが同志は生き残りました。この同志は戦争のさいに死にましたが、いつもこの話をしていました。これは、日本兵士のなかにも、善良な人が少なからずいたことを物語っています。

また、こんなこともありました。戦闘をしたあとでみると、日本軍がまだ使っていない弾丸を数十発ずつ手拭につつま、木の枝にゆわえていったのをみたことがあります。

かれらは、そこに朝鮮の親友におくる贈物であると書き残したりしました。もちろん、自分たちの名前は明らかにしていませんでした。

当時、日本軍隊では軍国主義教育を徹底的におこないました。そして、朝鮮の共産主義者は残酷だ、かれらは人間を手当りしだ

いにつかまえては殺すなどと宣伝しました。そのため、日本軍兵士は、われわれに遭遇すると、最後まで反抗しました。捕らえられると殺されると思ひこみ、こわがってそうしたのです。ところで、当時われわれは、捕虜にした日本の兵士をつれて歩いたことがあります。かれらは、反抗する兵士にたいし、われわれは日本人だが、遊撃隊につかまってもこのように死なずに生きているから安心して出てこいとよびかけました。

わたしが、平壤出身だということは、1938年までは知られていませんでした。ところが、われわれの捕虜になり、行をともにした日本人が帰り、新聞記者に金日成の故郷は平^{ピョンアン}安南道大同郡^{テドン}のどこそこで、年はいくつだということをしゃべりました。そして、このときはじめて、わたしが平壤出身であることが知られるようになりました。

美濃部 いま、日本では、青年たちの政治にたいする信頼が殆どないといわねばなりません。かれらが、無政府的な傾向やニヒリズム的な傾向に走るのも、その基本的な原因は、政治にたいする信頼がないためです。しかし、朝鮮ではだれもがみな政治にたいする信頼感、金日成首相にたいする信頼感をいただいています。このような条件のもとでは、日本のように不良青年が生まれるはずはないと思います。わたしは、このことがなによりうらやましいです。

主席 わたしは、全般的にみて、日本青年の中で、戦争を望む青年は、あまりいないのではないかと思います。

美濃部 しかし、日本には右翼的傾向をもつ学生が少なからずいます。かれらは、最近にみられるように、総聯傘下の学校の学

生たちにたいし、暴行を加えたりしています。もちろん、それほど多くはありませんが、一定の数だけはいます。これは残念なことです。

小森 日本の学生たちの中に右翼的傾向をもった学生がいるのは事実です。そして、彼らが、在日朝鮮人の一部のグループとともに総聯傘下の学生に暴行を加えている、これは、一般に伝えられていることです。こうしたことをみても、基本には、朝鮮の国土が分断されているという不幸があるといわざるをえません。もちろん、こういう襲撃事件をみてもみぬ振りをする日本警察が悪いのはいうまでもありません。

それに関連して、ひと言申し上げたいことがございます。美濃部知事が、朝鮮大学校認可問題で協力してくれたとあって、在日朝鮮人のみなさんが、美濃部先生を訪ねてきて感謝の意を表しています。しかし、美濃部先生はいつでも、それは自分が当然しなければならぬことをしたまでだと答えています。韓徳銖ハンドクス議長が指導される総聯中央本部は、東京都内にあります。東京都は美濃部知事の行政管轄下にある地域です。従ってわたしたちは、貴国と日本との間に外交関係がありませんが、実質的には総聯を朝鮮民主主義人民共和国の外交機関として認めるという方向で考えています。そして貴国と連絡したいことがあれば、総聯を通して連絡をしています。もちろん日本政府は、美濃部知事のこのような措置を認めまいとしています。

すこし前、中国から王国権氏が日本にきたとき、彼は東京にある外国外交機関のなかで総聯中央本部だけを訪問しました。わたしたちも王国権氏が考えているのと同じような考え方をしていま

す。すなわち、総聯を実質的に朝鮮民主主義人民共和国の在外外交機関として認めようということです。このような考え方を少しでも現実化する方法はあります。しかし、ここでも、そうした努力を妨害するのは、朝鮮民族が不当にも南北に分断されているという事実です。美濃部知事とわたしは、このたび朝鮮民主主義人民共和国をお訪ねする前に、総聯中央本部を正式に訪問しました。そして総聯の方々のご案内で中華人民共和国駐東京備忘録貿易事務所を訪問しました。知事ともなれば公式機関の人物です。その公式機関の人物が、総聯を訪問したことは、歴史上はじめてのことです。

主席 結構なことです。大いに歓迎します。ありがとうございます。

小森 最近の国連における情勢などをみても、両国間の人事往来の問題は実現させる可能性があるのではないかと思います。美濃部知事とわたしが将来、相談しようと思っている問題について申し上げようと思います。「よど」号に乗ってきた学生は、招かれざる客ですが、美濃部知事は招待を頂いてきたお客です。そこでこのたびわれわれは、美濃部知事の名で貴国からある要人を招き、同時にカメラマンと記者が随行して来られるよう提案したいと考えております。われわれは、どなたをお招きするかという腹案をすでにもっていますが、それは、まだふせておくことにします。もし金日成首相が、われわれのお招きする人を日本に送ってもいいといわれた場合に、日本側としてはどうするかという問題がありますが、これについては福田外相は、うけいれるといたしました。このためには美濃部先生は、福田外相とつよい交渉と話し

あいとを重ねました。その結果、福田外相はもしこんど、美濃部知事がお客を日本に招く場合、受けいれたいと答えたのです。もちろん、かれは入国を最終的に許可する権限は、自分にはなく法務大臣にあると答えました。わたしたちは、日本に帰れば、この問題をなんとか成就させるために努力します。場合によっては失敗することもないわけではありませんが、しかし、成功する可能性も大いにあると思います。こんごこの問題については、みなさんともっと相談してみようと思っています。

美濃部 往来の門を開くことは、アジアの平和を守るために、きわめて重要だと思います。また、これは、日本が軍国主義の道を進むのを防ぐのに重要な意義があります。そこでわたしは、この問題をむしろ日本自体のために、東京都民のために実現しようとしているのです。このような方向で努力を続ければ、報道界はいうまでもなく東京都民もこれに努力してくれると思います。

しかし、南朝鮮政府といろいろなつながりをもっている勢力は強く反対するでしょう。このたびわたしが、こちらにくる前にも反対派はわたしの訪問を妨げようと執ように、さまざまな動きを示しました。

わたしは、報道界の多数と国民の多数は、貴国との往来を支持するだろうと思います。反対派の主張は、でたらめな主張です。かれらは外交というものは政府のすることであり、地方自治体である東京都、およびその知事がすることではない、都知事が朝鮮民主主義人民共和国や中国を訪問し、外交を行なうなどは笑止である、このようにいいました。

39. 思想と貿易は別

小森 昨日、金日成首相は、日本との貿易を歓迎すると申されましたが、これと関連して、二つの問題についておたずねしようと思いますが、よろしいでしょうか。

主席 どうぞ、おっしゃって下さい。

小森 申し上げます。第一に、日本の商社の中には「韓国」と取引している商社があります。中国は、このような商社とは貿易をしないという立場を明らかにしました。貴国の政府においても、このような原則を堅持されるのかどうか、金日成首相は、これについてどうお考えでしょうか。

第二に、貿易をすすめる方法としては、現在中国との間でおこなっているように、日本側で特定の貿易機関をつくり、それを通しておこなう方法と、個々の商社同士で取引をすすめる方法があります。わたしたちの意見は、ある1か所の機関を通して行なうのはどうかと思うのですが、貴国政府は、これについてどうお考えなのか知りたいと思います。いうまでもなく美濃部知事は、社会党と共産党の支持をうけていますが、財界の指導者の中にも親しい人が何人かいます。その人たちは、美濃部知事と個人的にたいへん親しいのですが、その多くは、美濃部知事の学生時代からの親友なのです。従ってわたしたちが日本に帰って朝鮮民主主義人民共和国を訪ねて知り、或は感じたことがらを話せば、その人たちに一定の影響をあたえることができるでしょう。同時に、い

ま中小企業が「ドル危機」の波を受けて新しい市場を求めて汲々としています。美濃部知事の発言は、かれらにも影響をあたえるものと思います。このような意味でわたしたちは、さきほど申し上げました二つの問題についての貴国政府のご見解を知りうればと思っています。

主席 問題は、周恩来総理の4大原則のようなもののかかげるかということですが、われわれとしては、そういったことについて公式にのべたことはありません。周恩来総理は、朝鮮を訪問したあと4大原則というものをだしましたが、周恩来総理が、これを発表したのは、朝鮮を侵略しようとする勢力、台湾を侵略しようとする勢力、インドシナを侵略しようとする勢力を弱体化せようとするところにその目的があると思います。われわれと合意のもとにそうしたものではありません。

周総理が訪ねてきたとき、日本の侵略勢力を阻止することについて一緒に討論しました。そしてそのとき、共同声明にもこの問題をいれました。

貿易取引問題については、率直に言って日本のどういう会社が南朝鮮とどれだけ取引きしており、台湾とどれだけ取引きしているのか、インドシナ諸国とどれほど取引きしているかについて、われわれはつかんでおりません。中国の人たちは知っているかも知れませんが、われわれはこういう問題についてよく知りません。

そこで参考のために一度中国の人たちにたずねてみようと思っています。一線をひくことができるかどうかという問題ですが、わたしの考えでは線をひけない事情もありうると思います。

これまでは日本との貿易がそれほど多くなかったので、この問題を重要視しませんでした。日本政府がわが国に対して敵視政策を取ってきたために、貿易を発展させることができませんでした。このような状態で日本との貿易に依存しては失敗することもありうるし、そうなれば、計画を遂行できないこともありうるので、日本との貿易問題を重要視しませんでした。われわれは平壤に熱暖房をいれるために大きな発電所を建設しましたが、そのときにも日本の商社と話し合いをしました。しかし、当時は、現在よりも情勢がきびしいときでした。日本の商社は、口では売るといいながら、政府に問い合わせで見なければならぬとか、できるかどうかわからないなどといいました。そこでわれわれはやむなく西ドイツから発電機を買入れなければなりません。われわれとしては、西ドイツから買おうと日本から買おうと、ポンドやドルが支出されることにかわりありません。いままで日本の会社とは大きな取引はありませんでした。あったとすれば小さな取引だけです。

もしも日本政府がわが国との貿易の道を開こうというならば、われわれも政策をかえることはできます。政府で日本との貿易額をどれほどふやすべきかという問題を検討することもできます。これまでこのような問題を討論したことはありません。わが国は日本との貿易が多くないので中国のように条件をつけたりしませんでした。もし日本政府がわが国と貿易をおこなう可能性のあることが確実になれば、政府でこの問題をあらためて討議するようになるでしょう。

以前は、主に共産党・社会党系の商社と小さな取引をした

けです。ところが今年になってはじめて自民党系の財界人数名がわが国を訪問しました。最近その報告を聞きましたが、わが方からかれらにいくつかの工場の設備問題を出したようです。かれらはそれが可能であるといい、合意書までつくって帰りました。かれらはわが国の技術者を招いて、工場を見せるといいました。技術者の入国査証手続きをとるために写真を送ってほしいというので写真も送りました。結果がどうなるかは、しばらく様子をみななければなりません。

かれらは台湾、南朝鮮などをすでにおとずれており、わが国には初めて来たのですが、蔣介石、朴正熙からわれわれについての悪宣伝を相当聞かされたようです。こんどかれらは中国をかってわが国に来ましたが、わが国の外務省に自分たちの身の安全を保障してほしいという要求までだしました。最近の通信をみると、南朝鮮当局はかれらがわが国を訪問したことをどうして知ったのか、日本政府に抗議したそうです。ともかく、結果は待ってみなければわかりませんが、こんご試験的にこうしてみても、もし日本政府が、わが国と貿易する可能性をみせるならば、わが政府としても検討してみます。そして中国側とも話し合って歩調をあわせるようにします。わたしがすでにのべたように、日本政府がわが国との貿易に大きな制限を加えない限り、われわれとしては反対しないでしょう。むしろやるからには、広くやりたいと思います。ひと言でいって、日本との貿易をどうすべきかという問題は、まだ党中央委員会や内閣で検討したことがないので、これから状況をみながら、検討してみたいと考えています。

おそらく、社会主義諸国の中で日本との貿易額がいちばん大き

いのは中国ではないかと思えます。

われわれが日本軍国主義に反対することについての論説を発表したあと、ソ連も日本との関係について神経をつかいながら、ソ連政府が日本と貿易を行なう問題についてどのように考えているのかと問合わせてきました。われわれは貿易をすることには反対しないと答えました。今年、ソ連の人たちがわが国にきましたが、かれらにも思想闘争は思想闘争であり、貿易は貿易であるといいました。

小森 金日成首相からきわめて重大なお話をうかがいました。また、首相は、昨日、教条主義はとらないといわれましたが、そのことばがわたしの耳にまだ残っています。そして、いま、首相は貿易についても弾力性のある政策をとるといってお話をされました。

ところで、さきほど日本軍兵士のなかにもいい人がいたというお話がありましたが、日本の資本家のなかにも、もちろん資本家というわくのなかではありますが、いわばよい資本家と悪い資本家がいるといえます。

もし将来、経済使節団が貴国を訪問するとすれば、その使節団の主要メンバーはさきに申し上げた美濃部知事の友人たちでありましょう。かれらは、日本独占資本家のなかでも、もっとも代表的な資本家です。しかし、かれらは、日本の資本家のなかでも比較的自由主義的傾向というか、進歩的な思考方法をもつといわれている「経済同友会」の指導者たちでもあります。

今年、自民党系の資本家が貴国を訪問したそうですが、わたしは、その人の名前は知りませんが、こんど美濃部知事が帰って、

さきほど首相がいわれたような内容を財界の指導者たちに話せば、かれらは朝鮮民主主義人民共和国に行ってみたいというかも知れません。この場合、美濃部知事が有力な財界人で使節団をつくり、貴国に派遣したいといえ、うけ入れて下さるでしょうか。

主席 うけ入れます。

美濃部 小森君もいいましたが、たしかにわたしは、社会党と共産党の支援をうけている者ですが、同時に資本家とも多少の関係があります。このたび、朝鮮に向かう前に、日本航空の社長がわたしのところに来て、機会があれば朝鮮民主主義人民共和国と中国の指導者の方々とあつて日本の航空機と両国の航空機の相互飛行についてどう考えているのか、一度おたずね下さいとたのまれました。すなわち、日本の旅客機が平壤飛行場に来るとともに朝鮮の旅客機も東京の羽田飛行場に来るようにしようというものです。わたしは彼に、それはまだ人間の往来問題も解決がむずかしい状況のもとで、これをとび越えて飛行機の往来から手をつけようというのはあまり早すぎる、このようにいってやりました。すると彼は、人間の自由往来が実現した場合は、飛行機の相互往来が可能なのかどうかを確かめて欲しいといいました。

彼は、機会があれば一度、おたずねしてほしいといっていました。が、ちょうど今日は、その機会だと思い、申しあげる次第です。

主席 全般的にみて、かれがそういう話をしたのは、何もよくない意図からではないと思います。なぜならば、これは結局、日本政府のわが国にたいする非友好的な敵視政策を排斥する運動のひとつのあらわれであるからです。そういう考えが悪いものだとは思いません。それを実現させるために、日本反動政府に圧力を

加え、かれらがわが国にたいする敵視政策を止めるよう闘争することはよいことだと思います。

通信によれば、中国と日本の間に国際電話が開通し、24時間通話できるようになったということですが、これもよいことだと思います。

わたしは、航空会社の意図は悪くないと思いますし、日本政府の立場がどうであるのかは、しばらく様子をみなければならないと思います。

小森 よくわかりました。

貿易問題と関連して、重要な問題をもうひとつ申しあげたいと思います。いま日本政府としては、朝鮮民主主義人民共和国と貿易する用意があると公式には言いにくい立場でありましょう。日本政府は、なかなかそういうことをいいそうにありません。しかし、日本政府が必ずしも公式態度を表明せずとも黙認するという前提のもとで、日本と大きな貿易をすすめる問題について意見交換することができるとお考えでしょうか。

金日成首相は、昨日、日本との貿易問題は日本政府の態度にかかっているといわれましたが、政府が見ぬふりをして黙認する場合、日本と貿易することができるとお認めでしょうか。わたしがこのようなことをうかがうのは、この問題にたいする理解をいっそう正しくするためです。

主席 そうすることも悪くはないと思います。日本政府もそのようにしていこうという意図ではないかと思います。南朝鮮もしきりにうるさくいうので、そういうふう黙認する方向でやろうということも考えられます。朝鮮大学の認可問題にしてもそう

だと思えます。日本政府が法的には、朝鮮大学校の認可を認められないとしながらも、現在、実質的には黙認しています。日本政府は、かつてわが国にたいして犯した罪があまりにも多く、それを一度に改めることはむずかしいので、あるものは黙認しながら徐々に改めていこうという方針をとっているようです。

いくらか前に『朝日新聞』後藤編集局長がわたしにつきのような質問をしました。国連での中国代表権問題で、アメリカと日本が手を組んでいることについてどう思うかと聞きました。

そこでわたしは、こう答えました。アメリカは蒋介石のような手先が多いだけに、かれらのまえでは体面も保たねばならないので、その場ですぐに出て行けなどとはいえないだろう、国際潮流によって問題が解決されてしまえば、大勢がそうなのだから仕方がないではないか、それでもわたしはおまえを支持してやったではないか、こういうふうにおおうとしているのだ、こういうわけでアメリカは二重の案を出しているのだ、と、わたしは後藤編集局長にいいました。

実際、ニクソンは体面を維持するのさえむずかしくなりました。

通信によると、アメリカは、こんどの国連総会で中国問題についての投票のさい、八つのアフリカ諸国が約束を破って中国を支持する投票をしたとって非難しました。

しかし、それらの国は共同で投票しようと約束したことはないと反ばくしました。

これを見ても、アメリカはいましかたなしに、そうした政策をとっているのではないかと考えられます。ニクソンが中国を訪問すること自体が、すでに蒋介石追出しに拍車をかけたものではあ

りませんか。

日本政府の政策もそうだろうと思います。もし日本政府が美濃部先生のこのたびのわが国訪問を絶対に反対する立場であれば、どうして南朝鮮が反対したにもかかわらず黙認したのでしょうか。

美濃部 長時間にわたって有益なお話をして下さいましてまことにありがとうございます。

40. 安井郁氏の人生の春

金日成主席の誕生60周年を大政治祝典として記念していた1972年4月、革命の首都平壤では、主席の革命思想を徹底して擁護し、広く解説宣伝するための社会科学の任務について討議する、全国社会科学者大会が開かれた。

かつてなく盛大に開かれた大会には、アジア、アフリカ、ラテンアメリカをはじめ、世界各国から集まった多くの著名な学者や社会活動家も参加した。

そこには、国際法学博士・法政大学教授安井郁氏を団長とする日本社会科学者代表団も参加していた。

世界の耳目を集めて開催された大会の雰囲気は、数十年間学問の研究に従事し、社会活動も積極的に進めてきた、いわば大会慣れしている安井郁氏をもひどく興奮させた。

朝鮮の社会科学者をはじめ顔なじみの外国の著名な学者や社会・政治活動家が演壇に立ち、チュチェ思想の偉大さと不滅の生命力を思想理論的に、実践的に熱烈に論証する姿に深い感動を覚えた氏は、自らも討論に参加することを思い立った。氏は、金日成主席によるチュチェ思想の創始とそれに基づく朝鮮革命の栄光に輝く勝利は、朝鮮の歴史は言うに及ばず世界の歴史における永久不滅の業績であると述べ、今や、チュチェ思想は社会発展の原動力として、世界史の前途を明るく照らしている、われわれは輝かしい未来への道を切り開くすべての闘争で、たたかう人民、たた

かう革命家、たたかう科学者たちに勝利への確信と情熱、勇気と知恵を抱かせる不滅のチュチェ思想の指し示す道に沿って、ともに肩を組んで進んで行こうと、熱烈に呼びかけた。

チュチェ思想の信奉者安井郁氏にとって、思想の英才、領導の巨匠金日成主席に会いたいという思いは長年胸中に蓄積されていた。その願いは大会期間についに実現した。

閉会を1日前にした4月9日の午後、大会に参加した外国の学者や社会・政治活動家は感激的なニュースに接した。

永久不滅のチュチェ思想の創始者、革命の英才金日成主席が大会場に見えられるというのである。

安井郁氏は夢のような思いであった。そこへ、主席が大会場の平壤大劇場に到着した。一同は広々とした応接室ホールで主席を迎えた。

ホールは割れるような拍手喝采にどよめいた。

明るい微笑、英知こもる瞳、力強い歩み……。人類を自主の新しい世界へと導く、偉大な指導者の風貌がそこにあった。

主席は彼らの歓呼に手を上げて応え、一人ひとりと温かい握手を交わした。

彼らの健康について尋ねもすれば、その言葉に耳を傾けもし、豪快に笑いもする主席は、彼らすべての慈しみ深い父そのものであった。

やがて主席は安井郁氏の前に立った。案内者の紹介に主席はうなずいて微笑し、挨拶する安井郁氏の手を取り、健康と滞在中の生活状況について尋ねた。氏は主席のきめのこまかい関心に感動しながら、「はい」「はい」と答えるばかりであった。

この日、一同は主席とともに記念撮影をし、万寿台芸術団の公演を観覧した。

彼らにとって光栄きわまる幸福に満ちた一日であった。

その夜、宿所に帰った安井郁氏は興奮を鎮めることができず、窓をいっぱいに向け放った。すがすがしい川風が吹き込んできた。

真理の探求に生涯を捧げている学者として、時代の進路を示す不滅の思想の創始者に非常なあこがれを抱き、尊敬を寄せてきたが、一生の念願がつかない、主席に会うことができたばかりか、慈愛に満ちた言葉をかけられたのである。

空いっぱいに星がまたたく夜空を眺めながら氏のまぶたには、過ぎ去った昔日のことが浮かんできた。

氏が同窓生が羨む優秀な成績で東京帝大法学部政治学科を卒業したのは、1930年の春であった。

国際法学を専攻した氏は、それを平和と進歩のための学問にらしめようと決心し、その夢の実現に精力を費やした。

一時氏は、社会科学的認識の客観性を絶対視し、国際法学をこうした見地から認識することに努めた。氏が1939年、大学講義案として著した『国際法学講義要綱』は、そのような見地に立って書かれたものであった。

社会的進歩と正義の実現をめざした氏は、数十年にわたって「平和擁護・友好運動」に積極的に参加した。

良心的かつ志操堅固な学者である氏は、学問上、あるいは政治上の難題に直面した時は、その解答を見つけるべく苦闘した。これは青春時代から変わりなく続いた生活の一端であった。

氏は進歩的な思想だとされる数万巻の蔵書の中に埋もれもすれ

ば、世界に名の知られた政治家に会いもしたが、時代の前途を照らす不滅の思想、真理に遭遇することはできず、氏の悩みは深まるばかりであった。

この50年近い日々、氏は同僚たちにこんなことを話したことがある。

わたしを導く偉大な思想、このやるせない思いを晴らしてくれる真理を見出せるならば、茨の道も笑って進み、切り立つ断崖もよじ登るであろう、と。

歴史を導く偉大な思想、真理を求めてやまない氏の熱望はそんなにも強烈であった。

だからこそ、不滅のチュチェ思想に遭遇した時の喜びには筆舌に尽くせぬものがあつた。

「わたしはこの世界に光明をもたらす太陽の日ざしを見出した」

氏が一生をかけ悩みに悩んだあげくに永久の真理チュチェ思想に遭遇したのは、1960年代末であった。

この頃、氏の書斎には毎夜灯が消えることがなかった。

氏は日本で大々的に出版されていた金日成主席の著作と『金日成伝』を耽読していた。

氏は我を忘れ、何時間も読書に熱中しては書物にある主席の肖像に見入ったりした。氏は一日も欠かさず続けていた朝の散歩も中止し、読書と思索にふけた。

初老の頃から頭髪が白くなっていた氏ではあつたが、若さがよみがえり、口からはしばしば民謡のメロディーが流れ出した。

以前は妻の弾くピアノに合わせてよく民謡を歌ったものだが、

ここ何年、それも忘れていた。

元来もの静かな人で、感情の起伏をあまり外に表わさない性格であるが、今胸中には激しい波が立っていた。

チュチェ思想の内容も、金日成主席の革命活動史の全貌もまだ十分に把握できているわけではなかったが、その不敗の真理性は、すでに氏を魅了していた。

革命的実践に始まり、その中で独自に切り開いていった主席の革命活動史こそ、新時代が渴望する革命の領袖の歴史であったし、革命の実践上提起されるもろもろの問題に解答を与えていくなかで創始され、豊かに発展させたその思想こそ、新時代の前途を開く旗じるしであった。

氏は、主席の革命活動史とその思想こそ、自分が時代の渦中で渴望してやまなかった思想であり真理であると確認したのであった。

真理の前にはこうべを垂れ、絶対的に従うのが、学者としての自分の志操だとみなしていた氏は、たとえ年を取ってはいても、その研究に取り組むことこそおのれの生涯の課題とすべきだとして、氏は齢60の峠をかなり越した老学者として、チュチェ思想の研究に精力を傾けたのであった。こうして1972年早春、東京大学の一室で同僚の教授や学生たちとともに金日成主席の著作研究会を結成したのであった。

このような安井郁氏にとって、チュチェ思想の祖国朝鮮を訪問して全国社会学者大会に参加し、なakanづく不滅のチュチェ思想の創始者金日成主席の接見を受けることができたのは、氏の生涯にとって最大の意義深い出来事であった。

安井郁氏は今回の訪朝を機に、チュチェ思想の研究にとって意

義のある仕事をしたかった。

こうして老学者は、翌日の全国社会科学者大会の閉幕式を前にして再び演壇に立ち、日朝社会科学者連帯委員会の結成を提起し、チュチェ思想の旗じるしを高く掲げて、両国社会科学者の友好的交流と戦闘的連帯を強化していこうと呼びかけたのである。

41. 共同闘争と友好関係

飛鳥田一雄横浜市長を団長とする全国革新市長会代表団は、1972年5月、朝鮮民主主義人民共和国を訪問し、14日、金日成主席の接見を受けた。

主席は一行の朝鮮訪問を共和国政府と全朝鮮人民の名で熱烈に歓迎するとして、こう語った。

「われわれは、みなさんが日本人民とともに朝日両国間の友好関係を発展させるために多くの力を注ぎ、とくに民主主義的民族権利と祖国の自主的平和統一のための在日朝鮮公民の闘争を積極的に支持、擁護し、助力しておられることをよく知っています。われわれは、このたびみなさんを親友として迎えるようになったことをたいへんうれしく思います。

わたしは、みなさんが貴重な贈り物をしてくださったことにたいし、団長先生をはじめみなさんにあつく感謝します。とくに、副団長先生からは牛まで送っていただきました。わたしはこれを非常にありがたく思います。

わたしは、団長先生をはじめみなさんが、わたしとわが国の人民に対する過分な称賛の言葉をくださったことに対し謝意を表します。われわれは少しもおごることなく、これからさらに仕事に励んでみなさんの期待にこたえたいと思います」

主席は感動にひたる一行を見回して話を続けた。

「みなさんが提出した質問を対外文化連絡協会を通じて受け取

りましたが、これについて簡単に話そうと思います。

まず、国際情勢について述べましょう。

国際情勢については、われわれがすでに他の機会に幾度も述べているので長く話そうとは思いません。

今日、国際情勢は平和と民主主義、民族独立と社会主義をめざしてたたかう人民には有利に、帝国主義と反動層には不利に進展しています。いくつかの列強が世界を支配し、意のままに牛耳っていた時代はすでに過ぎ去りました。今は、正義と進歩のためにたたかう人民が世界を掌握して進む時代であります」

主席は、アメリカ帝国主義がベトナム民主共和国を封じこめ、爆撃を強化しているが、だからといってアメリカ帝国主義が勝利しているとは言えない、これは、あくまでも、滅亡にひんしたアメリカ帝国主義侵略者の最後のあがきにすぎない、アメリカ帝国主義者がいかにあがいても、ベトナム問題は必ずベトナム人民の意思に従って解決される、決してアメリカ帝国主義者の意図どおりにはならないだろうと語り、今日、帝国主義列強の間では葛藤が激化しており、帝国主義の内部矛盾も極度に先鋭化していると指摘し、続けて、日本人民がアメリカ帝国主義に追随する佐藤政府の反動政策に反対して断固たたかっていることを実例に挙げ、日本人民がアメリカ帝国主義と佐藤反動政府に反対してたたかうのは当然であり、歴史発展の必然的な結果であると理路整然と話を進めた。

また、アメリカ国内においても反動支配層とその戦争政策に反対する人民のたたかいは激しさを増しており、帝国主義の植民地支配を覆して民族の独立を勝ち取った新興独立諸国の隊伍は拡大

している、これらの国の人民ばかりでなく、植民地従属国の人民も帝国主義に反対して勇敢にたたかっている、一言で言って、今は帝国主義列強がアジア、アフリカ、ラテンアメリカを分割し、勝手気ままに支配していた時代は過ぎ去り、人民が世界を支配する時代が到来しつつある、全般的情勢は、日を追って革命を行う人民には有利に、帝国主義と反動勢力には不利に進展している、現国際情勢は総体的にこのように評価するのが正しいと思うとした。

主席はしばらく言葉を切った後、あなたがたは日本に居住する朝鮮公民と日本人民に何か伝えることはないかと尋ねたが、それについて簡単にお話しするとして、こう語った。

「今在日朝鮮公民は、日本人民と団結して共同闘争を立派に行っています。在日朝鮮公民が独自に活動すべき分野もありましょうが、彼らは日本に住んでいる以上、日本人民と共同闘争を行わずには闘争で成果を収めることができません。われわれは、在日朝鮮公民が日本人民との共同闘争を立派に展開していることを非常にうれしく思っており、今後も彼らの闘争でより大きな成果が収められるよう望んでいます。

今日本では、アメリカ帝国主義に追随する反動層に反対し、日本軍国主義の復活に反対する人民と進歩的な民主人士の闘争がいっそう高まっています。日本人民のこのような闘争は、とりもなおさず朝鮮人民に対する支持となり、在日朝鮮公民に対する支持となります」

続けて主席は、日本では朝鮮人民に対して親善的、友好的な進歩的民主人士とわれわれの共鳴者、支持者が日増しに増大してい

る、日本で朝鮮人民との親善をめざす「日朝友好促進議員連盟」が組織され、朝鮮との友好関係を発展させるための運動が広く展開されている、これは在日朝鮮公民の闘争に対する大きな支持であり励ましであると強調する主席の顔には微笑が浮かんでいた。

主席は一言ひとことに力を入れながら話を続けた。

「日本人民と日本の広範な民主勢力がますます成長し、その力が日を追って強まってきているので、在日朝鮮公民の闘争は決して孤立していません。在日朝鮮公民の闘争は帝国主義と反動勢力に反対する日本人民の正義の闘争と結びついています。それゆえ、日本の反動勢力が在日朝鮮公民の闘争に対してさまざまな妨害策動を行っていますが、われわれは、彼らの闘争が必ず勝利するものと確信しています。

在日朝鮮公民は、今後とも日本人民との共同闘争を立派に行うことによって、民主主義的民族権利を擁護し、民族教育事業をいっそう発展させ、祖国の自主的平和統一を早めるための闘争で、より大きな成果を収めることでしょう。

在日朝鮮公民と日本の広範な民主勢力が力を合わせて共同闘争を立派に行うならば、近い将来に朝鮮民主主義人民共和国と日本との国家関係も改善されるようになり、両国間の善隣関係がいっそう速やかに結ばれるものと思います。当面して両国間に人々の往来が実現されるだけでも、朝鮮人民と日本人民間の善隣関係はいっそう発展するでしょう」

続けて主席は、日本革新市長会代表団の訪朝は、朝鮮人民と日本人民間の親善関係をいっそう発展させる前提条件、望ましい徴候であるとし、報道によると、日本の外務省が、朝鮮が芸術団を

送る用意があるなら受け入れるとしているが、これも両国間の親善関係を発展させるうえでのよい徴候だと思つたと語つた。そしてこのたび、総聯中央常任委員会の李季白^{リゲベク}副議長を団長とする在日朝鮮人祝賀団が祖国を訪問し、日本に再入国する権利を獲得したのもやはり、朝日両国間関係の発展における大きな前進であるとして、語を継いだ。

「朝鮮のことわざに『はじめ半分』というのがありますが、このように朝日両国間に人々の往来がはじまった以上、これからさき相互の往来と接触はいっそう多くなるでしょう。そうなれば、両国人民間の理解はいっそう深まるでしょう。したがって、両国の関係発展の前途はきわめて明るく、少しも悲観することはありません。

われわれは、あなたがたが帰つてから、韓徳銖^{ハンドクス}議長をはじめ総聯の幹部とすべての在日朝鮮公民にわれわれの挨拶を伝えてくれるよう望みます。

そして、成田委員長と赤松副委員長をはじめ日本社会党の幹部諸氏ならびに久野忠治先生、美濃部先生、朝鮮に対して共感を示しているすべての学者、進歩的な人士とすべての日本人民に、朝鮮人民を代表して送るわたしの挨拶を伝えてくれるよう望みます。

昨年わが国を訪問した『朝日新聞』編集局長の後藤先生をはじめ、わが国に共感を寄せて多くの活動を行っている日本言論界の進歩的な人士にも、わたしの挨拶を伝えてくれるよう望みます」

一度会つた日本人を忘れず、一人ひとり名を挙げながら挨拶を送る主席の人徳に魅せられた一行を見渡して、主席は、朝日両国人民間の親善団結を強化するうえでのいくつかの問題について慎

重に話を進めた。

「あなたがたは、わが国の都市と日本の都市、とくに革新市長の活動している都市との間に姉妹都市の関係を結ぶことを提起しましたが、これは非常によいことだと思います。わが国の都市と日本の都市との間に姉妹都市の関係を結べば、朝日両国の人民は互いにもっと理解を深めることができるし、両国人民間の親善と団結を強化するうえによい結果をもたらすことができるでしょう。

われわれは、わが国の都市と日本の都市の間に姉妹都市の関係を結ぼうというあなたがたの意見に全面的に賛成します。どの都市とどの都市の間に姉妹関係を結ぶかということは、対外文化連絡協会と具体的に協議して決めるのがよいでしょう。

またあなたがたは、わが国と日本の地域相互間に経済交流、文化交流、技術交流を行うことを提起しましたが、これもよいことだと思います。

今日本では、鉄鉱石がなくてオーストラリアや南アメリカから買ってくるそうですが、わが国には鉄鉱石が無尽蔵にあります。最近、わが国の炭鉱部門の人たちは西部地区と北部内陸地区で数十億トンの埋蔵量をもつ鉄鉱石の産地を新たに発見しました。わが国には、至る所に鉄鉱石がたくさん埋蔵されています。したがってわれわれは、わが国に豊富な鉄鉱石をいくらでも日本に売ることができます。

われわれが日本から買ってこなければならないものも少なくありません。わが国では、綿がよくできないので、葦、木材、石灰石で繊維を生産しています。今後、われわれは、石油で化学繊維を生産することを計画しています。しかしわれわれはまだ、この

ような化学繊維工場の設備を国内で生産できません。こういう工場設備を日本から買入れるとよいのですが、日本とはまだ貿易関係がないので、われわれはやむをえず、フランスやイギリスのような遠いところから買入れています。

水産業の部門でも交流を行うことができるのではないかということでしたが、それもできると思います。今わが国では、年間100万トン以上の水産物を生産しています。これは、わが国の人口の割合からすれば少なくない量です。しかし、われわれは水産物の加工が上手にできません。それでわれわれは、日本と水産物の加工部門でも技術交流を行うのが望ましいと思います。

両国間で、農業の経験を交流しあうことができるのではないかという意見もありましたが、これは、きわめて興味ある問題です。農業部門でも両国は、互いに学ぶべき問題が少なくありません。両国の間で農業の経験を交流しあって、互いに学ぶのは悪くありません。

わが国の学校と日本の学校の間でも交流ができるでしょう。わが国の学校と日本の学校の上に親善関係を結び、学生同士が互いに手紙や作品などを交換し、行き来もするのはよいことであって、悪いことではありません」

主席は最後に沖縄の日本返還問題について語った。

「われわれは、この問題に対して深く研究していません。おそらく、この問題についてはわれわれよりもあなたがたのほうがもっとよく知っているものと思います。

われわれは、沖縄が本当に日本人民に返還されるのかどうか疑問に思っています。アメリカ帝国主義者が沖縄に軍事基地をその

まま残し、それを侵略戦争に利用するならば、それは事実上沖縄が日本人民に返還されるのではなく、なんの意義もないことです。

われわれは、アメリカ帝国主義が沖縄を日本に返還するというのは、日本人民とアジア諸国人民を欺瞞するために、佐藤とニクソンの密談で仕組まれたトリックではないかと思います。あなたがたもご承知のように、今、ニクソンは世界の人民をあざむくためにさまざまなトリックをつかっています。われわれの考えでは、沖縄の返還問題に関連しても、ニクソンと佐藤がなにかのトリックをつかっているようです。彼らがどういうトリックをつかうかは、もう少し見守る必要があるでしょう。

われわれは、沖縄が真に日本人民の手にもどされるべきであり、日本人民の利益のために利用されるべきだと思います。沖縄が、アジア人同士をたたかわせるアメリカ帝国主義者の侵略的軍事基地として利用されては絶対になりません。

日本の問題に関しては、日本人民のほうがよく知っているので、われわれは常に日本人民の立場と日本人民のたたかいを支持します。沖縄の返還問題に関連しても、われわれは、アメリカ帝国主義と日本反動層の欺瞞的な沖縄返還策動に反対するあなたがたの闘争を積極的に支持します」

主席の話は終わった。

代表団一行は、在日朝鮮公民と日本の広範な民主勢力が力を合わせて共同闘争を立派に行うならば、近い将来に朝鮮と日本との国家関係も改善されるとした主席の言葉を胸深くに刻みつけた。

42. 大いなる包容力

飛鳥田一雄氏は、明治大学法学部卒業後弁護士になり、戦後、市・県議を経て、53年神奈川県1区で衆院に初当選した。63年横浜市長に当選した氏は、翌64年全国革新市長会の結成を主導し、72年5月、革新市長会代表団を率いて朝鮮を訪れ、77年第7代社会党委員長に就任してからも78年5月と81年3月に訪朝した。

氏はその間、至る所でチュチェ思想と、それに基づく社会主義建設の模様を目の当たりにし、朝鮮革命の経験について多くのことを学んだ。

1972年5月14日、日本全国革新市長会代表団団長の飛鳥田一雄氏は、平壤近郊の招待所で金日成主席の接見を受けた。

氏は、初めて主席に会った時に受けた感動をこう書いている。

「その日——1972年5月14日、私たち代表団一行は、平壤近郊の湖のほとりにある招待所で主席をお待ちしていた。

さわやかに、高く晴れわたった朝鮮特有の青空のもと、みずみずしい新緑が映える、それは実にすばらしい風致であった。

朝鮮人民の叡知と社会主義建設の一面をみる思いで、雄大な眺望に目を奪われていると、急にあたりが騒がしくなった。

みると、湖の向こうから自動車がこちらに向かってやってくる。みるみるうちに私たちのすぐ目の前にきて止まった。

初めてお目にかかる金日成主席はどんな方だろうか…と自動車の方に歩み寄ったが客席には誰もいない。おやっと思ってよくみ

ると、写真でおなじみの主席が助手席に座っているのである。

私は正直言ってびっくりした。日本でならば、後の座席に悠然とかまえていて、秘書がうやうやしくドアを開けてから降りてくるのが普通である。

ところが金日成主席は、助手席からご自分でドアを開け気軽にひょいと降り立った。そして真っ直ぐに私の方に歩み寄り『あっ、飛鳥田さん、よくいらっしやいました。お待たせして恐縮です』と、大きな、あたたかい手でしっかりと握手をされるのであった。その時私は、あ、人々をひきつけるのはこの手なんだなあ、と思った。

主席は親しく私の肩を抱きかかえ階段を登り、建物の中の方へ案内するのであった。

きわめて率直でありながら親しみにみちた応待であった。一国の指導者としてかなり構えた儀礼的な応待を想像していた私たちにとっては意外でもあり、驚きでもあった。主席の、飾るところのないおおらかな態度には、私たち一同大いに敬服したものである。

ともに階段を登りながら主席は『ほんたによくいっしやいました』『平壤に着いてから何か不便なことはありませんか』と、こまごまと気を配り、心をつかってくさるのであった。

金日成主席の言葉や身のこなしにはリズム感がみちあふれ、接する人々を魅了してひきつけるものがある、と私はすぐに気がついた。

大きな包容力であり、おおらかで暖かい雰囲気である。

言葉は太くて丸味と張りがあって生き生きとしており、論理に

は説得力と弾みがある。主席の話術には世界最高級の味わいがあるように思われた。

それにしても、何と親しみやすい人柄であろうか。初対面の人にも一ぺんに固さをとり、気詰まりをほぐし去り、もう百年の知己のようにざっくばらんにお話しすることができ、冗談さえいえるような雰囲気をつくり出す豊かさ。これについては、代表団、随行記者団一同がひとしく述べていたところである。

主席の人柄の偉大さ、接する人々をひきつけ、納得させる魅力、会った瞬間に抱かせる信頼感……そういう気質と特性について私なりに感じたことは多いが、ごく限られた時間での印象であるので、これ以上の言及は差し控えたい。

そういう意味で、金日成主席のような、まれにみる指導者を持った朝鮮民族は幸せであると思う。

私は平壤に行ってみて初めて金日成主席に対する在日朝鮮公民、総聯の人たちの敬愛と信頼の念がどうしても深いのかという理由が、実感としてつかみ得たように思った」

この日、主席は飛鳥田氏一行が提起したいくつかの問題について回答した。

飛鳥田氏はこう述べている。

「接見の席上、金日成主席は約5時間の長きにわたり、私たちが提起したいくつかの問題について、懇切に、明快に述べられた。

まず国際情勢から、朝鮮民主主義人民共和国における行政単位の組織と地方政権機関の機能と役割、教育体系と教育内容、在日朝鮮公民の問題と朝日両国人民間の親善、団結、沖縄の問題、その他についてであった」

主席のすべての談話を貫いているのは、主席が創始し発展させてきた偉大なチュチェ思想であった。主席は、われわれの人民政権は人民の利益のために奉仕することを基本使命としている、まさにこれがわが人民政権機関の特徴である、われわれは「人民政権機関は人民の忠僕である」というスローガンを打ち出している、言い換えればわれわれの人民政権機関は人民のしもべであると述べたが、この言葉を日本の地方自治体の長である飛鳥田氏ら一行は大きな教訓として受け止めた。

朝鮮における地方政権機関の機能と役割、郡の役割に関する構想は金日成主席の天才的な理論の具体化であると思い、飛鳥田氏は、これはどの社会主義国家においても、社会主義建設路線のひとつのモデルになるのではなかろうか、もし機会があれば、もう一度朝鮮を訪れて、もっぱらこの問題を中心にじっくり教わり、研究してみたいと思った。

主席は、教育の分野にとどまらず、文化、芸術、科学、技術などすべての分野で、人民にサービスし、人民の好むものを発展させることを中心にして考えているのである。

主席は、朝日両国人民間の親善・団結の強化についても言及し、日朝両国間の関係を改善し、親善を深める一環として、たとえば日本の横浜と朝鮮の咸興、新潟と清津間ハムフンとチョンジンで姉妹都市の関係を結ぶこと、平壤市人民委員会委員長の日本招待計画など、日本代表団が提起した問題にも賛意を表し、すでに実現した日本公演をはじめ朝日双方の学校同士や学生間の交流、往来などもよいのではないか、と言った。

飛鳥田氏は、限られた期間の短い滞在期間であったが、朝鮮の

社会主義建設のことが忘れられず、後日こう述べている。

「金日成主席は『われわれは、何もない廃墟のうえに都市と農村を建設し、工場を建てました』と言われたが、これは主席によって示された、世界でも初めて試みられた自立経済建設路線の輝かしい結実である。

朝鮮人民が『革命の首都』と誇らしげに語る平壤の場合、これが朝鮮戦争で文字通り完全な焼野原になった灰の中から生まれた都市とはどうしても思えないくらいのすばらしさであった。

全市が緑におおわれたように見える並木と色とりどりの花、都市の中に公園があるのではなく、公園の中に都市があるようだ。

緑といえば朝鮮では、どこへ行っても道の両側には、日本のみなさんに見せてあげたいような立派な並木が茂り、緑のトンネルをつくっていた。だから私たちの車は緑のトンネルの中を走っているようなものであった。

整然とした平壤の建物、それはすべて5階～8階建ての近代ビルであるが、それも日毎に新しい型へ、文化的なものへと建てかえられているという。中でも立派なのが労働者住宅である。

建物の中をのぞくと、大抵の家は2DK、3DKのととのったものだが、家賃が何と収入の3パーセント、その中に電気、水道代まで含まれているというから驚きである。

ざっと見た感じでもこの国の人々は、一般的に言って日本での月収15万円前後の暮らしをしているように思われた。

清潔で堅実——都市や農村、施設その他私たちのみたすべては、政治をも含めて、きわめて清潔であり堅実であった。思うにこの国の人々の心もまた清潔で堅実なのであろう。

朝鮮の農村ではすでに水利化、電化が終わり、今や農村でも電力の多くを農作業に使用する段階に来ている。

どんな山奥の農村にも電気はもちろんバスも入り、文化住宅や文化施設が整えられている。

車で農村地帯を走ってみると、両側の協同農場（朝鮮の農村はみな集団化されて協同農場とよばれている）の田畑は非常にきれいに整理されている。

これは日本でのように小さな田畑ではなく、大きくしかも整然と仕切られていて、そこにトラクターや耕耘機が入り込んで協同で農作業を行っている。

農村出身で農業問題にくわしい山形市の金沢市長、上田市の小山市長の2人も感嘆するほど、朝鮮の農村は全く姿を新たに、大きく発展していた。

たとえば、土質改良から区画整理、地盤形成などがすべて総合的にできあがっており、とくに水利化はずばらしい。

はじめに人造湖についてのべたが、全国至る所に大きな人造湖が数多くつくられている。これらの湖は単に川の流れをせきとめるとい程度のもではなく、下を流れる川の水を電力で何段にもつぎつぎと上の方へ汲みあげて、海拔数百メートルの高地にまで壮大な湖をつくりあげている。

湖がダムとなって、いざ大水といえこれをひきうけて貯え、旱ばつともなれば放出して田畑をうるおし、田植時にでもなればいっせいに水を流すのである。

これらの水は全国をまるで人間の血管のようにくまなく張りめぐらされた水路によって、すみからすみまで行き渡るのである。

そればかりではなく人造湖では養魚も行われるし、風致づくりにも一役買っているというのだから、一石二鳥どころではない。

農村に限られたわけではないが、朝鮮のすぐれた医療制度についてぜひふれておきたい。

朝鮮では徹底した予防をするという行き方なのだ。

このような政策にしたがって全国の医者はそれぞれ地区担当制をとっていて、医師が一定の地域住民の健康について全責任を負うというシステムであって、これはチュチェの国らしい制度であると感心した」

主席は、「われわれは、社会主義建設で困難な峠を基本的に乗り越えました」と述べ、これまでの建設成果によって自立的な経済土台がしっかり築かれたので、今後の経済をより早く、より立派に建設していくことができるようになった、と語った。

そして、氏が一部の国で「週5日制」労働が実施されている事実を説明し、「朝鮮ではどうするのですか」と尋ねると、主席はきっぱりと「飛鳥田さん、わが国では週5日制にする考えは毛頭ありません」と語った。

人類の平和と幸福のためにたたかっている朝鮮人民は、とうてい「週5日制」という自分本位で安易な道を選ぶことは考えもしていないのである。

主席は余裕綽々とした態度で「われわれは週6日間働いて結構です」と言った。

金日成主席のこのきっぱりとした言葉から飛鳥田氏は、その原則的で毅然たる立場を見、それゆえ、朝鮮人民はあれほど主席を敬慕し、総聯の幹部と海外同胞たちも主席の意に従っているのだ

と、いまさらのように感じたのである。

帰国後、飛鳥田一雄氏は朝鮮を訪問して受けた心情をしばしば家族に話し、夫人に「あなたは金日成主席にほれてしまいましたね」と言われるほどになった。

まさにその通りで、氏は、朝鮮民族の偉大な指導者であるだけでなく、アジアと世界のすぐれた指導者でもある金日成主席に惹かれる思いを禁じ得なかった。

43. 亀田市長の夢

金日成主席に一度でも会った日本人なら誰もそうであるが、北海道亀田市長吉田政雄氏の感動は大きかった。

吉田氏は1904年北海道の生まれで、函館師範学校卒業後、小学校、中学校の教諭・校長を長年務め、68年北海道亀田町長、その後市制によって亀田市長となった。氏は、1972年5月、全国革新市長会代表団の一員として朝鮮を訪問した。

以下は氏の手記である。

「わたしは1972年5月9日から15日まで朝鮮民主主義人民共和国に滞在し、各分野にわたって社会主義建設の成果を直接この目で見る事ができた。私たちの共和国滞在は1週間にすぎなかったが、それはきわめて印象深く、感動的なものであった。

とりわけ、金日成主席にお会いすることができたのは、わたしにとって生涯忘れることのできない幸せであり、光栄であった。

私たちは日本を発つときから、できれば金日成主席にお会いしたい、とのひそかな希望をもっていた。共和国について、工業、農業、教育、文化、医療、芸術など多くの分野にわたって精力的に見学したのだが、すばらしい発展ぶりで、アメリカ帝国主義者との3年間の戦争によって廃墟と化した国土を、わずかの間によくもこれまでに建設したものと驚嘆した。しかも、共和国のすみずみにまで主席のチュチェ思想がしみ通り、それが社会主義建

設のすべての分野で具現されていることを実感的に知ることができた。

金日成主席にお会いして直接お話をうかがいたいという気持ちは日とともに深まるばかりであった。私たちのこの切実な希望は、帰国を明日にひかえた5月14日に、ついになえられた。

この日の朝、主席さしまわしのヘリコプターにのって主席とお会いすることになった招待所へ直行した。主席が現地指導にいておられたので、そこで会うことになったわけである。

先に到着した私たちは招待所の玄関に並んで主席の着くのを待った。ほどなく乗用車が横づけになってひとりの方が降りてこられた。瞬間、その大らかな風格からして、あ、この方が主席に違いないとすぐにピンときた。

つかつかと私たちの前にきて、一人ひとりと握手を交わしながら、主席はよくきて下さったとあいさつして下さった。温かくて柔らかい大きな手であった。

はじめのうち、私たちは緊張していたが、二言、三言、話を交わすうちにいつのまにか緊張がとけて、いつのまにか主席の懐のなかにとび込んでしまったような感じになった。主席は私たちの一人ひとりにタバコをすすめて下さった。私はずっと前にタバコをやめたのだが、折角、主席からすすめられたものをもったいないと思い、受けとって、とうとう15年目に禁を犯してしまった。

途中で昼食になったのだが、主席は珍しい朝鮮の餅をすすめて下さった。年寄りにも食べられる柔らかい餅であった。

会見のとき、私は幸運にも主席のちょうど真ん前で、それだけに一番多く話をしたのではないかと思う。

私は日本を発つ前から金日成主席の人となりについて私なりに研究もし、朝鮮総聯の友人たちからもいろいろ話を聞いて、想像していた。しかし、実際に会ってみると想像以上に大らかで、謙虚で、温容そのものであった。まさに世界一の大人物という思いがしたものであった。

私は市長としての立場から亀田市と共和国の都市との姉妹関係の締結、水産物や寒冷地農業の経済、技術交流などについて提案し、快諾を得ることができた。

私は、もともと教育行政に長くたずさわってきたので、とりわけ教育問題について多くの話をした。私は主席に、前日ある女子高等中学校を参観したときのことをお話した。その校長先生が『敬愛する金日成同志は、われわれ教育者は革命家である、との最高の称号を与えて下さいました。人間を教育する仕事はもっとも重要な革命活動のひとつなのです。私たち教員は無上の誇りと栄誉をもってこの仕事にたずさわっております』と目を輝かせて語っていた。校長だけでなく、その学校の教職員、生徒が一体になって励んでいる姿を見て感激した。

私がこのようなことを主席にお話したら、主席は大変お喜びになって『人間を教育、改造する対人活動こそ革命と建設の第一工程であって、教育事業は対人活動の重要な一環です。だから私は教育の仕事は単なる職業ではなくて、崇高な革命活動なのだといっているのです』といわれた。

そして主席は、社会主義建設をすすめるためには思想革命とともに技術革命も大いにすすめなくてはならないといいながら、共和国ではすべての学生が義務教育を終えるまでにひとつ以上の技

術を身につけている、技術のないのは私ぐらいのものではないか、と冗談めかしておっしゃった。

そこで私たちの団長が『いや主席が一番すばらしい技術をおもちではありませんか。こんなにすばらしい国づくりの技術を主席はおもちではありませんか』といったら、主席は大きな声でお笑いになった。

朝鮮民主主義人民共和国は『社会主義の模範国』として世界に名高いとともに『教育の国』としても有名である。共和国には学業をもっぱらとする学校のほかに働きながら学ぶ工業大学、通信教育なども広範に実施されており、人口の約3分の1が学生である。このような国はおそらく世界のどこにもないであろう。

しかもすべての人民は仕事のあと毎日2時間の自習をし、土曜日には4時間の集団学習をする。どんなに地位の高い幹部でも1年に1カ月は学校に入って仕事から完全に離れて学習に専念する制度ができています。まさに人民総学習である。

これほど徹底した学習の気風があるからこそ金日成主席のチュチェ思想が国のすみずみまでしみ通り、人民の一人ひとりが国の主人公であるとの自覚をもって主席のまわりに一致団結し、社会主義建設で自発性、創意性、積極性が発揮されているのではなからうか。これは人間をもっとも有力な存在とみなし、革命と建設の成否を決定する鍵は人間にあるという金日成主席のチュチェ思想の国をあげての実践である。

共和国では『子どもは王様』といわれるくらい大切にされている。私はとりわけ、平壤学生少年宮殿を参観したとき、主席の次の世代にたいする配慮の厚さに感激を禁じえなかった。主席の次

代にたいする配慮の厚さも、代をついで革命を行わねばならないという、金日成主席の思想の表れであることを私は知ることができた。

共和国では、1972年から10年制義務教育が実施されているが、託児所や幼稚園が無数に完備されているので、生まれたときから集団教育を受けているのと同様である。

このような教育のなかから『ひとりはみんなのために、みんなはひとりのために』という新しい社会にふさわしい品性を身につけた、新しい型の人間がすくすくと育っている。

私は教育者の出身なので、どうしてもその国の青少年の姿に目を注ぐことになる。私が共和国の青少年をみて受けた印象をひと口で表せば、規律があつて、それでいてのびやかで明るいということである。私はこのことを大変うらやましく思った。

たとえば私たちが自動車にのって通り過ぎると、道を歩いている子どもたちが手を上げて少年団式の敬礼をする。2人以上いっしょにいてもみんなが並んでいっせいに手を上げる。遠足かなんかに行くらしい小学生の列をみていると足並みがそろっている。

街が非常に清潔なものときからそういう教育が徹底しているからではないだろうか。ある外国記者が共和国の中学校を訪れたとき、エンピツを削ったら子どもがやってきて削りくずを手で受けたという話があるが、私はこの話が全くその通りであつたろうと実感できた。

子どもたちの姿勢がシャンとしていて、服装も清潔だ。それに明るい。バレーや朝鮮の踊りをする子どもたちの笑顔が実にいい。

学生少年宮殿のことについては多くの人が語っているのでくわ

しくはいわないが、要するに子どもたちの自主性と個性を最大限にのばす教育をしているのだなということがよく分かる。

それから学校教育では基礎教育をしっかりと与えると同時に技術教育、情操教育に非常に力を入れている。

共和国の青少年の規律と礼儀正しさ、明るさ、のびやかさを目のあたりにして私は、日本の教育の現状を思わずにいられなかった。

会見の席上、金日成主席は『…ヤンキー式の教育ではだめです』といわれたが、私は全くその通りだと共鳴したものだだった。

私が朝鮮に行ってもう一つよい印象を受けたのは街づくりのすばらしさである。

平壤の街は、都市のなかに公園があるというのではなくて、平壤全体が巨大な公園で、そのなかにビルが建っているという感じであった。

亀田市は急速に人口がふくれ上がり、いわば『できつつある都市』だ。私は日頃から、緑と太陽がいっぱいの街をつくりたいと計画し、実行もしているのだが、実際はなかなか困難である。ところが、まったく私の夢がそのまま目の前にひろがっている。ただもう、驚嘆したものだだった。ウィーンは森の都とか、パリのマロニエの並木道など世界中の人が知っているが、平壤に比べれば問題にならないと誰かがいっていたが、さもあろうとうなずける。

道路は広々としているし、街路樹はすばらしくいい。街のいたるところには木が青々と茂り、そして家並は整然としている。道の両側には延々と四季の花が咲き乱れ、アパートのベランダにはこれまた鉢植えの花がいっぱいだ。しかも街全体が清潔で道路に

はチリひとつ落ちていない。同行者がタバコをもみ消して、吸いながらをポケットにしまい込んだほどである。

金日成主席はつねに労働者や農民、子どもや学生、老人や婦人のなかに入って行って話をきき、国家の政策や方針を説明してすべての国民を建設へとふるいたたせている。これが有名な現地指導である。中央であぐらをかいて、頭のなかだけで考えて、ああしろ、こうしろなどというやり方はしない。

日本国憲法の根本思想は主権在民である。この思想を私は市政の根本にしたいとつねづね考え、私なりの努力をしてきたつもりだ。『移動市長室』とか現地懇談会などで話し合いをし、住民の自治意識を高め、市政にたいする住民の自発的な参加を実現していくという私なりのもくろみをもって実行してきた。

私なりのこういう方法を主席の現地指導と比べるわけにはいかないが、朝鮮に行って、やはり現地の住民の中にとび込んで話し合うという方法に自信をもったことは事実である。

それと、もう一つ、主席の指導方法に学んだことは、1カ所に『肯定』を創造し、それをモデルにして全国的に一般化する方法である。私はこれを『モデル主義』とひそかに名づけている。

……

私は帰国したら、縦、横の幹線道路を建設し、そのほかに自動車の通らない道を作る、小・中学校・幼稚園・保育所も設け、ショッピングセンター、医療機関、郵便局もつくる、なによりも緑がたっぷりの住宅団地にしたい、このモデル地区によって実物教育を行い、周辺地区住民の積極的な協力を強めて大団地の建設を立派にやりとげてみたいと思った。

北海道は周知のように、第2次大戦中、強制連行されてきた数万、数十万の朝鮮人を炭鉱で奴隷のように酷使し、かれらのうちの多くを殺した土地である。炭鉱だけではない。鉄道やダム建設でもたくさんの朝鮮人を殺した。鉄道の枕木一本にひとりの朝鮮人の死骸が横たわっているといわれるほどだ。

私はそれだけに、日本人のひとりとして良心の呵責と後めたさを抱きつづけて共和国を訪れた。『あれは軍国主義者のしたことで、われわれには関係のないことだ』といってすますわけにはいかないのだ。

しかし金日成主席は、会見の席上でうらみがましいことは一言も口にされず、かえって私たちを親しい友人だといい、日本人民とともに手をとってアジアの平和のためにつくしていこうではないか、とおっしゃった。

私はその寛容さ、大らかさに胸を打たれ、両国民の親善と団結、両国間の国交正常化のためにいっそう力をつくし、アジアの隣国として末長く仲よくしていくよう努力を重ねなくてはならないという決意をさらに固めたのであった。

私たち代表団はそれぞれの都市と共和国の適当な各都市との間に姉妹都市の関係を結びたいと提案したところ、主席は即座に賛成してくれた。

私は共和国の姉妹都市との間に水産物加工と水産機械の技術交流をしたい。また、共和国から原料を輸入して公害のない産業をおこしたいとも思っている。たとえば木材加工、軽金属工業、精密機械工業などである。

北海道の気候は共和国北半部と似ているのでその農業技術をゼ

ひ学びたい。畑灌漑、電化、水利化、機械化などすばらしいものだった。われわれの方からは寒冷地での果樹栽培、酪農などについて経験と技術を提供できるのではないかと思う。

共和国ではニワトリ工場とよばれるオートメ化された大養鶏場が方々にあって、ひとりで1万4000羽のニワトリを飼っている。これなども学びたいことの一つである。ビニールハウスのなかをトラックが通っているのだから……。

まあ、3大技術革命だとか、婦人を解放するための完璧な諸施策などは社会体制が変わらない限りわが国では実行に移せないだろうが、現在の条件のもとでも生かせる技術や経験は積極的に取り入れて市民の生活と福祉の向上に役立てたいと考えている。

亀田市は決して大きな都市ではないが、活気に満ちた伸び盛りの新興都市である。あらゆる分野で、あらゆる機会をとらえて朝鮮民主主義人民共和国との交流と親善を深めることによって日朝両国の交流と親善を深めるのに寄与したいと願っている。

朝鮮民主主義人民共和国、この国は金日成主席というたぐい稀な偉大な指導者が苦難の闘争のなかで自らの手でつくり上げ、みがき上げた偉大なチュチェ思想がすみずみにまでしみ通っている。だからこの国はこれまでそうであったように、これからも破竹の勢いで千里馬チョンリマの進撃をつづけるであろう。

私は、金日成主席のような偉大な人に会えたことを、しかもその方の思想が現実となっている朝鮮民主主義人民共和国の姿を目のあたりにしえたことを生涯またとない光栄であり、幸せだと思っている」

44. 朝鮮の統一は日本にも利益

1970年代に入り、朝鮮を訪れる日本の人士は急増した。

例えば、1972年1月から5月の訪朝人士は次のように多彩であった。

日本社会党国際局長一行、日朝友好促進議員連盟代表団、『読売新聞』論説委員会顧問高木健夫氏と社会部通信主任佃有氏、共同通信社論説委員会委員長、日本社会党中央執行委員会委員・党国民運動局長伊藤茂氏、全国教育テレビ放送局報道部次長一行、日本社会党中央執行委員会副委員長赤松勇氏と加直子夫人、令嬢倭久子さん、日本高等学校サッカー代表団顧問として訪朝した日本テレビ社長・読売新聞社最高顧問小林興三次氏と同代表団メンバーの日本テレビ報道部長藤川魏也氏……

朝鮮を訪れた代表団の中には、自由民主党国会議員久野忠治氏を団長とし、日本共産党国会議員春日正一氏、日本社会党国際局長川崎寛治氏、公明党衆議院議員瀬野栄次郎氏、民主社会党常任顧問、自由民主党衆議院議員を団員とする日朝友好促進議員連盟代表団もあった。

代表団は帰国後、衆議院第二院会館で帰還報告会を行った。

席上、久野忠治団長が発言した。

氏は、広範な日本人民の意志を代表して超党派の代表団が朝鮮民主主義人民共和国を訪問したのは今回が初めてであり、これは日朝関係を改善するうえで大きな意義を持つとして、次のように

述べた。

——わたしは、金日成元帥の卓越した指導のもとに、共和国北半部で朝鮮人民が進めている社会主義建設とその目覚ましい成果を目の当たりにして、こんなに素晴らしい隣国と日本との経済・文化交流をより積極的に推進しなければならないということを感じた。

朝鮮人民は民族の悲願である祖国の自主的平和統一を実現するために力強くたたかっており、朴正熙傀儡政権が唱えているいわゆる「北からの脅威」というものは真つ赤な嘘である。

板門店^{バンムンジョム}を訪れて、誰が朝鮮の平和のために努力しているかをはっきり知った。

わたしは、自主的平和統一をめざす朝鮮人民のたたかいを積極的に支持し、今後、日朝両国間の関係改善のために全力を尽くすつもりである——

代表団に同行した記者団団長の『読売新聞』記者は、朝鮮民主主義人民共和国に対する日本政府の不当な政策は時代の流れに逆行するものである、わたしは今後、日朝両国間の友好親善関係を強化するために努力するつもりである、と決意を表明した。

このように、朝鮮人民と日本人民の親善のきずなが強まる中、日本の公明党代表団が空路、平壤に到着した。

代表団は、公明党中央執行委員会委員長竹入義勝氏を団長とし、党政策審議会会長正木良明氏、党政策審議会副会長二見伸明氏、国際局長黒柳明氏、労働局長沖本泰幸氏、国会対策委員鳥居一雄氏を団員として構成されていた。代表団には代表団書記と『公明新聞』の記者たちが含まれていた。

1972年6月1日、金日成主席は訪朝中の公明党代表団と会見した。

席上、主席は、共和国政府と全朝鮮人民の名において竹入委員長を団長とする公明党代表団のわが国訪問を熱烈に歓迎するとして、あなた方のわが国訪問は朝鮮と日本両国人民の親善と団結を強めるうえに大きな貢献となる、あなた方の訪問はまた、国の平和的統一と社会主義建設をめざす朝鮮人民のたたかいを大いに励ますものと述べた。

そして、あなた方は会談を通じてわが国の実情についての通報を受けたことと思う、われわれもあなた方の通報内容を聞いた、それで今日はいくつかの問題について話し合いたいと思う、と言った。

主席はまず、朝鮮の統一問題について話した。

「あなた方は、朝鮮の統一問題が外部勢力の干渉を受けることなく朝鮮人民自身によって平和的に解決されることを望むと言いましたが、自主的平和統一は、南北朝鮮全人民の一致した願いです。わが国は日本の間近にある隣邦であるだけに、朝鮮の統一問題はあなた方にとっても大きな関心事となっていることと思います。わが国の統一問題はアジア人民はもとより、全世界の人民が注視している問題です。われわれは、世界各国人民とわれわれの隣邦にいる多くの友人の支持声援のもとに、祖国の自主的平和統一が必ず成就されるものと固く信じています」

ここで主席は、祖国統一の方案について具体的に説明した。

「われわれの主張は、南北間に存在する不信と誤解を取り除き、体制と信教の違いを乗り越えて民族の大団結を実現しようという

のです。

ここで最も重要なのは、外部勢力の干渉を徹底的に排除することです。今、南朝鮮の為政者は、アメリカ帝国主義の軍隊を引き続き南朝鮮に引き止めようとしています、われわれはこれが理解できません。

アメリカ帝国主義軍隊が南朝鮮に引き続き踏みとどまるべき理由は何もありません。アメリカ帝国主義者は、朝鮮人同士戦うおそれがあるので、それを防ぐため『国連軍』が南朝鮮で警察の役割を果たさねばならないというのです。彼らはまた、南朝鮮人民を『保護』するためアメリカ軍が南朝鮮に来ているのだといっています。これはみな途方もない口実にすぎません。

わが国で停戦協定が結ばれてから20年近くなります。もともと停戦協定には、協定締結後3か月以内に双方の代表からなる政治会議を開いて、朝鮮問題を平和的に解決すべきことが指摘されています。だがアメリカ帝国主義者は今なお南朝鮮を武力で占領しています。

……この20年間、南北の間に戦争をせず平和にすごしてきたのに、アメリカ帝国主義軍隊が今日まで『国連軍』の看板のもとに南朝鮮に駐留している必要が一体どこにあり、また南朝鮮の為政者がアメリカ軍を引き続き南朝鮮に引き止めておく必要がどこにあるのでしょうか。アメリカ軍が南朝鮮に駐留していなければならないなら理由もありません」

主席は、アメリカ帝国主義者とともに日本軍国主義者もわが国の平和統一に障害をつくりだしているとして、こう言葉を継いだ。

「あなた方の国の政府を批判するのはなんですが、佐藤は1969

年、ニクソンと共同コミュニケを発表したのち、朝鮮で戦争が起きた場合、対岸の火事として見過ごすわけにはいかないという侵略的な発言をしました。これは事実上、わが国に対する横暴な内政干渉です。

今、アメリカ帝国主義者と日本軍国主義者は、南朝鮮の為政者と反動層をそそのかして、朝鮮民族の分裂を助長しています。彼らのこうした行為もやはりわが国の平和統一の妨げとなっています。他国が朝鮮問題に対して正しい立場をとろうとするならば、当然、朝鮮民族の分裂を助長すべきでなく、統一を促そうという念願から出発すべきです。もちろんわれわれが、帝国主義者や軍国主義者にこのような期待をかけることはできません。われわれとあなた方は、反動層とたたかう勢力であるだけに、朝鮮の統一問題に外部勢力が干渉できないようにするため、たたかわなければなりません。

……

あなた方は、『韓米相互防衛条約』と『韓日条約』がわが民族の大団結の妨げとなるのか、その破棄が南北政治協商の前提条件となるのかどうかについて質問しましたが、現在はそれが民族の団結の妨げとは思いません。この先どうなるかは今後のなりゆきいかんにかかっていると考えます。

『韓米相互防衛条約』は軍事条約です。そして『韓日条約』は軍事条約として結ばれはしなかったとはいえ、1969年に佐藤とニクソンの共同コミュニケが発表されたのちは軍事的な性格をおびたものになりました。しかし、わが国の統一問題を解決するにあたっては、これらの条約を破棄するかどうかということより、ど

うすれば全民族の団結を実現できるか、ということのほうがもっと重要です。わが民族同士団結して、外部勢力の干渉を受けることなく朝鮮人の手で国を統一しようということに意見が一致すれば、軍事条約を破棄するのはそれほど問題にならないと思います。朝鮮人同士団結するうえで軍事条約が妨げとなるのなら、南北朝鮮がおのずと軍事条約の破棄問題をもちだすことになるでしょう。

……

「民族の団結さえ実現すれば、軍事条約は不必要のものとなるでしょう」

主席は、国連に関する問題について次のような見解を示した。

「われわれが『読売新聞』記者との談話で、国連が不法につくりあげた朝鮮問題に関する『決議』を取り消すか、そうでなければ朝鮮に対し正しい方針をとって、従来の不法な『決議』を無効にさせてもよい、と言ったことについて、あなた方は、その正しい方針とは具体的にどういうものかと質問しましたが、われわれはそれについて今のところなお研究中です。この問題は国連に対するわれわれの戦術問題と関連しています。

われわれは、国連で朝鮮問題がどう扱われるかを見守りながら適当な戦術上の諸問題を提起しようと思っています。最も重要な問題は、朝鮮人同士の民族的団結を実現するうえで妨げとなる一切の要素を国連から一掃することです。特にわれわれは、国連が朝鮮問題を取り扱う際、ある一方を差別するようなことがあってはならないと主張するものです。

……

われわれは、国連で朝鮮問題を取りあげるかどうかを注視して

います。

もし国連が朝鮮民主主義人民共和国の代表を付帯条件なしに招請するならば、われわれは国連総会に代表を送るつもりです。

われわれは、わが国の代表が国連総会に無条件に招請されるよう、あなた方が日本政府に働きかけていることに感謝しています」

主席は最後に、朝鮮と日本両国の関係問題について言及した。

「日本の記者が日本と朝鮮は近くて遠い国だと書いていますが、それは適切な表現だと思います。朝鮮と日本が近い国でありながら遠い国になっているのは、朝鮮の平和統一の問題ともつながっており、また朝日両国の関係正常化の問題ともつながっています。

あなた方は、朝日関係正常化問題の見通しについて質問しましたが、それは今のところ判断しがたいことです。朝日関係の見通しは何よりも、日本人民がわが国に対する日本政府の非友好的な態度に反対してどうたたかうかに大きくかかっています。

今、日本人民の間では、朝日両国人民の親善を強めるたたかいが次第に高まっています。日本の公明党、社会党をはじめ多くの政党と進歩的な人々、そして広範な日本人民が、わが国に対する日本政府の非友好的な態度に反対し、わが国との関係を改善するためにたたかっています。特に、昨年の秋から日本の著名な人士や各政党の代表団などが親善をはかるため頻繁にわが国を訪れていますが、これはたいへん好ましいことだと思います。

朝日両国の関係正常化と人民の親善をはかるために進められている日本人民のすべての運動が、わが国に対する日本政府の態度に影響を及ぼさないと見ることはできません。歴代の日本政府が、わが国に対してとってきた敵視政策を完全には変更しないとして

も、朝日両国の関係改善を要求する日本人民の声をまったく無視することはできず、形なりにでも彼らの要求を少しずつ受け入れないわけにはいかないでしょう。

あなた方もご承知のとおり、これまで日本政府は、祖国を訪問する総聯代表団の日本再入国を許さなかったが、今度はじめて在日朝鮮人祝賀団の再入国を許可しました。これはあなた方と日本の多くの進歩的な人々、言論界と各階層人民の積極的なたたかいによる貴い結実です。

今後、日本人民の間で、朝日両国人民の親善をはかる運動が引き続き高まって日本政府に圧力を加えるならば、両国の関係は一步一步前進することでしょう。

われわれは、朝日両国の関係正常化を望んではいませんが、そのために日本政府に対し哀願外交をするつもりはありません。われわれが哀願外交をしなくても、日本人民のたたかいと圧力が強まれば、日本政府はわが国に対する態度をある程度変更しないわけにはいかなくなるでしょう。

わが国に対する日本政府の態度は、日本政府が今後も今のような対米追随政策をつづけるかどうかという問題とも関連があると思います。アメリカ帝国主義者に追随する日本政府の政策が、佐藤内閣以後どうなるかは見守るほかはないでしょう。これは多くの問題とからみあっています。

われわれの見るところでは、今、日本の支配層の中にも、アメリカに盲従してはなんら得るものがなく、かえってとんだ目にあうのではないかと考える人たちもいるようです。彼らは、人民の強力なたたかいにもかかわらず、日本政府がアメリカ帝国主

義者に追従して朝鮮分断の政策に固執しつづけるならば、それはむしろ南北朝鮮の全人民を団結させ、日本を相手にたたかわせる結果を招くのではないかと考えることでしょう。

朝日両国の関係正常化問題の見通しがどうなるかは、朝鮮人民自身にもかかっています。南北朝鮮人民がしっかりたたかって祖国を平和的に統一すれば、ゆくゆく日本で誰が政権の座につこうと、日本政府が統一されたわが国に対し、いつまでも非友好的な態度をとるわけにはいかないでしょう。

朝日関係正常化問題の見通しについては大体こう見るのが正しいと考えるものです。

あなた方は、朝日両国の関係正常化のために、当面して文化交流や記者交流などを広く行なってはどうかということですが、われわれはいつでもそれに応じる用意があります。日本政府が門戸を開きさえすれば、われわれは文化交流にも、記者交流にも応じられるし、いかなる交流にも応じることができます。問題は日本政府の態度にかかっています。

あなた方は、沖縄にあるアメリカ帝国主義のすべての軍事基地を完全撤廃するためにたたかっているとのことですが、それは正しいことです。アメリカ帝国主義者が沖縄に軍事基地をそのままおいて利用するというのでは、沖縄が日本に返還されてもなんの意味もありません。

日本人民が『日米安保条約』の廃棄と、日本にあるすべてのアメリカ帝国主義の軍事基地の撤廃を要求してたたかうのは、日本だけでなくアジアの平和のためにも切実に必要なことです。われわれは日本人民のこのようなたたかいを積極的に支持するもの

です」

朝鮮の統一は北朝鮮と南朝鮮の利益となるだけでなく、日本にとっても大きな利益となるという指摘は、主席の明晰な判断力と分析力によるものであった。

45. 米田東吾氏が書き残した言葉

日本社会党衆院議員米田東吾氏には、とりわけ大切にしている手帳があった。

毎日のように開いてみるその手帳は、古びて毛羽が立っていた。

氏が飽きもせず始終読んでいたのは次のような短い文であった。

「わが党员と人民は、隣国である日本に日本社会党のような義理に忠実な真の友人をもっていることを喜びに、誇りに思っています」

それは、金日成主席が飛鳥田一雄社会党委員長と米田東吾氏ら社会党代表団に会った席上で、熱い思いをこめて語った言葉の一節である。

米田東吾氏は1915年新潟県に生まれ、村の小学校を首席で卒業し、高等小学校への進学を希望したが、小作人の子ではそれもかなわず、5年間下男奉公をした末、軍隊生活を行い、その後郷里の郵便局に勤め、労組活動に従事した。50年全通新潟地方本部書記長を経て、62年新潟県評議会会長、67年新潟一区で衆院に初当選し、社会党総務局長、教宣局長を務めた。氏は57年から92年まで、議員を引退するまで15回、引退後2回朝鮮を訪問している。

米田東吾氏が朝鮮を初めて訪問したのは1957年であった。1957年4月24日～30日の間、朝鮮逋信職業同盟の招待を受けた「全通訪朝友好代表団」の一人として平壤に滞在し、各地を見学した。

朝鮮戦争後わずか5年、朝鮮は社会主義建設に沸き立っていた。

平壤駅舎が建設中であり、市内はまだ戦争の傷あとが生々しかったものの、朝鮮人民の建設のたたかいは氏は強烈な印象を受けた。

氏が朝鮮通信職業同盟本部を訪れた時、同盟の副委員長から「米田先生は新潟のご出身ですから、在日朝鮮人の帰国問題で一つお願いしたいことがあります。約60万の在日朝鮮公民の帰国問題が、今日本でも朝鮮でも提起されており、その実現に向けたたたかいは発展しています。おそらくここ一年のうちに実現するでしょう。この帰国は朝鮮人民固有の民族的権利であり、人道問題なのできっと実現させます。その暁には新潟港が帰国船の出航地になります。どうか日本人民はもちろんです、新潟の市民と労働者の皆さんからは特に強い理解と協力をいただきたいと思います。米田先生が帰られたらこのことについて積極的にたたかっていたいただきたいのです」と要望されて、氏は強い緊張を覚え、かたく握手して協力を約束した。

以来米田氏は、日本社会党員としても県労働組合評議会の労働者としても在日朝鮮人の帰国問題から離れることはなかったし、新潟県帰国協力会の役員として尽力した。

1967年9月1日～25日、氏は日本社会党衆院議員として日朝協会の「国民代表団」副団長の資格で2回目の訪朝を行った。

氏は約1カ月間、チョンリマ（千里馬）の勢いで建設が進む各地を見て回った。この時、板門店^{バンムンジョム}の軍事境界線に立ち、休戦とはいえ南北対峙の厳しさに胸が痛んだ。

3回目は、朝鮮対外文化連絡協会の招待を受けて、足鹿覚氏を団長とする「日本社会党朝鮮問題対策特別委員会訪朝代表団」の事務局長として訪朝した。この時、氏はいつになく興奮していた。

この年、日中国交回復がなり、当然日朝国交正常化の動きも日程にのぼるとみられていた。

このような雰囲気の中で米田氏は日朝間の相互理解のために朝鮮に約2週間滞在し、日朝関係について朝鮮対外文化連絡協会の人たちと全般的に意見を交換し、共同声明の発表にも積極的に参加した。

訪朝のたびに金日成主席の温かい人柄にふれて感動していた米田東吾氏は、今度もやはりそのような感動にひたった。

まず、金日成主席に会っていつも感じていることは、非常な大人物だということであり、また、親しみがあり、話をしていると自分の「おやじ」か「おやじさん」に会っているような気がすることであった。そういう人をひきつける風貌、人格をもった方、しかも、それが少しも威圧的なものではなく、思いやりのあるやさしさをもった方であった。

米田氏が佐々木更三氏とともに訪朝した際、70歳を超している佐々木更三氏の体を気づかって金日成主席は、「佐々木先生はお元気でしょうが、お年を気づかってのことです」と言って、医師と看護婦を宿所へ送り、また、訪朝団が平壤を出発して帰る時にも、ハバロフスクまで医師と看護婦をつける配慮を示した。

米田氏は、佐々木先生が大正デモクラシー時代からの闘士で、先輩であるとして敬意を表し、また誠心誠意、資本主義とたたかっている同志として配慮してくださったのだと思いながらも、国事に忙殺される一国の元首としてそういう心づかいまではなかなかできるものではないといたく感嘆した。

米田氏が飛鳥田一雄社会党委員長とともに訪朝した際、いよいよ

よ明日は帰るという前の日に、金日成主席は送別の晩餐会を催して客を招待した。その時の、恒例になっている、招待する側とされる側の挨拶で、最初に挨拶を行った主席の言葉につきのようなものがあつた。

「わが党员と人民は、隣国である日本に日本社会党のような義理に忠実な真の友人をもっていることを喜びに、誇りに思っています」

米田氏は、この言葉に胸がじいんと熱くなつた。

氏は早速手帳を取り出し、永遠に忘れられない主席のその言葉を書き込んだ。

そういう貴重な言葉を自分たちに送ってくれた偉大な人間金日成主席に思いをさせ、米田氏は毎日のように手帳を開いては感慨にひたっていたのである。

氏は主席のこの語を人々に伝えながらこう言っていた。

「この言葉は金日成主席の人柄を一番よく表す言葉だと思う。ここが、日本のお役人の方とか、自民党の先生方と違うところだと思う。朝鮮の第一の指導者であり、責任のある立場であられる主席が、こういうような物の言い方をされると本当に信頼のおける友人のような気がする」

46. 談論風発

朝鮮を訪問して帰国する日本社会党出身参院議員田英夫氏の胸中には、談論風発という言葉が去来していた。

田英夫氏は1947年東大経済学部を卒業後、共同通信社に入り、労組委員長を務め、60年同社文化部長を、さらに東大放送テレビニュース選択責任者を兼任した。71年参院全国区に社会党から出馬し最高得票で当選した。

1972年9月10日、日本社会党参院議員代表団（団長は茜ヶ久保重光氏）の一員として訪朝し、金日成主席の接見を受けた。

長年共同通信社で記者生活を送った氏は、とりわけ鋭敏な感覚で主席の話に聞き入った。

後日、氏はこう書いている。

「私は、新聞記者の経験もあり、さまざまな国の元首や首脳と会見した経験がありますが、あれほど身近でぎっくばらんな、少しも偉そうなところがない人は初めてでした。

その後、韓国の全斗煥チョンドゥファン大統領と会談したことがありますが、そのときには、私と彼の距離は5メートルぐらい離れていました。玉座のようなところに彼は座り、見下ろされる感じで話をしてきました。その際、いきなり『あなたは北に5回ほど行っていますね』と言うのです。私はその頃は、外交の記録をあまり詳しく残していなかったのですが、後で調べてみると、たしかに5回訪問

していました。そのときの突然のそういう問いが、私が後に詳しく外交の記録を残すきっかけになるほど、威圧的なところがありました。

金日成主席は、間に通訳の方を一人置くだけで、まったく私たちと距離をおかずに座って、普通の応接室で話をするような感じでした。

主席との会談は、午前11時くらいから始まったのですが、1時間ほど経ったところで、そろそろ失礼しますと私たちが辞そうとすると、主席は『これから食事をご一緒しましょう』と言って、私たちを隣の部屋に招き入れ、丸い食卓を囲んで昼食をごちそうしてくれました。

その日は、いよいよ日本に帰る日でした。だから私たちの視察の結果を『どうでしたか』とたずねられ、会食が始まりましたが、それはまさに談論風発という感じで終始しました。

私は、新聞記者の経験から、すこし皮肉っぽくこんな質問を試みました。

『どこに行っても、“このダムは私たちの領袖金日成主席のご指導でできたものです”とか、“この果樹園は、あの戦争中、戦争が終わったらここに果樹園をつくろうねと私たちの領袖金日成主席が言われその指導で作ったものです”と、すべて“金日成主席の指導”ということだったので、主席はそういう専門技術の勉強をどこでされたのですか』

すると主席は、『わっはっは』と身体をゆすって笑い、『農民が、ここは条件がいいから、果実を作ると育つとか、建設関係の人がここにダムを作ればうまく水がたまって灌漑用水に使えると

いうことを、教えてくれるんですよ』とほんねで答えられました。

私の意地悪なそんな質問にも非常に率直に答えてくださったので、ますます親しみを覚えました。

そのほか、植物や朝鮮戦争、アメリカの批判などについて、ぽんぽんという感じで話されました。

.....

金日成主席は、そういう大型代表団を相手にされても、すこしも権威ぶらず、尊大ぶったところもなく、先ほどものべましたが本当に豪放磊落で、ざっくばらんです。初めて主席に会う方は、そういう主席にびっくりしたようでした」

47. 朝日善隣は日本をも利する

1972年9月のある日。

うねる波に揺られながら南浦港^{ナンポ}へ向かって1隻の客船がゆっくり進んでいた。そこには金日成主席に会うべく、朝鮮に向かう『毎日新聞』の記者団が乗っていた。

港に着き、下船するとかわいい少女が駆け寄ってかぐわしい花束を記者団団長に贈った。

当時、日本政府の策動で朝日関係は深刻な事態にあった。

日本の人民と進歩的階層、経済および貿易界では、対朝鮮経済交流の拡大と日朝両国の国交正常化を要求する声が高まっていた。

そうした高まりの中で朝鮮国際貿易促進委員会と日朝友好促進議員連盟、日朝貿易会は両国間の貿易を促進するための合意書に調印し、これを受けて朝鮮政府は日本の貿易業者と技術者の朝鮮入国を許可していた。

にもかかわらず、日本政府は合意書を認めず、朝鮮の貿易代表団と技術者の日本入国も朝鮮貿易代表部の設置も許さなかった。

そんな状況のもとで、日本政府が合意書を認め、朝鮮貿易代表部が日本に設けられるまで、朝鮮国際貿易促進委員会は暫定的に「株式会社朝日輸出入商社」にその機能を委任した。

ところが、日本政府は、ありもしない「スパイ事件」なるものをでっち上げて、総聯幹部と在日同胞を不当に逮捕、投獄し、罪のない在日朝鮮公民に暴行を加え、無惨に殺害するなどの挙に出た。

4年前、東京地方裁判所は、日本当局が朴^{パク}正熙^{チョンヒ}傀儡一味と結んででっち上げた「スパイ事件」の裁判で、罪のない在日朝鮮人李さんに懲役6カ月、鄭さんには懲役4カ月、執行猶予2年の判決を言い渡していた。

日本当局の言う「スパイ事件」が朴正熙傀儡一味と共謀した日本当局によりでっち上げられた事件であることはすぐに暴露された。事件は、日本警視庁当局が朴正熙傀儡一味の特務チャン・ユシクを利用してでっち上げたものであった。

警視庁当局は、チャン・ユシクが日本に「密入国」したとして「逮捕」し、「2人の在日朝鮮人が自分を南朝鮮に出国させてやると約束し、実際は自分を共和国に送ろうとした」と供述させ、それを唯一の「証拠」として先の2人を逮捕、拘禁し、裁判所は不当な判決を宣告したのである。

チャン・ユシクは実は船員証を持って日本に入国していたので、日本当局が言う「密入国」ではなく、従って「密出国」すべきなんらの必要もなかった。それに警察に「拘留」されていたチャン・ユシクはいつ釈放されたのか、南朝鮮当局の指示で「本国」に逃げ帰ってしまった。

こうしてみると、先の判決が日本当局と南朝鮮当局の共謀によるものであったことは明らかである。

日本当局がアメリカ帝国主義の傀儡朴正熙一味と野合して在日朝鮮人に迫害を加えた裏には、凶悪な目的がひそんでいた。

それは日本政府が、ありもしない「北からの南侵脅威」を口実に南朝鮮全域に「非常事態」を宣言し、戦争策動に狂奔する朴正熙傀儡一味を支援する一方、祖国統一に向けて果敢にたたかって

いる南朝鮮人民に声援を送っていた在日朝鮮人の氣勢をくじき、さらなる弾圧に乗り出すためであった。

朝鮮民主主義人民共和国政府はすでに数回にわたり、日本当局が国際法と国際的慣例に従って主権国家の海外公民である在日朝鮮人の人権を保護し、彼らの外国人としてのすべての権利と待遇を保障し、在日同胞に対する一切の弾圧と殺人蛮行を中止するよう強く要求していた。

ところが、日本政府は在日朝鮮公民の民主主義的民族権利を抹殺すべく関連悪法の制定を画策した。

佐藤政府の策動は、当時、突然始まったのではなかった。

日本政府は1966年から1968年にかけて毎年、在日朝鮮公民の民主主義的民族教育の弾圧をはかり、「外国人学校法案」なるものを国会に上程し、なんとしても通過させようとはかったが、内外の反対にあってそのつど不発に終わっていた。

日本政府は世論をしずめ、適切な時期に「外国人学校法」をあくまで制定する目的で、「外国人学校制度は別に定める」という条項を加えた「学校教育法の一部改正案」をまたしても国会に上程した。

これは、在日朝鮮人の民主主義的民族教育に干渉し、弾圧することで、在日朝鮮人の子女に「同和教育」を強要する「外国人教育法」を何がなんでも制定しようとする術策で、その裏には、朝鮮敵視政策を一段と強化し、朴正熙傀儡一味を懐柔して南朝鮮再侵略の道を開こうとする意図が隠されていた。

一方、佐藤政府は権力機構を動かし、ならず者どもを使喚して朝鮮人を殺害し、集団暴行を加え、総聯弾圧を強化した。

彼らは岐阜県に住む李さんを刺し殺すなど、朝鮮人を殺害し、学生たちに相ついで危害を加えた。

東京警視庁外事課の警察官数十名が総聯東京都本部品川支部の総聯幹部たちを逮捕、拘禁し、家宅搜索を強行し、また総聯東京都本部墨田支部幹部の家を襲い家宅搜索した。

東京地下鉄の西日暮里駅ではおよそ30名の日本人無頼漢が3人の朝鮮人学生に集団暴行を加えて重傷を負わせ、東京の王子駅付近では20名ほどの無頼漢が1人の朝鮮人学生に集団暴行を働いた。また、富山県富山市では一無頼漢が朝鮮人女性を刺して傷を負わせる事件が発生した。

朝鮮人学生に対する無頼漢の相つぐ集団暴行は、組織的・計画的性格を帯びていた。

そうした時期に金日成主席は『毎日新聞』記者代表団に接見したのであった。

1972年9月17日。

主席は、朝鮮記者同盟中央委員会を通じてあなたがたの質問を受け取ったとして、その一つ一つに回答を与え、朝鮮と日本との関係問題についてこう語った。

「ご存知のように、かつて佐藤内閣のとき日本政府はわが国に対して非常に極端な敵視政策をとってきました。しかし、今田中内閣は佐藤内閣に比べてわが国に対する敵視政策をやや緩和する気運を示しています。佐藤は在日朝鮮公民の祖国への往来や海外旅行に極力反対しました。今では、一部の在日朝鮮公民の海外旅行を許可しており、在日朝鮮公民の祖国訪問も部分的ではあるが認めています。これはよいことだと思います。

しかし朝日両国間の関係で、すべての問題が解決されたとみることはできません。朝日両国間の関係が正常化するためには、まだ多くの問題が解決されなければなりません。

朝日両国間に友好関係を結び、正常な国交を樹立するためにはまず、日本政府がわが国に対する態度を改めるべきです。今日まで朝日両国間に友好関係が結ばれていないのは、もっぱら日本政府のわが国に対する敵視政策のためです。日本政府が朝鮮半島の内政に干渉せず、わが国に対して友好的態度をとるならば、朝日両国間の問題はすべて容易に解決されるでしょう。

朝日両国間の関係問題に対するわれわれの立場は一貫しています。朝鮮民主主義人民共和国は、創建当初からたとえ社会制度は異なるにしても、日本と善隣関係を結ぶことを望んできたし、今日も両国間の異常な事態に一日も早く終止符をうち、正常な関係を樹立することを望んでいます。

日本政府がわが国と善隣関係を持とうとするならば、当然、一辺倒政策をとるべきではなく、朝鮮半島の南と北に対していかなる侵略的性格も持たない等距離政策を実施すべきです。こうして、朝鮮の統一促進に寄与しなければなりません。

日本政府が一辺倒政策を実施し、いずれか一方を他方に反対するように後押しして、朝鮮半島で不和をかもし出そうとするのは非常によくはない行動です。日本政府は、隣の朝鮮半島が安定し、南北朝鮮が統一されて、平和に、幸福に暮らすことを願うべきです。隣でけんかをし、騒がしくては、日本としてもよいはずはないでしょう。われわれは、日本政府が隣邦のわが国に対して友好的な政策を実施するのが、日本のためにも必要であると思います。

もちろん、わが国と日本の間には体制上の違いがあります。しかし現在、日本政府が社会制度の相異なる国とも外交関係をもっている以上、わが国に対しても平等な立場でのぞみ、平和共存の5原則に基づいて国交関係を樹立するのが正しいと考えます。

われわれは日本と国交関係を結ぶ前でも、記者や技術者をはじめ各界人士の往来をひんばんにし、経済、文化の交流を広く進める用意をもっています。このような交流は一方的なものとなつてはならず、あくまでも平等と互惠の原則のもとに行われるべきであります。

ご承知のように、現在、朝日両国間には部分的な交流が行われています。しかし、それは日本政府の非友好的な態度によって一方的な性格をまぬがれていません。記者の交流問題一つをみても、日本の記者であるあなたがたはわが国を訪問することができても、わが国の記者は日本に行くことができません。このように交流が一方的なものになつては、決して両国間の友好関係を発展させることができません。

われわれは具体的な手続きはどうあれ、朝日両国間の善隣関係が結ばれるかどうかは、もっぱら日本政府の態度にかかっていると認めます。

朝日両国間に友好関係を結ぶうえで、日本政府が在日朝鮮公民の民族的権利を保障することがきわめて重要です。

外国公民の民族的権利を保障するのは当然なことであり、それは国際法の要求するところです。しかし今日、在日朝鮮公民は朝鮮民主主義人民共和国の国籍をもっているにもかかわらず、外国人としての相応の待遇を受けていません。これも、わが国に対す

る日本政府の非友好的な態度の現れであります。

われわれは、何よりも在日朝鮮公民の民族教育の権利が十分に保障されるべきであり、帰国の権利と祖国への往来の自由が保障されるべきであると主張します。

あなたがたは、近年日本が経済的に急速な発展を遂げた結果、国際的にいろいろと批判を呼び起こしているとして、日本の現状と対外政策に対するわれわれの意見をただしましたが、これについて簡単に述べようと思います。

われわれは、日本の経済の発展に対して悪くは考えていません。自分の隣邦が経済的に発展するのを悪く思う必要があるでしょうか。日本の経済が発展し、それが軍国主義の復活と他国への侵略に利用されず、日本人民の物質・文化生活の向上と、他国との友好関係の発展に貢献するならば、非常に好ましいことです。

しかしこれまで、日本の反動支配層は、日本独占資本の復活とその支配体制の確立に基づいて国の軍国化を促進し、他国を侵略しようとして狡猾に策動してきました。日本の反動層は、今のところ海外に派兵こそしていませんが、今後他国を軍事的に侵略する足場をつくっています。こういうところに、日本軍国主義復活の危険性が現れています」

続けて主席は、今日、日本の反動層は国の軍国化を積極的に押し進めながら、「援助者」の仮面をかぶってためらいもなく他国を侵略する道に踏み込んでいるとし、彼らは、東南アジアの一部の国の経済的困難を利用して、これらの国に「政府借款」「直接投資」「合弁企業」といった名目で資本の輸出を強め、それらの国の経済的命脈を握ろうとしており、「経済援助」に多くの政治

的付帯条件をつけて一部の新興独立国を右傾化させ、反帝戦線から切り離そうと策している、と指摘した。

主席は、特に日本の支配層が、犯罪的な「韓日協定」の締結を契機に、南朝鮮に対する経済的浸透を本格化し、経済的浸透について政治的・軍事的浸透を進め、再び南朝鮮を完全な植民地に変えようと狂奔しているとし、最近、日本当局者がソウルを訪れて、南朝鮮の為政者たちと「韓日閣僚会談」なるものを開き、南朝鮮の反動層に「援助」を与える代償として、「工業所有権協定」を締結することに合意をみたとのことだが、これは南朝鮮を経済的に日本に従属させるための露骨な侵略行為だと断定し、日本と南朝鮮との間に「工業所有権協定」が結ばれば、日本の独占体が南朝鮮で経済活動に特権を持つことになり、南朝鮮の経済は貪欲な日本独占資本に一層徹底的に従属するようになる、こうなれば、日本帝国主義者が1894年に、日本人の財産と日本居留民を保護するという口実でわが国を侵略したのと同じように、再び南朝鮮を侵略するおそれがある、このように日本独占資本は、日本軍国主義のために海外侵略の道を切り開いている、朝鮮人民は日本独占資本の肥大化に警戒心を高めており、日本経済の軍国化とその海外侵略に反対して断固たたかっているとして、こう続けた。

「日本の反動層は、歴史の教訓を忘れてはならず、日本経済の軍国化と海外侵略策動をやめるべきです。もし、彼らが歴史の教訓を忘れて引き続き海外侵略の道を進むならば、朝鮮人民と世界の進歩的人民の闘争によって再び恥ずべき敗北をこうむるであります」

主席は、朝鮮人民は日本軍国主義の復活と日本反動層の海外侵

略策動に反対する日本人民の正義の闘争に連帯を送るとして、こう述べた。

「わたしは、この機会をかりて、民主主義的民族権利を守るための在日朝鮮公民の闘争を援助し、祖国の自主的平和統一をめざす朝鮮人民の闘争に積極的な支持を寄せている日本人民と、日本の進歩的な言論界のみなさんに挨拶を送ります」

記者たちは、朝鮮に対して友好的な政策を実施するのは日本のためにも必要であるとする主席の言葉を噛みしめていた。

48. ざっくばらんな人

1972年10月6日、『世界』編集局長安江良介氏は金日成主席と会見した。

後日、氏はその時の所感を次のように書いている。

「金日成主席との会見は、1972年10月6日に私（安江）が単独会見として行われた。平壤市の郊外の山中にあって湖ともいうべき美しい灌漑用の貯水池に面した政府招待所の一つに私は宿泊していたが、当日の朝、主席はわざわざ政府招待所を訪ねてこられ、6時間半の長時間にわたって話しあうことができた。

その日は美しい秋晴れの日であったが、貯水池を眺めながら農業建設の成功が話題になった。すると主席は『李飯という言葉を知っていますか』と訊ねた。私は知りませんと答えると、主席は『そうでしょう』と楽しそうに大笑して説明した。『李飯というのは白米のことです。なぜ李飯^{イバフ}というかといえば、昔は、白米を食べられたのは李王朝の王家の人たちだけで、地主でさえいつもは食べられなかったからです。日本植民地時代には、一生に一度でよいから腹一杯白米を食べたいというのが、民衆の希いでした。親の葬式にでもせめて白いごはんを出したいと思っても、結局は粟めしの上に1センチほど白米を盛りつけて白米のようにみせかけたものしか出せませんでした。だが、いまはすべての国民が白米を食べられます』

この主席の言葉に対応した話を私はあらゆるところで聞いた。即ち『瓦の屋根の家に住み、絹の着物をきて、白米を食べたいというのが長年の私たちの憧れであった。いまは私たちは、この三つとも自分たちの手にしている。昔の地主の生活と同じである。いや、国家の保障によって大学までも無料でゆけることにかつての地主層でさえ昔より良いとっている』というのである。この言葉には嘘はないと私には思えた。もちろん、国民生活には不十分な点が多いことは主席をはじめ多くの人たちが率直に認めている。

だが、注意すべきことは、衣食住に加えて教育・医療という国民生活の基本的な課題において十分な保障がなされていることであり、また一つには、そのことが、かつての歴史との比較によって、国民につよい自信を与え、将来への楽観に繋がっていることである。それは、国際的交流への積極的姿勢と統一への具体的志向となってあらわれているともいえる。

金日成主席は、あらかじめ提出した編集部への質問に積極的に答えられた。質問は多岐にわたり長文でもあるので、省略するが、主席の回答で印象的に思えたのは、朝鮮革命において、内部的困難が多かったことをかくそうとしなかったことである。事大主義と官僚主義がいかに悪弊をもたらしたか、その克服のためにいかに努力してきたかを、闊達に話して尽きることはなかった。午餐会の席上においても、社会主義革命における知識人の役割について興味深い事例が話された。

また、朝鮮統一の展望については、自信にみちた冷静な見通しの反面、意外とも思えるほどにきびしい指摘があった。統一問題

および日朝交流に関しては、全朝鮮的な視座に立った考えに接することができた」

ちなみに、安江良介氏は1967～1970年美濃部革新都政の特別秘書を務め、翌年『世界』編集長として朝鮮問題に意欲的な誌面づくりで注目を集め、90年より岩波書店の4代目社長に就任した。氏は「岩波ブックレット」により、日本ジャーナリスト会議奨励賞を受賞している。

49. 一辺倒よりも等距離

金日成主席は、『世界』編集局長の朝鮮訪問を歓迎し、あわせて岩波書店社長が手紙を寄せてくれたことに謝意を表し、帰れば社長に挨拶を伝えてほしいと言った後、質問に答えた。

主席は、『毎日新聞』の記者たちにも話したが、あなたにも概括して話すことにしようと言い、チュチェ思想が生まれた経緯とその根源について詳細に説明した。

ついで主席は、昨年のアジア情勢の発展をどう評価しているかという質問に答えた。

「昨年、日本人民の闘争もたいへん力強く繰り広げられました。日本人民の闘争が強力に行われたため佐藤反動政府は追い落とされ、田中政府が出現しました。これは、日本人民の闘争の結果だと思います。

われわれは、日本人民の闘争を高く評価し、それを全面的に支持します。日本人民の闘争は、佐藤内閣を退陣させたことにのみ意義があるのではなく、日本政府に自主の道を進ませるうえで、非常に大きな意義があると思います。これは、たいへんよいことだと思います。

最近、中日会談が行われ、中日両国間に共同声明が発表されましたが、この共同声明はよいものだと思います。このたび、中日両国が国交の正常化を実現したことは、アジア平和のために大きく寄与するものと思います。

日本人民は、朝鮮人民との親善・友好関係を結ぶためのたたか
いも積極的に展開しました。その結果、現在両国間には往来が始
まっており、この過程を通じて相互間の理解をいっそう深めてお
り、経済交流もいっそう発展する見通しがあります。このことも
情勢を人民の側に有利にかえ、緊張緩和に貢献したと思います。

.....

総体的にみて、昨年、アジア情勢はアジアの人民に有利に発展
し、アメリカ帝国主義はアジアで大きな失敗をなめたといえます。

アメリカ帝国主義は、日本を意のままに翻弄できなくなりました。
もちろん、米日間の従属的同盟関係は残っていますが、日本
はアメリカ帝国主義の統制から抜け出そうとしています。

アメリカ帝国主義はまた、中国に対する封じ込め政策を放棄せ
ざるをえなくなり、その結果、中国の国際的威信はいっそう高ま
りました。

これらのことは、アジア人民によい結果をもたらすものであつ
て、悪い結果をもたらすものとは考えられません。

アメリカ帝国主義者は、ベトナムに対し爆撃を強化したり、い
ろいろな方法で脅迫したりしてみたけれども、ベトナム人民は屈
服したのではなく、かえって闘争をいっそう力強く繰り広げてい
ます。これは、アメリカ帝国主義にとって、もう手のうちようが
ないことを物語っています。

アジアではアジア人が主人となるべきであって、アメリカ帝国
主義者に主人顔をさせてはなりません。アジアに足場を持っている
アメリカ帝国主義勢力をすっかり追い出さなければなりません。
このためには、もちろん今後、力強い闘争を繰り広げなければな

りません。現在、一つ明白に言えることは、アジア人民の自覚と闘争精神が強く、アジア人民がアメリカ帝国主義の支配を受けたがらないということです。

一口に言って、今後アジアの情勢は、アジア人同士で平和に、幸せに暮らせるような方向へ発展するであろうし、自由と解放、民族独立と平和のためにたたかうアジア人民の側にますます有利に変わっていくものと考えます」

主席は祖国統一問題に関する質問には次のように答えた。

「南北共同声明は、もちろんわれわれの主張した3大原則に基づいて発表されました。しかし、それが発表されたからといって、すべての問題が解決されたわけではありません。ただ、閉ざされていた扉を開き、はじめて互いに会ってあいさつを交わしたにすぎず、今後の討議のための原則を決めておいたにすぎないのです。今南朝鮮の為政者は、南北会談を開いておきながら、いろいろ不当な行為を行っています。

彼らは、われわれが『南進』するおそれがあるといって『非常事態』を宣言しましたが、平和的に問題を解決するという南北共同声明を発表したのちにも、それを取り消していません。彼らは『非常事態』を取り消していないばかりでなく、共産党の言うことは信じられないだの、これから様子をみななければならないだのといって、共同声明の諸事項を履行していません。

彼らは、われわれの言葉を信じられないといっていますが、それならわれわれにどうせよというのでしょうか。

われわれが武装を解除して、それをおさめろとでもいうのでしょうか。それはあまりにも理不尽な要求です。われわれも、その

ようにすることを彼らに要求していません。平和的に解決しようという約束をしたなら、『非常事態』も取り消し、一連の反応を示さなければならないはずであるのに、彼らは共産党の言うことは信用できないから、『非常事態』を取り消すことはできないし、『反共法』も取り消すことはできないとっており、平和統一に関する政治協商も行えないと拒んで、いろいろと正しくない行動を続けています。南朝鮮の為政者は、外部勢力の干渉を受けることなく、統一を実現しようという共同声明を発表しておきながら、国連は外部勢力でないといっています。

今、アメリカ帝国主義者は自分の軍隊を南朝鮮から撤退させないための口実を見つけようとしています。これが、わが国の統一問題を解決するうえでのもっとも重要な障害物です。アメリカ帝国主義者は、南北会談を歓迎すると言明しておきながら、しばらくしてまた、南朝鮮に引き続き兵器を提供するつもりだとか、南朝鮮から撤退しないなどといっています。結局は、アメリカ帝国主義者とそれに追従する反動勢力がわが国の統一を妨害しているのです。

南北共同声明が発表されたのち、多くの人が祖国統一に期待を寄せています。ところが、今一部の反動層は、人民のこの念願が実現されることを妨げながら、平和統一は不可能だといっており、一部の人、南北が民族的に団結するということは不可能だといっています。

問題は、今外部勢力とその忠僕が南北の対話を妨害しているところにあります。外部勢力というのは、アメリカ帝国主義者であり、日本の一部の反動階層もこれに属すると言えるでしょう。基

本はアメリカ帝国主義者です。彼らは、口先では南北の対話を支持すると言っていますが、実際には妨害しています。

アジア人民と全世界の人民が、力を合わせてアメリカ帝国主義に圧力を加えなければならないと思います。アメリカ帝国主義者は中国とも関係を改善すると言っており、ソ連とも関係を改善すると言いながら、なんのためにわが国土の半分を占める南朝鮮では、自己の軍事基地を維持しようとするのでしょうか。彼らは、われわれが攻めていきはしないかと恐れて南朝鮮を『保護』するために来ていると言いますが、われわれが平和的に祖国の統一を実現すると言っている以上、なんのためにそこに居座ろうとするのでしょうか。彼らは、国連でも朝鮮問題を討議することを頭から一年間延期しようと言主張しました。われわれは、なんのために朝鮮問題の討議を延期するのか、南北の朝鮮人が対話を始めたのだから、朝鮮人同士を立派に団結させるため、朝鮮の統一に妨げとなるあらゆる要素を取り除くべきではないか、そうしてこそ、朝鮮の統一を助けることになるのではないかと主張しました。こうした意味から、アルジェリアの案が提出されたのですが、アメリカの妨害によってこれは拒否されました。今回の国連総会では、多くの国がわれわれに助力するためにアルジェリアの案を支持しました。われわれは、われわれの立場を支持して大いに努力してくれた国々に感謝しています。

南朝鮮の代表は国連に行って自由に活動できるが、われわれの代表はそこへ行って活動することができません。

国連総会で、朝鮮問題の討議が一年間延期されたので、朝鮮の統一はそれだけいっそう妨げられることとなります。問題は、ア

アメリカ帝国主義者が主動者となって妨害策動を行っているところにあります。一国内に外国の軍隊が来て占領している状況のもとで、自由な統一を実現することができないのは明白なことです。アメリカ帝国主義者は、われわれが南朝鮮を侵略するおそれがあるので『保護』していると言っていますが、われわれが平和的に統一しようと言うのに、そこに引き続き居座ろうとするのはなんのためでしょうか。彼らは、侵略的な野心をそのままさらけ出しています。侵略的な野心は帝国主義の本性です。

われわれ朝鮮人がアメリカ帝国主義に積極的に反対して立ち上がっているのは、理由のないことではありません。アメリカ帝国主義がわが国の統一を妨害し、南朝鮮を引き続き占領しようとしているのに、われわれが彼らに好意的な態度を示すことはできないではありませんか。

妨害する勢力さえなければ、朝鮮人同士で共通点を見つけ出すことができると考えます。もちろん、南北の間に体制上の違いがあり、その他、いろいろな問題がありますが、われわれは一つの民族ですから共通点を見出し、民族の団結をなし遂げることができると思います。『毎日新聞』の記者たちにも話しましたが、われわれは、今すぐ統一を実現することができないならば、現在の体制をそのままにして、連邦制を実施しようと提議しました。

わたしは、日本人民を含むアジア諸国の人民が団結して、朝鮮の統一を助けるために努力してくれるよう希望します。

一つの民族をむりやりに二つに引き裂くことはできません。わが朝鮮人民は、言葉や文字も同じであり、長い伝統を持っている単一民族です。このような民族を無理に分裂させ二つにすること

はできないではありませんか。われわれは今苦痛をなめています
が、これはもちろん心痛のいたりであります。われわれは団結し
て、統一を実現するために力強くたたかわなければならないと考
えます。

現在、南朝鮮為政者の方針は、遅延戦術をとることです。

彼らは、一日でも余計に命をつなぎとめようとしているのです。
われわれが祖国統一の3大原則を打ち出したので、彼らには不当
な行動をとる口実がなくなりました。それで今、彼らは国連での
朝鮮問題の討議を延期させる策動をしており、さまざまな奇弁を
並べ立てています。たとえ彼らが、今年、国連での朝鮮問題の討
議をさらに1年間延期させたとはいえ、それが長続きするはずは
ないと考えます。人民を長い間欺くことはできません。歴史は人
民を欺くことを許しません。人民は自覚し、闘争はますます高ま
ることでしょう。

われわれが得た資料によると、最近、南朝鮮の野党の一部の人
士は、南北共同声明を支持する、連邦制を受け入れる必要がある、
南北の諸政党、大衆団体の政治協商を実現すべきだと言っていま
す。今日南朝鮮人民の間では、統一に対する世論がますます高ま
っています。南朝鮮では弾圧が厳しいので、このようなことを新
聞に発表することができません。日本の言論界が、南朝鮮の人民
と野党人士の正当な声を発表してくれるのもよいと思います。南
朝鮮では統一を妨げる反動勢力の弾圧がひどく、彼らの内部も複
雑なので、ああだの、こうだのと言っていますが、人民はどれが
正しいのかをよく知っています。

南朝鮮には、一つの民族が永遠に分裂し、一つの国家が二つに

分断されることを望む勢力はきわめて少なく、多くの人は、どのような方法でも統一をしなければならないと言っています。それゆえ、時間は多少かかるかも知れませんが、希望を持つことができます。南朝鮮の為政者は、誹謗中傷しないことを自分からさきに提案しておきながらそれに違反したので、われわれは今度『毎日新聞』記者との談話でそれに言及したところ、最近、李厚洛^{リ フラク}の名で、統一に妨げとなるようなことを言わないでほしいと南朝鮮の言論界に依頼する『書簡』を発表しました。これがまやかしのかなんなのかはわかりません。もし、これが本心であるとすれば、われわれも好意を持って対応するつもりです。

かつては南北間でなんらの接触もできませんでしたが、今は赤十字会談を通して接触し、調節委員会を通して接触を行っています。これは、過去に比べてよい点であります。このように接触するなかで、共通点を見出すことができると思います」

主席はついで朝日両国間の関係問題について次のように語った。

「われわれは、日本人民との関係でこの1年間に大きな前進がもたらされたと考えます。今、朝日両国人民の間関係は好ましく発展しています。

われわれは、田中政府が平和共存の5原則に基づいて社会主義諸国との関係を結んでいることからおして、今後、わが国に対しても悪く接するとは考えません。田中内閣は現在、わが国との人々の往来も許可しており、最近にはわが国の学者も入国させました。聞くところによると、わが国の記者代表団を招くとも言っており、今後技術者も往来できるだろうと言っています。このように田中内閣がかつての佐藤内閣のときのわが国に対する敵視政策を緩和

するのは非常によいことだと考えます。

今日、『毎日新聞』『朝日新聞』をはじめ日本の言論界でも、朝鮮と日本との関係問題を再検討する必要があるのではないかと言っています。とくに、わが国に対する日本人民の理解が次第に深まっています。

このような諸点からして、われわれは、今後両国間の関係がいつそう緊密になるものと予測することができます。

われわれは、日本政府が真にアジア平和のために努力するなら、最小限、わが国の統一に妨げにならないような政策をとるべきだと考えており、われわれは、日本政府がそうすることを希望しています。日本政府がこのようにしようとするれば、当然、朝鮮半島の南と北に対して一辺倒政策をとろうとせず、いかなる侵略的性格も持たない等距離政策をとらなければなりません。そうして、わが国の統一の促進に力ぞえとなるようにすべきだと思います。

われわれは、朝日両国の間に貿易関係を発展させるからといって、わが国が日本の原料供給基地や商品市場になるのではないかと憂慮するものではありません。わが国は自主的な国であり、自立的経済を持っている国であり、自らの工業の基礎を持っているため、わが国が絶対に外国の原料供給基地や商品市場になるようなことはない、われわれは確信しています。

もちろん、われわれは一部の原料を日本に売ることもできます。だからといって、わが国が日本の原料供給基地になるわけではありません。わが国には鉄鉱石が豊富ですが、それを日本に多少売るからといって、わが国が日本の原料供給基地になるとは言えないではありませんか。自主性と自立性を持たない国であれば、外

国の原料供給基地に転落することもあるでしょう。しかし、われわれは自主性と自立的経済を持っているので、そのようにはなりません。

われわれはそういったことを憂慮していません。反対に、われわれは平等と互恵の原則で日本と貿易を発展させるのが両国人民の利益に合致し、有益であると考えます。われわれは、日本当局が貿易をしようと言え、それに応ずる用意があります。

われわれは、朝日両国間の経済交流を通じて日本からなにか大きな恩恵を受けられるものとは期待していません。しかしわれわれは、朝日両国の間に互恵の原則に立って、いくらでも経済交流を行うことができるのではないかと考えています。

すべての交流は平等と互恵の原則に基づいて行われるべきであり、侵略的な方法で行われてはなりません。われわれは他の資本主義諸国とも貿易を行っていますが、それは、互恵の原則に基づいています。われわれは、われわれの自立性を奪われるようなことはありえないと考えます。

しかし、南朝鮮ではこれと違う正反対の現象が起こっています。南朝鮮では、日本の工場を導入して共同で経営するか、またはその経営権を日本側に引き渡す形式で経済交流を行っていますが、これは従属的な経済交流とみなすべきものです。

われわれはこういうことを許しません。われわれは日本からプラント輸入をする場合にも、その代価を支払うでしょう。われわれは、日本と平等な立場で経済交流を行う考えです。われわれは日本人がわが国に来て工業経営権や所有権を持つことを許さないし、また、日本から長期借款のようなものを受けることも望みま

せん。われわれは国際貿易の原則に基づいて貿易をしようと考えています。

あなたは、日本と南朝鮮の間に『日韓条約』があっても、朝鮮が日本と国交を結ぶことができるだろうかと質問しましたが、われわれは、『韓日条約』をそのままにして日本と国交を結ぼうと言ったことはありません。

『韓日条約』のうちでいちばん悪いのは三番目の条項です。それには、朝鮮半島における合法政府は『大韓民国』であるとしていますが、これはわが国に対する干渉です。

美濃部知事がわが国に来たとき、わたしは『日韓条約』を承認できないと言いました。日本政府が『大韓民国政府』を朝鮮半島における唯一の合法『政府』だと言っているのは、日本の対米追随政策によるものとみることにもできるし、また、日本反動政権のわれわれに対する敵視政策から出たものとみこともできます。それゆえ『日韓条約』をそのままにしておく条件のもとでは、日本がわれわれに平等に接しているとみことはできません。それを無効にするか、あるいは取り消すか、なんらかの方策がなければならぬと考えます。

これにはいろいろと問題があります。たとえば、『大韓民国』が朝鮮半島における唯一の『政府』だという『国連の決定』を取り消すならば、『韓日条約』はおのずと取り消されることになるでしょう。というのは、『韓日条約』が『国連の決議』を根拠にあげているからです。

われわれはまだ、日本政府と国交を樹立しようということを提起していません。われわれは、哀願外交をするつもりはありません

ん。われわれは、日本政府がわが国と国交を樹立したければするし、したくなければしなくてもよいというのです。むろん、両国間に国交を樹立すればなおよいことです。もし、日本が朝鮮民主主義人民共和国との国交を正常化すれば、『韓日条約』の三番目の条項は無効になったものとみることができるでしょう。この問題に関連しては多くの問題が提起されます。われわれは、この問題をまだ日本政府に正式に提起していません。われわれは、われわれに対する日本政府の態度を検討しながら、朝日関係問題を解決していくつもりです」

長時間にわたる主席の回答は終わり、別れる時間になった。

多忙な中で貴重な時間をさき懇切な回答をいただいたとして恐縮する編集局長に、主席はほほえんで言った。

「わたしは、あなたがわが国を訪問された機会に、あなたと長時間話すことができたことを喜ばしく思います。こうして意見が交わせたことをうれしく思います」

50. 人民の慈父、人類の慈父

1972年11月、平壤を訪問した日本教職員組合中央執行委員長榎枝元文氏は16日、金日成主席の接見を受けた。

以下はその印象記である。

「私の共和国訪問は、金日成主席が60歳の誕生日を迎えられた1972年、私が、日教組委員長当時、日教組代表10名とマスコミ関係者5名、合せて15名の代表団を編成して約10日間、友好親善を主として教育交流を中心に訪朝したのが最初である。

最初の1972年当時は日本政府は異常なまでにかたくなで、渡航目的地を『朝鮮』としては旅券が交付されず、止むなくソ連・中国からの招待状を貰ってモスクワに飛び、そこから逆流して平壤に入り、帰途は北京——香港経由という道程をとらざるを得なかった。

平壤に到着して一番印象的であったのは、至るところに建ち並んでいる労働者住宅と、明るく希望にみちて新しい朝鮮建設に昼夜を分かたず精出している労働者の姿であった。そして、それを象徴するかの如く平壤市中心部に空高く聳えたっている、平壤市内どこからも眺められる金日成主席の巨大な銅像と、チョンリマの勇姿であった。

しかし当時は、朝鮮戦争による被災の処理を終わって新しい朝鮮の建設にとりかかって間もない頃で、地方はもちろん平壤市内

の道路も舗装していないところが多く、外国人用のホテルも平壤国際ホテルがただ一つ目につく程度で、労働者住宅もせいぜい4階建が最高であった。だが私が驚異に感じたのは、金日成主席が創始されたチュチェ思想による革命と建設であった。すなわち、自国の革命と建設にあたっては他人への依存心を捨て、自分の頭で考え、自分の力を信じて自力更生の革命精神を発揮し、自分の問題は自分自身が責任をもって解決する、というものである。思想のうえでの主体、政治のうえでの自主、経済のうえでの自立、国防のうえでの自衛というチュチェ思想による建設は、チョソンの資源により、チョソン人民の頭脳と力によって、日進月歩の勢いで進められていることであった。

金日成主席が執務されている内閣の建物に案内されてエレベーターを降りたとたん、私たちに握手の手をさしのべて柔和な笑顔で迎えてくれた人、それが金日成主席であった。

日本なら、総理はもとより大臣に面会するにしても、部屋に通されてしばらく待たされた後、さも威厳ありげに主人公がお出ましになるというのが通例であるだけに、先ず面食らったのは私だけではなかった。さすがにチョソン人民が心から敬愛し、父とも仰ぐにふさわしい人、これが私の第一印象であった。

早速エレベーターの前で記念撮影を行った後、主席の誘導で会見室に移った。

私が冒頭、主席の60歳の還暦のお祝いを述べると主席は、『60歳とは、やっとな我が国と同様、幼年期を脱したところです』と冗談で答えられ、会見は初対面の堅苦しきなどみじんも感じさせない穏やかな雰囲気の中かで約1時間半にわたって行われた。

私たちが教育関係の代表団であったことから自然、会談の内容は教育問題に移った。

主席は、次の世代を育てるチュチェ思想に基づく教育原理について、系統的に、かつ理論的に披露して下さった。

日本の植民地支配の時代における約80%の文盲をなくすために、まず40歳代以上の人びとに初等教育程度の学力をつけることからこの国の教育は始められ、72年当時すでに60万人にのぼる民族技術幹部を養成し、さらに、全人民のインテリ化に向けての努力がつつけられているということであった。

金日成主席の言葉でとくに印象に残ったことは、『子供は国の宝であり、老人は国の恩人である』ということであった。

老人は革命の功労者であるから、その老後の生活はみんなで守らなければならない。また、子供は国の未来を創造する宝であるから、その教育は何よりも大切にしなければならない。これから育つ子供たちの教育は、未来を育てる貴い事業であり、未来のためには何ものも惜しんではならない、ともいわれた。この話を聞きながら私は、平壤市内の中央部の11万平方メートルという広大な土地に、13階建のビルを建て、その中に500のサークルと200の実験室をもち、その他図書館、体育館、映画館、劇場までもが完備された広大な少年宮殿で、楽しく課外活動に取り組んでいた子供たちの幸せな姿が目に見えんできた。

このような政策を通じて金日成主席は、1972年からはじめられた10年制義務教育を5カ年で完成し、そのうえの高等専門学校および大学教育によって全人民のインテリ化を実現するという計画をすすめていた。もちろん量だけではない。人民学校は1クラス

30名以下、高等中学校は40名以下というクラス編成で、しかも1クラス正・副2名の教師が配置され、行き届いた教育が行われていた。

また、日本との関係について金日成主席は、『日本とチョソンとは、歴史的にみても昔から長い間友好的な往来がつづけられてきた。これからも善隣関係を保ちたいと考えている。友好関係は必ずしも国交回復がなければできないとは考えていない。文化、経済などの交流をつづけることによってもそれは実現できる。しかし、自らの説を曲げ、頭を下げてまでそれをすすめるという屈辱的なことはやらない。これは日本に対してだけでなく、他の国々に対しても同様であり、乞い願う政策はとらない。こうしたことに日本政府が妨害をしなければよいと思っている。また、南北朝鮮の統一は、北と南にいる朝鮮民族同士が話し合うことであって、他の国がこれに介入すべきではない。日本政府が南北朝鮮に対してどのような外交政策をとるかは日本政府自らがきめることである。朝鮮民族が自主的にすすめようとする統一を、日本政府が妨害したり、統一に逆流するような行動はとるべきではない』と述べられた」

主席の話聞きながら榎枝元文氏は、金日成主席は偉大な人間、偉大な愛国者であり、人民の慈父、人類の慈父であると痛感した。

51. 教育は未来を育む重大事

奥山えみ子氏は1920年の生まれで新竹州高女を卒業した後、日本教職員組合中央執行委員会婦人部長を務めた。1970年代に入り、氏は、朝鮮で未来のためには何も惜しんではならないとして、教育事業に深い関心を払っている金日成主席にぜひ会いたいと思っていた。

その念願がかない、1972年11月、楨枝委員長を団長とする日教組訪朝団の一員として平壤入りし、金日成主席の接見を受けた。

後日、氏は「金日成主席との会見」と題する文で、主席から教育問題に関する説明を受けた感想を述べている。

「金日成主席と我々代表団との会見は、最終日程の1972年11月16日、10時40分から行われた。

私たちが案内に従ってエレベーターを降りたところに、主席は柔和な笑顔で、私たちに握手の手をさしのべながら待たれていた。さすがに、朝鮮人民が心から敬愛し父と仰ぐにふさわしい人、これが私の第一印象であった。

会見は、初対面の堅苦しきなどみじんも感じさせない和やかな雰囲気の中で、約1時間余にわたって行われた。

まず主席は、日教組代表団が朝鮮を訪問したことを熱烈に歓迎すると前置きして、去る4月15日の主席満60歳の誕生日を祝って、日教組・各県教組からお祝いの言葉や品々が贈られたことに厚く

感謝する、というあいさつを述べられた。

そして、『日本国内において日教組が常在日朝鮮公民の民族教育のために協力し、また日本と朝鮮の自由往来のために尽力していることをよく知っているし感謝している。今後とも日朝両国の教育者が互いに友好親善を深めていってもらいたい』と、非常に真心のこもったあいさつがあった。

これに対し、植枝委員長は日教組代表団の朝鮮訪問に対し、金日成主席が格別の配慮をして下さったことに深く感謝すると前置きして、『日本国内における私どもの運動をおほめいただき恐縮である。日教組は、1947年結成以来、一貫して日本の平和と独立・民主主義のためにたたかい、二度と再び侵略戦争をおこすことのない日本人を育成するために努力をつづけている。しかし、日本政府が未だに朝鮮を認めていないことや、今日、日本国内に軍国主義復活の動きがあることなど、私たちの今までのたたかいはまだまだ不十分であったことを深く反省している。これからさらに、力強く運動を発展させて行きたい』と答え、相互の友好と連帯をいっそう深めることができた。

つづいて、会談の内容は次第に教育問題に移った。私たちは、次の世代を革命家として育てることに基本をおいたこの国の主体思想チュチュエに基づく教育原理について、その創始者であり、指導者である金日成主席自身からうかがうことができた。

それは、9日間にわたる私たちの、教育を中心とする具体的な見聞の内容について、一つ一つ系統的に整理し、理論的にまとめた総括のような説明であった。

日本の植民地支配の時代における、住民の80%という文盲をな

くすことから、この国の教育は始められた。そして今、すでに60万の民族幹部を擁し、さらに、全人民のインテリ化に向けて努力がつつけられているということである。

共和国では、教育そのものが革命事業である。金日成主席は、『私たちが忘れてはならないことは、朝鮮の未来のために、青年の未来のためにたたかうことである。これから育つ子どもたちの教育は、未来を育てる貴い事業であるから、未来のためには何ものも惜しんではならない』と述べられた。

……

金日成主席は、年間を通じて、工場といわず学校といわず、一つひとつの職場・農村・そして託児所・幼稚園……の、すべての職場に何回となく足を運び、直接指導や話し合いをされている。だから、主席の頭の中には朝鮮の国のすみからすみまでの実情が、はっきりと描かれ、どこの農村が今どんな状態になっているか、一つひとつの学校の経営の状況まで手にとるように知っている。

金日成主席は、72年9月から実行期に入った10年制高等中学義務教育の実施についても、『ある郡では5カ年もかからず2年ないし3年でやれると言っていた。あそこは、それが可能だと思う。このような意気込みを見ると、全国的にももっと早くそれは達成されると思うが、それにつけても問題なのは教員不足である。その速いテンポに合わせて養成することができない』と言う。

共和国では、こうした教員不足の中でも、決して1学級40人も50人もという、すしづめ学級などにはしていない。人民学校30名以下、高等中学校でも最高40名の学級編制である。現在、教員資格をもちながら他の職についている者に教職にもどるよう呼びか

けているという。

.....

以上のような長時間にわたる教育問題を中心とした会談のあと、私たち代表団が提出した、① 日朝国交回復問題、② 南北統一問題、③ 共和国における憲法改正問題の3点にわたる質問について、回答があった」

52. 現地指導の「同行者」

1972年9月、日本の大阪港を出発した1隻の貨客船が朝鮮の西海岸の南浦港ナンポに着いた。それには日朝文化交流協会代表委員・日本と朝鮮の労働者交流連帯連絡会代表委員・日本労働組合総評議会顧問岩井章氏の一行が乗っていた。

1955年、弱冠33歳にして総評事務局長に就任し、70年まで15年間務めた氏は、議長太田薫氏とのコンビで総評の全盛時代を築いた。総評退任後も労働運動にかかわり、80年代以降は、朝鮮の自主的統一運動を積極的に支援した。

氏は朝鮮を訪問し、金日成主席の現地指導に「同行」した最初の外国人である。

以下は氏の回想記の一部である。

「私は金日成主席には前後3回程お会いしました。その印象を一言でいえば、卓越した指導者ということでもあります。全く気取りの無い、気さくな大衆的風格をもった人柄であります。たしかに年に何回も工場や農村に出掛けて、労働者、農民と分け隔てなく話し合うことがピタリの人柄です。

私が最初にお会いしたのは1972年だったと思います。主席が私に会うという連絡を受け、十分な用意もせずに会見場へ急ぎました。村の中心に客を招待する建物がありました。こんもりとした林を進むと、そこに体格の良い金日成主席が笑顔一杯で手を差し

延べていました。初めて会う主席ですが、余りにも気さくな態度でしたから、緊張感は全くありませんでした。隣のおじさんに会った様な気分でした。

挨拶もそこそこに、主席の専用車の大型ベンツに乗せられました。これから海を埋め立てた田圃の現地指導に出掛けるというわけです。たわわに実った水田の小径に車を乗り入れると、そこへ協同農場の責任者らしい人が飛んできました。主席は車から降りながら、ごく気軽に『今年の作柄はどうか』と尋ねました。責任者は『今年はトントンくらいの出来です』と答え、主席は『それは良い出来だ』と大声で、上機嫌に笑いました。

その後、私は主席に質問をしました。『海だったところをどうやって塩分を除いたのですか』と。主席は『それは企業秘密です』と言いながら笑いました。むろんそれは冗談話で言ったのでしょう。あとで判ったことは海水を徹底的に水で流すのだということです。この一例で主席の現地指導の実際の姿が良く判ります。一国の指導者でこんな風に労働者、農民に接触する人は余り多くないだろうと深い感銘を受けました。今日、共和国で主席が国民に絶対の信頼と尊敬を受けている原因はここにあると思います」

53. 思いがけない誕生祝い

1973年4月、さまざまな花が咲き誇るのどかな春の日である。

その美しい4月10日、日本社会党中央執行委員会委員・国際局長川崎寛治氏は、北京経由で平壤入りした。

当時、日本の国民運動は、沖縄返還問題、日中国交回復問題、ベトナム戦争問題に集中してたたかわれていた。

アメリカはベトナム戦争で敗北し、パリでベトナム和平協定が調印された情勢の中で川崎寛治氏は、日朝関係の促進に一肌脱ごうと思い立ち、そのためには金日成主席に直接会う必要があるとして平壤に向かったのである。

氏は東京を発つ前に、中曽根通産相に会い、日朝通産官僚の相互交流を提案し、朝鮮側が受け入れるならば送ろうという約束を取りつけた。

平壤に到着した氏はすこぶる緊張していた。

ところが主席との会見はなかなか実現しなかった。このまま帰らなければならないのかと、気はあせり落ち着きなく、じりじりしていたところへ、朗報がもたらされた。

4月18日に会おうという主席の意向を知らされたのである。

満面に明るい笑みをたたえ、両手を広げて温かく迎えた主席は、待たせて済まなかった、外国のお客が来ていたのです、その代わり今日は一日あなたがたに空けてあるので、じっくり話し合いましょう、と言った。

氏は中曽根通産相と約束した日朝通産官僚の相互交流問題について説明した。

主席は、朝鮮には日本の文献を読める者が多いし、体格も日本人に似ているのだから、ヨーロッパから輸入するより有利である、日本政府が関係者を送るならば受け入れる、と答えた。

川崎氏は帰国して中曽根通産相に主席の意向を伝えた。中曽根氏は「通産省の関係者を出すよう検討する」と言った。しかし、同年8月8日、^{キム デ ジュン}金大中の拉致事件が起きて、北南間の緊張が高まり、情勢は一変した。こうして日朝貿易見本市のための予算2400万円が日本政府によって計上されていたが、未執行に終わった。

午前の会談が終わった時、金日成主席は、今日はあなたの誕生日だ、誕生祝いをしましょう、と言った。

川崎氏はわが耳を疑った。

待ちこがれていた会見が実現し、主席の意見を聞くことができ、すっかり満足し、自分の誕生日のことなど念頭にもなかったのである。

テーブルに着いた氏は、主席が勧める巻き寿司を口に入れたが、感激で喉がつまり、しばらくは飲み込めなかった。

氏は食事中、「国務が忙しい主席がどうしていつも地方を見て回っておられるのですか」と尋ねた。

主席は、自分は1カ月の半分以上は地方を見て歩いている、現地で話をしてみると、どこに問題があり、人民たちの間にどんな要求、どんな不満があるかがよく分かる、それで、これまで国内

政策については失敗がなかったようだ、謙虚に答えた。

氏は幸せであった。

誕生日に主席に会えたこと、思わぬ誕生祝いをしてもらったこと、また、それ以上にうれしかったことは、自分の誕生日に金日成主席の名言をじかに聞くことができたことであった。

人民を信じ、人民の中に入って、人民の要求と不満をすべて聞くとする主席の名言は、世界のどの国の大統領からも聞けなかった貴重な言葉であった。

まさにその言葉は、政治家川崎寛治氏へのすこぶる貴重な誕生祝賀文であった。

帰国後、氏は中曽根通産相に、主席の現地指導についての話をした。

中曽根氏は「現地指導、実にいい言葉だね」と何度も口ずさみ、手帳に「現地指導」と書き留めたという。

54. いつまでも忘れることなく

1973年5月のある日、訪日中の朝鮮記者同盟代表団が、日朝文化交流協会理事長高木健夫氏の自宅を訪問した。

高木健夫氏は1972年9月5日、日朝文化交流協会の結成を主導し、初代理事長を務めていた。

1971年12月10日から翌年2月まで『読売新聞』論説委員会顧問を務め、1972年9月、『週刊読売』に朴正熙パクチョンヒ「政府」を傀儡政権だと指弾し、南朝鮮のベトナム派兵を糾弾する記事を載せ、彼らの抗議を受けた。氏は、抗議を一切無視したが、読売新聞社は屈服して謝罪した。憤慨した氏は、決然と社を飛び出し、家庭に引きこもっていた。

そんな時に朝鮮記者同盟代表団の訪問を受けたのであった。

高木氏は遠方の肉親に久方ぶりに再会したかのような喜びにひたった。

彼ら一人ひとりの手を取り、涙を流す氏の前に、金日成主席からの贈り物が置かれた。

主席は、総聯の人士や日本の人士の訪問を受けた際はきまって氏の安否を問い、身体が弱く食事もあまり取らない氏のことを気づかっていた。そして、記者同盟代表団の訪日に際しては、代表団一行に必ず氏に会って挨拶を伝えてほしいと言った。

高木健夫氏は、あまりの温情にこみ上げる激情を抑えることができなかった。

一度友人として親交を結んだ人物に対しては、どこの誰であれ、遠くに離れて暮らしていようとも、決して忘れずに思いをはせる金日成主席。

氏は涙ながらに語った。

「お帰りになれば尊敬する金日成主席に、万年長寿を願うこの年寄りの挨拶をきっとお伝え下さい。そして高木はいつも金日成主席だけを信じ、慕う決心を守るであろうと心に誓っていることについてもお話して下さい」

氏は、チュチェ思想を宣伝普及し、日朝両国人民の親善を深めるための活動を以前にもまして積極的に進め、着実に成果を拡大していった。

けれども氏は成果に満足することがなかった。

55. ごり押しも反対、哀願も反対

1973年の朝日関係はきわめて先鋭化していた。

日本反動層の使喚を受けた日本人不良学生たちが在日朝鮮学生に集団暴行を加える事件が頻発し、朝鮮人民と総聯同胞の憤りは極度に達していた。

1973年6月12日、国士舘大学の学生と同大学付属高校の生徒20余名が、東京の高田馬場駅で教員と一緒に下校する東京朝鮮中高級学校の生徒を襲って集団暴行を加え、7名に重傷を負わせた。これに先立つ11日にも、国士舘大学の学生と付属高校の生徒数十名が、新宿駅構内で各種の凶器をもって数名の在日朝鮮学生に重傷を負わせた。

これらの集団暴行は、60万在日朝鮮公民に対する挑戦であり、国際法と人権に対する蹂躪行為であった。

朝鮮民主主義人民共和国政府と朝鮮人民は、在日朝鮮学生に対する日本反動層の犯行を、こみ上げる怒りをもって糾弾した。

これらの暴行事件は偶発的な事件ではなく、日本反動層の不純な政治的意図による組織的かつ計画的な策動の一環であった。

日本当局の公表によっても、在日朝鮮学生に対する暴行は、1971年と72年の2年間に268件発生し、73年の上半期にも56件が発生している。

このような暴行事件は、日本政府が在日朝鮮公民の民主主義的民族権利を弾圧、抹殺する目的で、ファシヨ的悪法「出入国管

理法案」の改悪をはかり、改定案の国会通過を企んでいた時期に頻発していたのである。

日本政府の新「出入国管理法案」の反動的性格は、1971年3月22日に発表された朝鮮民主主義人民共和国外務省声明によって暴露されているが、声明は次のように指摘している。

「最近、日本軍国主義者は、朝鮮民主主義人民共和国敵視政策を一段と露骨化し、在日朝鮮公民に対するファッショ的暴圧の強化策動に狂奔している。

日本政府は、朝日両国人民と全世界の社会世論の強い反対によって、既に2度にわたって『廃案』となった『出入国管理法案』をさらに横暴かつ狡猾なものにつくりなおし、去る16日の『閣議』で、これを国会に再び上程することを『決定』した。

その凶悪な本質が白日のもとにさらけ出されたように、佐藤一味が作成した『出入国管理法案』は、日本居住外国人の90パーセントを占める在日朝鮮公民の基本的人権と居住権をはじめ、すべての民主的民族権利を乱暴に踏みにじり、彼らの正当な社会活動を『政治活動』という口実のもとに苛酷に弾圧し、ひいては総聯組織を破壊し、多くの在日朝鮮公民を朴正熙パクチョンヒ傀儡一味に売り渡そうとするファッショ的文書である。

とりわけこの『法案』は『永住権』の取得者に対しては『政治活動禁止事項の適用を除外』するとして、在日朝鮮公民を政治的に選別し、彼らの中に分裂と反目を引き起こす一方、在日朝鮮公民に対し弾圧と恐喝の方法をもってたえず『永住権申請』と傀儡『韓国国籍』を強要しようとはかる陰険な目的を追求している。

さらにこの『法案』は、社会主義国特に朝鮮民主主義人民共和国と中華人民共和国、ベトナム民主共和国など日本と国交がないアジアの社会主義諸国からの日本入国を極力抑制し、これらの国の人民と日本人民との親善友好関係発展の阻止をもくろむものである。

日本軍国主義者のこの悪辣な策動は、アメリカ帝国主義者の使喚のもと日本の軍国化、再武装化を促し、朴正熙傀儡一味と共謀結託して南朝鮮再侵略の道を開き、朝鮮人民とアジア人民に反対する侵略戦争の準備を促そうとする犯罪的奸計を露呈している。

朝鮮民主主義人民共和国政府と全朝鮮人民は、ファッショ的な『出入国管理法案』を成立させることによって、在日朝鮮公民の諸般の民主主義的民族権利を全面的に蹂躪抹殺しようと企む、日本軍国主義者の極悪な犯罪的策動をこみ上げる憤怒をもって断固糾弾し、それを朝日両国人民と正義を愛する全世界の人民に対する横暴な挑戦として厳しく断罪する。

歴史的経験は、帝国主義者は戦争政策を強化する一方、国の一般的生活をファッショ化することで愛国勢力と進歩的勢力への攻撃を強化し、彼らに対する弾圧と迫害をいつそう悪辣に強行する方向へ進もうとしていることを如実に物語っている。……」

日本人不良学生らは集団暴行を加えるたびに、「朝鮮人を殺せ」「朝鮮人は出て行け」などと民族排外的言辭を弄していた。

日本警察当局は、在日朝鮮学生たちに対する暴行が白昼公然と行われているにもかかわらず、日本人不良学生は取り締まらず、むしろ被害者を加害者として扱った。

甚だしいことには、日本警察は東京の八王子駅で起きた日本の高校生による集団暴行事件にみられるように、被害者である朝鮮中高級学校高級部の生徒15名を不法に逮捕し、見境なく殴る蹴るなどの暴行を加えた。

これらすべての事実は、在日朝鮮人に対する暴行事件が日本警察当局の庇護のもとに行われており、在日朝鮮公民に対する日本当局の民族差別政策と朝鮮民主主義人民共和国敵視政策から発していることを明白に示していた。

在日朝鮮学生に対する集団暴行は、その危険性からしても、日朝両国友好関係の発展を切実に願っている日本人民の志向からしても、決して見逃せない問題として、全朝鮮人民の憤激を呼び起こしていた。

在日朝鮮学生に対する暴力行為は、朝鮮人民のみならず広範な日本人民からも強い抗議と糾弾を受けていた。

日本当局は在日朝鮮公民と青年学生に対する一切の弾圧策動を直ちに中止すべきであり、今回の暴行事件に関係した犯罪者を厳罰に処し、二度とそのような事件が発生しないよう即時相応の処置を取るべきだという声が日増しに高まっていた。

さらに、日本当局は朝鮮民主主義人民共和国敵視政策を中止すべきであり、在日朝鮮公民の民主主義的民族権利を全面的に保障し、「出入国管理法案」を即時撤回すべきだという要求も高まっていた。

このような時期の1973年6月30日、金日成主席は訪朝中の時事通信社代表団に接見した。

これには、時事通信社社長をはじめ代表団一行が参加した。

彼らの朝鮮訪問を熱烈に歓迎すると挨拶した主席は、最近日本の言論界の少なからぬ人たちがわが国を訪問しているが、これはよいことだと評価した。そして、みなさんはわが国を訪問して現実をじかに見、多くのことを感じたということだが、産業革命を行って100年以上になる日本に比べれば、わが国はスタートしたばかりだと言える、みなさんはこのことを理解したうえでわが国を見学するのがよいだろうと付言した。

そのあと主席は、朝日関係についてこう語った。

……………

朝日両国間に善隣友好関係が成立するか否かは、日本政府の態度如何にかかっている。

朝日関係を改善するうえで障害があるとすれば、それは日本政府の軟弱さだと言えるだろう。わたしは他国の政府を批判する気持ちはないが、今日、日本政府についての話が出た機会を借りて一言言うならば、日本政府は時代の流れに後れており、軟弱さを内包している。日本政府が軟弱さを内包しているということは、とりもなおさず自主性を守れないということである。日本政府が「日米安全保障条約」や「韓日条約」のようなものを引き続き堅持しようとしているのを見ると、自主性が欠如している。時代の流れにそって進むには、自主性がなければならない。

現在日本政府は、われわれと善隣関係を結ぶ時機が到来していないと言っている。わたしが見た資料によれば、日本外相は国会における質問に答えて、日朝両国間の関係改善は、まだ時機が熟していないと答弁した。

われわれはごり押しに日本政府と関係を改善しようとは考えて

おらず、哀願外交もしない。

朝日両国間に国交関係が樹立されていないからといって、それが朝鮮人民と日本人民の間の親善関係を発展させるうえで大きな障害にはならないだろう。

.....

朝日両国の関係発展でごり押しもしないし、哀願もしないと言明した主席の言葉は、民族的自尊心を何よりも重視する愛国心の発露であった。

記者たちは肅然とした思いで、主席の言葉を噛みしめていた。

56. 実の兄弟に会った心情

1973年当時、日本では総聯に対する捜索騒ぎや日本人不良学生の朝鮮人学生暴行事件が拡大の一途をたどったことに見られるように、総聯と在日朝鮮公民に対する日本反動勢力の弾圧が激化していた。

これは、日本当局が朝鮮民主主義人民共和国の海外同胞組織である総聯の日ましに高まる権威を失墜させ、在日朝鮮公民に対する民族差別政策を一段と強化して、日朝両国人民の友好関係に水を差そうとする政治的目的の現れであった。

日本当局が総聯と在日朝鮮公民および学生に対する弾圧を直ちに中止し、事件に関与した犯罪者を厳重に処罰する一方、再びこのような行為が起らないよう即時必要な措置を講じるのは朝鮮人民と総聯をはじめとする在日朝鮮人の要求であり、同時に、広範な日本人民の要求でもあった。また、日本当局が「出入国管理法案」の改悪意図を直ちに撤回し、在日朝鮮公民のあらゆる民主主義的民族権利を無条件全面的に保障し、朝鮮敵視政策を中止すべきであるということは世界の進歩的人民の一致した要求であった。朝鮮民主主義人民共和国外務省は声明を発表し、佐藤反動政府がわが共和国に対する敵視政策と在日朝鮮公民への弾圧策動を中止し、ファッショ的な「出入国管理法案」改悪策動をただちに中止することを強く求めた。

そうした頃の1973年8月25日、金日成主席は現地指導先で訪朝

中の黒田了一大阪府知事一行に接見し、平壤から地方まで車を走らせてきた一行の労苦をねぎらってこう語った。

「平壤でお会いできたならよかったです、今現地指導中でこちらへおいで願いました。わたしは、わが国を訪問され、りっぱな贈り物まで下さったことに感謝いたします。

わたしは、知事先生が在日朝鮮同胞の民主主義的民族権利を擁護し、わが共和国を極力支持しているという総聯中央常任委員会ハンドクス韓徳銖議長からの通報を受けました。知事先生は万寿台芸術団のマンスデ日本公演にも深い関心をいだかれて協力を惜しんでいないのですが、わたしはそのことについて心から感謝しています。

今日、初めて知事先生にお会いしましたが、長年離れて暮らしていた実の兄弟に会ったような心情です。今日こうしてお会いできたことをたいへんうれしく思います」

実の兄弟に会った心情だという主席の言葉に、知事は胸を熱くした。日朝関係が険悪化している時、一言の苦情も口にせず、実の兄弟に会ったような心情だと言われるなど想像すらできないことだった。

知事は朝鮮を訪問する前、日本における不穏な事態を憂慮せずにはいられなかった。

日本警察当局は出入国管理局と組んで総聯福井県本部所属の活動家と在日朝鮮公民の動向をひそかにさぐり、不当な口実を設けて県本部会館と朝鮮公民の家宅を搜索するなどの事件を起こしていた。在日朝鮮人学生に対する日本人不良学生の暴行事件も相次いでいた。

国士舘大学の学生と同大学付属高校の生徒らの度重なる集団暴

行事件、東京都豊島区東池袋の路上で数十人の拓殖大学の学生が数人の朝鮮学校中高級生を取りかこみ、めった打ちにして重傷を負わせた事件などで在日朝鮮人の憤激は高揚していた。

主席に会ったらなんとお詫びしようかと知事は心が重かった。ところが、主席はそんなことには一切ふれず、微笑をたたえて話を続けた。

「あなたの今回の朝鮮訪問は、朝日両国人民の友好関係を強化し、個人的にはわたしたち2人の親交を温める契機になりました。わたしは、あなたがたの朝鮮訪問に改めて謝意を表します」

知事は、日本人の自分を国賓として歓待してくれている朝鮮人民の好意に感謝の意を表した。

主席は、分に過ぎるお褒めにあずかり、かえって恐縮ですとして、こう語った。

「わが国はまだ、客を満足に遇するに足る条件が整っていません。それであなたがたにいろいろと不便をおかけしたと思います。わが国は今、国づくりのさなかにありますので、その点ご了承願います。

知事先生がいまお話になったように、われわれがお互いの関心事について忌憚なく意見を交換することは、とても有益なことだと思います。わたしは、知事先生のご意見に全的な支持を表明します。

朝鮮人民のたたかいと日本人民のたたかいは互いに結びついており、したがって両国人民の友好団結を強化することは何よりも重要です。朝日両国人民の友好団結を強化することは、極東の平和と安全のためばかりでなく、世界の平和と安全のためにも必要

です。そういう意味で、両国代表団の往来を通じて理解を深め、互いに学び、支持し、助け合うことはたいへんよいことだと思います。

わたしは、あなたがたが朝日両国人民の友好団結の強化をはかって、これまでと同様、今後とも極力努力されることを望んでいます。かつて、わが国に対する日本帝国主義の植民地支配と敵視政策について言うならば、それは日本帝国主義者と日本軍国主義者の行為であって、日本人民とはなんら関係がありません。ですから、朝日両国間の好ましくない過去の問題が両国人民の友好団結の強化に障害となり、あるいは影を落とす根拠にはなりません。日本反動層の策動は朝日両国人民の友好団結の強化の支障にはなっても、それを阻むことはできないでしょう」

主席は、ちょっと間をおいて、こう続けた。

「新しいものの出現は、必ず古いものとのたたかいを伴います。こうしたたたかいの過程がなければ、革新という言葉はありえません。

新しい進歩的運動が起きる時には、当然、それを阻害する反動勢力の策動にぶつかるものです。封建社会から資本主義社会に移るブルジョア革命が起こった際にも反動的な封建勢力はブルジョア革命を阻害し、資本主義から社会主義に移る革命が行われた際にも反動勢力は革命運動に抵抗しました。

日本は、資本主義諸国の中では革新勢力が強力な国の一つだと言えます。資本主義社会における進歩的革新勢力の運動が反動勢力の妨害に遭遇するのは必然的です。

しかし、革新勢力は成長し、退廃した反動勢力は必ず滅亡しま

す。これは、一つの社会発展法則です。

あなたは社会主義建設をめざす朝鮮人民のたたかいに励まされたとのことですが、われわれも同様に、日本人民とあなたがたのような革新勢力がわが共和国を支援して下さっていることに大きく励まされています。朝日両国人民は、相互に励まし支援する共同のたたかいを通して連帯をさらに強めていくでしょう」

黒田了一知事の感動は大きかった。主席ともっともっと話したかった。

知事は、大阪に帰れば朝鮮で見聞したすべてのことを大阪の各階層人士に広く伝え、大阪に住む朝鮮公民にも朝鮮の発展相を十分に知らせたいと思うと語った。

57. 日本の友人

1973年9月19日、岩波書店常務取締役・総編集長緑川亨氏は金日成主席の接見を受けた。

金日成主席は緑川亨氏と挨拶を交わした後、こう語った。

「私は、緑川亨先生がわが国を訪問し、われわれとともに、朝鮮民主主義人民共和国創建25周年を迎えたことを、たいへんうれしく思います。

あなたのわが国訪問は、朝鮮人民に対するあつい愛情と信頼のあらわれであります。私は、いま一人あなたのような日本の友人と知りあいになれたことをうれしく思うとともに、あなたのわが国訪問に感謝の意を表します」

日本の友人！

緑川亨氏は、その言葉を噛みしめた。

なんと熱い愛情のこもったお言葉であろうか。今なお続く日本政府の朝鮮敵視政策を思うと、日本人の誰があえて主席の友人と名乗れようか。

ところが主席は、こだわりなく自分を日本の友人と呼び、日本の親友を得たことをうれしく思うと言うのである。主席の表情には素朴な喜びの色が見えた。

氏は恐縮し、何と答えてよいか分からず戸惑った。

そんな氏に向かって主席は、岩波書店が友好的かつ兄弟的な立場に立って、朝鮮民主主義人民共和国の成果を広く紹介し、われ

われに共感して、わが国のためすぐれた業績を積んでいることを有り難く思っている、お帰りになったら、岩波書店の社長をはじめ書店のみなさんに私の挨拶を伝えてほしいと言い、次のように述べた。

「先ごろ岩波書店で出している雑誌『世界』が『韓国の現状』という論文を載せましたが、私はそれを全部読みました。それはたいへん興味ある論文でした。それにはわれわれに参考となる資料がたくさんあります。われわれにも南朝鮮について多くの資料がありますが、あなたがたが暴露した南朝鮮当局者の腐敗相は、われわれに民族的な怒りを呼び起こします。

あなたがたが筆鋒するどく南朝鮮当局者の罪状と腐敗相を暴露し、批判するのは正しいことです。あなたがたはそれを暴露批判することによって、日本人民と南朝鮮人民、そして全世界人民の自覚を高めるのに助けとなっており、朝日両国人民の友好の強化に大いに寄与しています。あなたがたはまた、このような活動を通して進歩的思想を世界に広く紹介する上で重要な役割を果たしています。

われわれは『世界』編集局のみなさんと岩波書店のみなさんが世界の進歩のために大きな努力を払っていることをよく知っています」

そのあと主席は、緑川亨氏の質問にこう答えた。

「あなたは朝鮮民主主義人民共和国創建25周年を迎えた私の感想についてたずねましたが、われわれはちょうどこのたびの党中央委員会総会で、共和国が創建されてこの25年間、思想革命、技術革命、文化革命でおさめた成果を総括しました。ですから、そ

の内容を話せば、あなたの質問に満足な回答を与えることになると思います。党中央委員会総会で一週間あまり総括した内容を短い時間に全部話すのはむずかしいことなので、重要な問題だけかいつまんで話そうと思います。

.....

次にわが国と日本との関係についてお話ししましょう。

われわれがすでに何度も話したように、わが国と日本との国交正常化問題は、もっぱら日本政府の態度いかんにかかっています。

われわれは今、わが国と日本との国交正常化問題についてそれほど神経を使っていません。国交が正常化されるからといって、わが国と日本との関係がすべて解決されるわけではありません。平壤に日本大使館が設置され、東京にわが国の大使館が設置されるからといって、わが国と日本との関係がすべて解決されるとは言えません。

わが国と日本との関係を改善するうえで重要なのは、両国が互いに理解を深めることであり、とくに日本政府がわが国に対する敵視政策を中止することです。まだわが国と日本の間には十分な理解がありません。われわれはまず両国が互いに理解をさらに深めることが必要だと思います。

あなたは、わが国の万寿台芸術団の日本訪問が両国の理解を深めるうえで大きく寄与したと述べましたが、そうした評価に対し、ありがたく思います。

わが国万寿台芸術団の日本訪問中に、日本の政党と大衆団体、各階層の人士たち、そして広範な人民が朝鮮人民に対する積極的な支持を表明しました。彼らは、わが国の芸術家たちを友人とし

て、親友として歓待し、祖国の統一をめざす朝鮮人民のたたかいを積極的に支持してくれました。これは、われわれ両国人民間の関係が非常によいことを物語っています。わが国には、隣人はいどこにまさるといことわざがありますが、日本にもそのようなことわざがあるかもしれません。

われわれは、わが国と日本が、社会体制は異なっても、隣国としてよい関係をもち、両国人民間の友好と団結をいっそう強めることができると思います。今後、日本政府の反対がなければ、われわれは万寿台芸術団の日本訪問のような往来をもっと多くしようと思います。そうなれば、朝日両国人民の友好関係はいっそう発展するでしょう」

主席の言葉に聞き入っていた緑川亨氏の目の前には、日本を訪問した万寿台芸術団に寄せられた嵐のような歓呼が蘇った。

万寿台芸術団と日本人民の間の熱い交流には、思想と体制の差異、過去の好ましくない歴史的関係を乗り越える親善の情、平和の情がみなぎっていた。

このような想像を絶する現実を生んだのは、金日成主席の熱いヒューマニズムだったのである。

緑川亨氏は1923年、東京に生まれ、50年立教大学文学部卒業後岩波書店に入社して雑誌『世界』の編集に当たり、編集長吉野源三郎氏から進歩的な影響を受け、やがて『世界』編集長、編集部長を経て、70年岩波書店取締役、78～90年3代目社長を務め、その間岩波文化の伝統を守り、出版の活性化をはかった。

58. 金日成主席の現地指導

緑川亨氏が金日成主席の接見を受けたのは、たまたま主席の現地指導先であった。

その日の主席の現地指導に同行した氏は、後日、主席の現地指導の模様を振り返ってこう書いている。

「金日成主席との会見は、9月19日（1973年）に行われた。19日の朝、主席は、その近辺の協同農場に新築された住宅の『現地指導』に立ち寄られ、その村まで、私は招かれて、出むいた。

赤煉瓦造りの2階建ての棟が立ち並んでいた。住居もあれば、託児所、幼稚園もある。前庭に、郡や里（村）の人々に立ちまじって、金日成主席が私を待っていて下さった。主席とお目にかかるのは、共和国創建記念の行事以来、これで3回目である。

その日までに私が訪れた各地の農場、学校、託児所、休養所等ほとんど至るところで、金日成主席の『現地指導』は話題に上った。その『現地指導』に立ち合うことができるのは、なかなか得がたい機会だと、後になって人々から言われた。

金日成主席は、『この村人たちは、日本からのお客様が私といっしょに見に来てくれたことを喜んでいる』とまず言われた。

主席の『現地指導』には儀礼的な要素は全くない。ただ形式的に現場に臨む『お手植えの松』といった要素も全くない。一国の元首が視察するといえば、人々は礼服をつけ、予行演習の一つも

するのが、一般のならわしであろう。この国の人々がくりかえして語る『現地指導』は、その単語だけ聞けば、一つのセレモニーであったり、ドラマ的演出が伴うものと想像されがちだが、しかし、その場に立ち合ってみると、そうした想像を裏切られる。

主席は村人たちと握手を交わし、いきなり次々と質問を発し、答えを聞き、現場を見てまわる。納得がゆくと、破顔大笑して、その労をねぎらう。村人たちも、怖れず臆せず、何かと説明し、主張する。主席がすすめるまえに、村人たちはさまざまな希望を陳述する。よし、それは一年以内に実現しよう、と主席は答える。この秋の収穫高の予想について、建設について、こどもたちを運ぶ自動車のステップの高さについて、話は具体性をもち、時として技術的、専門的な領域にわたり、指示が発せられる。その会話は人間的交流に終始し、上から一方通行的な指導という印象を与えない。

抗日パルチザン闘争以来、人民に依拠し、人民に呼びかけて民族解放と革命の闘いに参加させることは、金日成将軍にとって基本的戦術であった。社会主義建設の過程でもまた、金日成主席は、『現地指導』という形をとって、人民と直接の交流を深める。その結果、『現地指導』は、他に例をみないものとなり、この国の人々は、それをもっとも大切なこととして、われわれに語るのであろう。

主席が与える注意は、たとえばこんな具合であった。『住居に使った木材の量は？』『一戸当り0.3立方メートルです』『それは少ない。大変良いことだ。木材は節約しなければ』。この地方は海に近く山は遠い。その条件に合わせて建築資材を考える必要が

ある。

室内に家具・調度の類が置かれている。『これでは部屋が狭く
なってしまう。こうした家具は部屋の外に置くようにするか、壁
にはめこむ設計にかえて、部屋を広く使う工夫をしなさい』。こ
の点は2階からおりてきて、くりかえし注意を与えた。

一戸当り1階に2室、2階に1室、それに台所と浴室がついて
いる。浴室のドアを開閉してみても、扉の板と板の間にすき間があ
るのに気づくと『木材を乾燥させないで使うから、こんなすき間
ができるのだ』と、警告が飛ぶ。

2階に上ると、そこでは、主席と通訳と私と、3人だけになっ
た。前の窓から野を渡って爽やかな風が入り、うしろの窓から抜
けてゆく。『これで良いのだ。夫婦と子ども2人か3人、夫婦が
下の部屋にねて、子どもたちは2階にねる。いや、よかったらそ
の逆でもいい』『都会と農村の差をちぢめる。農村の方が住むの
に良くらいだ。空気は良いし、とりたての野菜や果実はうまい』

託児所と幼稚園には、それぞれ年齢相応の寸法に合わせた小さ
な椅子や机、ベッドが整えてある。板と板の間の極度に狭いすの
こが床に敷いてある。この国では、何処へ行っても、子どもは大
事にされる。主席は仔細に見てまわる。幼稚園の片隅に、おむつ
をかえる台があるのをみて、『ここでも要るのかね』とおかしそ
うに質問する。

住宅地の中央は広場になっていて、プールがつくられ、バレー・
ボールや卓球台が設けられ、さながら総合競技場のヒナ形の観が
ある。学校が終ると子どもたちは皆ここに集まって他処に行かない。
村人が報告する。この広場を見廻して、『よし、よし、これ

は良くできた』とうなずいて、この『現地指導』は終わった。

私は主席の自動車に招じられ、その傍に同乗して会見の場所に向かった。『見本になる家づくりが必要だね。皆がそれをみながら、良いものをつくるようになる』とぼつりと言われた。

小は村の住宅や託児所から、大は巨大な工場や総合大学にいたるまで、まず『現地指導』によって、その時点で可能であり必要を十分に満たす理想的なモデルをつくり、これを見本として周辺に拡げてゆく。学校や重工業の場合には、もちろん地域的な条件は少なく、適用範囲は全国的規模になる。1は10になり、10は100に至る。こう考えてみると、かなり意図的に地域は選ばれ、対象も総合的判断にもとづいて選択されているのではないか。そして、ある時は遅れた地域に、ある時には進んだ地域に、またある時には平行して『現地指導』が行われ（その頻度が多ければ必然的に全国各地に及ぶ）、反復され、社会主義社会の建設の拠点としての機能をはたす。ここに『現地指導』の基本的ポリシーがあるのではないか。もとより、これは私の想像にすぎない。こうした方法論めいたことについて、誰にも説明を求めたわけではない。しかし、もしこの推測が幾分かでも当を得ているならば、現在行われているこのきわめて個性的な『現地指導』は、抗日パルチザン闘争以来の人民に拠り、拠点を設け、それを拡大していった拠点闘争の戦術と直結するものといえる。

農村のどこへ行ってみても、耕作地を避けて山や丘の麓といったところに瓦屋根の集落が見える。今見てきたような赤煉瓦造りの農家も次第にふえはじめている。電化は山村にいたるまで全国的に完了し、農村の水道化が進行している。

車内の会話は多岐にわたった。農・工業について話が続いた。化学肥料の生産と、それを使用する際のチツソ、カリ、リン等の量的配分の話、立ち遅れた国家が発展しようとするためにはまず工業化に重点をおき、そのために農村に負担をかける時期がある……等々、主席の談話は化学肥料についてきわめて専門的な内容にわたり、一般的にその説明は合理的思考にもとづいていた」

59. 朝鮮の統一に支援を

緑川亨氏は金日成主席の現地指導に同行したあと、主席と談話した。以下はその時の感想である。

「……私がこの共和国に到着した際に提出しておいた質問状について、金日成主席は、2時間半にわたって、回答をして下さった。

金日成主席は、終始、熱意をこめて、しかし、悠揚迫らず、語り続けて下さったが、話が『二つの朝鮮』の問題に立ち至ったとき、おのずから語調は強まり、その眼光は厳しさを増した。

この国を訪れると、ほとんどすべての人々が、その肉親なり、血縁なりと南北にわかれて住み、互いに逢うことはおろか、消息さえも知ることができないでいることを、あらためて認識する。この事実を、われわれ、日本の国民は知らないのではないか。南北統一は、南と北に分かれて住む朝鮮の人々の切実な要求であり、また、日本国内に居住する60万に及ぶ朝鮮の人々にとっても、痛切な問題である。しかも、われわれと生活を共にしているそれら
在日朝鮮人は、朝鮮の南半部に行くことはできても、北半部を往復することは、政府が例外的に認めている恣意的な措置を除いては、全くできない。

創建25周年慶祝の行事で、在日朝鮮人よりなる『在日同胞祖国訪問団』を、人々は盛大な拍手をもって迎え、金日成主席も、他

の幹部たちも、長年にわたる彼らの労苦を温かくいたわり、ねぎらっていた。私は、その場にいる数少ない日本国民の一人として、証人としての自覚をもって、再三にわたるその光景をみつめていた。

質問状への回答が終り、引続いて催された午餐会の席上でも、金日成主席との会話は続いた。すでに6時間をこえる時間が過ぎていた。その間のすべての会話を通じて、きわめて強く印象に残ったのは、主席の発言が、南北を問わず、国内、国外を問わず、全朝鮮の民族的視点をもって終始していたことである。南朝鮮に住む人々、共産主義者でなくても統一を自らの問題として努力している人々への想いが、主席の心の奥に秘められていることを、私は会食の席上、突如として、さとった。

金剛山クムガンに行けば、この国の人々は、南朝鮮に住む人々にもこの美しいみごとな山に遊びに来てもらいたい、と言う。それは、体制をこえて、朝鮮の人民に共通した願いなのである。

主席とお別れする時、日本と共和国との交流について、短い会話が交わされた。ようやく活発になりはじめている文化交流や人の交流が、今日まで共和国の側の一方的努力のみに拠ってきたこと、この交流を一日も早く、双務的なものにするには、私たち日本国民の努力にかかっていることを私が口にするマンステと、『万寿台芸術団が日本の方々にはずいぶんお世話になったではないか』という答えが返ってきた。

戦後、日本外交はいくたびか、選択を誤ってきた。冷戦下1951年に締結された講和条約と日米安保条約、その直後に台湾政府との間に結ばれた日華条約、1960年の安保条約改定、そして1965年

の日韓条約の締結。

日中国交回復は行われた。だが、1910年以来今日にいたる63年間の朝鮮民族への償いは、未だ何ひとつ行われていない。むしろ、日本外交は、日韓条約締結によって、朝鮮の北半部との交渉の道を閉ざした。この秋、政府は、重ねて、国連において誤った選択を行っている。

戦後28年間、われわれ多くの国民は、日本統治時代のこの民族の歴史を改めて知ることなく、南北両朝鮮のそれぞれの現実についてもほとんど知ることなく、今日まで過ごしてきているように思われる。しかも、歴代政府がとってきた朝鮮についての誤った選択は、第2次大戦が終了した時点で生じた南北分断の固定化に力をかし、この民族の怨嗟のまよになってきた。朝鮮民族の歴史が長年にわたって単一民族として綴られてきたことについて、世界の中で、日本人はもっともよくそれを知っているはずではなかったのか。

日本が、国の政策として、朝鮮に関する基本的姿勢を改めないかぎり、日本外交にとって、『戦後』は終わらないであろう。従って、1910年来今日にいたる間、その近・現代史を通じて日本が犯し続けてきた大きな誤りを、日本の国民は、みずから正すことができないであろう。

3週間の見聞は、一知半解たることを免れない。しかも、社会主義建設が日を追って進んでいる国である」

60. もっとも謙虚な人間

1973年9月30日、未来社編集局長松本昌次氏は金日成主席の接見を受けた。

氏は著書『朝鮮の旅』（すずさわ書店 1975年）に金日成主席との接見記を掲載した。

「帰国も目前に迫った1973年9月30日、わたしたち（写真家矢田金一郎氏と）は、思いがけなくも金日成主席から招かれた。わたしは、ふたたび朝鮮を訪れるにあたって、主席にじかに会えるとは思わなかった。わたしは一個のジャーナリストではあるが、新聞記者や雑誌記者のように、何かを報道する義務は持っていなかった。また、何かの政治団体の代表として訪問しているわけでもなかった。いわばフリーの立場にあった。従って再訪にあたってわたしが希望したのは、できるだけ多くの朝鮮人民と話しあいたいということであった。たとえば自分の固定した観念でひとの国と自分の国の優劣をさがしまわったり、政治体制がどうなっているかと首をつつこんでみたりすることは、避けるように努めた。むしろその任でもなかった。朝鮮人民がかつての苦難の道のをどう歩んできたか、そうして現在はどう生きているかを、日常的な観点からわたしの知覚のすべてで感じとりたいと願ったのである。

その日以前、わたしたちは、金日成主席と握手し、ふたことみこと、言葉をかわす機会があった。9月8日、平壤体育館でおこ

なわれた朝鮮民主主義人民共和国創建25周年慶祝中央記念報告会の会場であった。また創建記念日当日の9月9日、南浦市^{ナンポ}で行われたマスゲーム見学のあと、万寿台^{マンスデ}議事堂で開かれた慶祝宴の席上であった。

主席は、各国からきている公式の代表団とはちがい、まったくフリーの客であるたった2人のわたしたちの掌を固くにぎり、健康を気づかう言葉をかけてくれた。慶祝宴の席上、主席のはじめての演説を聞いた。いや、それは演説というより、談話といったほうがいだろう。段落の冒頭で、必ず『トンジドゥル（同志の皆さん）…』と始まるその談話は、決して獅子吼調ではなく、冷静で、重味のある声でつらぬかれ、ある優しさすらわたしは感じた。一人のフリーの人間にとっては、これで十分であった。それが、突然の招きである……。

その日も、秋晴れの素晴らしい天気であった。関係者の人からそれとなく暗示があり、気の弱いわたしは、ある種の緊張感を覚えざるを得なかった。いったい、そんなえらい人と何を話したらいいのだろうか。そういう機会になれないわたしは戸惑った。午後1時すぎ、招待所を車で出発。『果樹園でも見ましょう』ということで、車はひろびろとした果樹園や田畑をぐるぐると通り抜ける。

主席は、近くの農村に現地指導に行っているとのことだった。やがて、山間の閑静な小じんまりした招待所か休養所に到着。深い樹々に囲まれているためか、すでに暮色が垂れこめはじめている。

車を降りると、すでに主席は庭の中央でわたしたちを待っていた。握手、挨拶、そして記念写真。率直に言って、わたしはカチ

カチになっていた。朝鮮人民の敬愛する指導者と直接会うなどということは、わたしにとって想像もつかないことであった。はじめは、庭で話そうかということのようだったが、秋深い夕暮れ、すでに冷気があたりに漂い、すぐに応接室に入った。

金日成主席との談話は応接室で約1時間20分、食堂で食事しながらの約1時間40分、計3時間であった。

わたしたちの緊張が、主席の談話がはじまった途端、あっという間にときほぐされてしまったことはいまでもない。実に気楽に笑い、身ぶりをまじえた率直でユーモアに満ちた談話は、たちまちのうちにわたしたちをまきこみ、ゆったりさせてくれた。煙草をすすめ、マッチをつけてくれ、食事の時には調味料に何をつけたらいいかにまで気をくばる主席の暖かい態度には、いわゆる『政治家』というものにある種の偏見を抱いていたわたしを驚かせた。

朝鮮人民が主席をアボジ（慈父）と呼ぶ気持もわかるような気がした。その3時間は、楽しい、あっという間の3時間であった。通訳の人のもの見事な同時通訳は、直接話しているような感じであった。

——今日は、特別の話題について話しあうわけではありませんから、友人として気楽に話しあいましょう。元山^{ウォンサン}から金剛山^{クムガン}へ行ったそうで、それは大変よかったですと思います。九龍淵^{クリョン}までは歩いて行くのが一番いいんです。金剛山には宿泊所が少ないんですが、まだ十分に宿泊所を作ることができません。これからもっと作りたいと思っています。若い人たちはテントを張ってキャンプしているようですが、若い時はそれも楽しいし健康にもいいでしょう。

昔は、地主や資本家の別荘があり、遊廓などもありました。(笑) わが国の北部には休養所がたくさんあります。この次に来た時は、北部のほうへいらっしゃい。しかし北部は寒さが早くきて、秋にはもう雪が降ることがあります。7月か8月がいいでしょう。わが国の人びとも、夏は涼しいのでたくさん出かけます。

今日も、近くの協同農場に行ってきたのですが、今年の米の収穫は、まあいいほうでしょう。1ヘクタールあたり平均6トン、場所によっては8トン、最もいいところで10トンでしょうか。わが国では、土地のカードを作っています。全国至るところの土地を調査して、その土質の特徴を調べ、カードを作るわけです。農業大学の学生や技師が総動員で2年がかりで完成しました。その土地の成分によって、適合するマグネシウムやカリウム、ホウソウ等を配合するわけです。化学工場を増設してそれらを生産していますが、使用するのは僅かの量です。各農場に農業大学の学生2人ずつを配置しましたが、農民を指導するほかに、彼等は農民から教えられるわけで、お互いに向上します。医者に行けば、一人一人身体の状態を書いたカードがあり、それさえあれば、医者がかかわっても、一目でその人の身体の状態がわかります。それと同じで、土地にもカードを作り、誰が行ってもその土地に適合する肥料がわかり、どういう品種がいいか選べるようにしたわけです。その結果がでてきたのでしょう。稲穂を抜いて調べてみましたが、去年は1本の稲穂のうち12~13粒がカラ粒でしたが、今年はカラ粒が2~3粒でした。

どこの農場でも、去年より増産しています。少ないところでも500キロから800キロぐらいが普通ですが、1トン増産していると

ころもあります。今朝もある農場へ行ってみました。今年6トンの収穫を来年どのくらい増産するのか尋ねたら、2トン増産すると答え、『空を見あげていつているのではなくて、科学的根拠があります』とっていました。(笑) いまわが国の農民は、解放前の中農以上、いやそれ以上の生活をしています。解放前の自作中農は5月の麦の収穫期までいかに食いつなぐかが問題でした。しかしいまの農村は、次の年の米の収穫期まで何の心配もありません。余った米を貯蔵する倉庫を作らねばなりません。それはいいことですからね。先日、農業大学の実習生を集めていろいろと話しあい、意見を出させました。そこでわたしは、昔話を一つしてやりました。このあたりに伝わる昔話ですが、いまの若い者は新しい本ばかり読んで昔の本を読みませんからね。

昔、長い大雨が降りつづき、村は洪水で水びたしになりました。地主は、金庫から金を持ちだして木に登りました。農民は、握りメシを持って木に登りました。お互いに話ができる距離でした。なかなか水がひかず、2人ともお腹がへってきました。そこで地主は、お金を払うから握りメシをくれないかと農民にたのみました。農民は考えました。このさいはお金より食べ物の方が大事だ。農民は首を横にふり、握りメシを食べて水のひくのを待っていました。水は何日もひかず、地主はついに空腹のため、木から落ちて死んでしまいました。この昔話で、米がいかに大事かということをお話したわけです。米が沢山あれば、人の心は安らかです。いま農民は、昔の中農というより、富農の下ぐらいかも知れません。さらに向上させたいと思いますが、いくらなんでも地主ぐらいまでという言葉は使うわけにはいきませんね。(笑) それは遊んで

暮らすということですから、つまり大事なことは、重労働からの解放ということです。

そのためには、トラクターが必要です。現在、100町歩あたり2～3台です。これを平均6台に増やすのが目標です。技師や農業大学の学生に尋ねたら、8台あれば完璧だと答えていました。そうすれば骨の折れる手仕事がなくなるでしょう。稲の自動刈取機も作ってみました。先日も、学生が考案した刈取機を実験してみました。彼は自慢して張り切って動かしてみたんですが、雨のあとで、後輪はいいのですが前輪がうまく動かず役に立ちませんでした。(笑) 雨のあと役に立たないのでは仕方ありません。日本からも試験的にとり寄せてみました。作動はよく、手で刈るよりは速いのですが、手押しなので手が疲れます。イタリアのも調べてみましたが、稲のまん中あたりを刈るのでやはりダメでした。(笑) そのほか、フランスなんかからもとり寄せています。農村が豊かになるのは、風景としても大変気持ちいいものです。農民は、冬の間は学習をしています。解放直後、農業大学は平壤と元山に二つしかありませんでした。解放前はむろん一つもありませんでした。それが現在、各道に一つずつあり、そしてそれぞれの道の実状にあった教育と農業にたいする援助をおこなっています。もう2年もすれば、技師の数もふえ、農業もさらに発展するでしょう。教育には、わが国は沢山の金を使います。予算の大部分が教育費で、余った分を他にまわすわけです。

万寿台芸術団が日本公演から帰ってきて、団長から電話で報告がありましたが、大変な歓迎を受けたとのことでした。わたしは、万寿台芸術団が芸術的にそれほどすぐれているとは思いませんが、

日本での公演の意義は、芸術を見せるというより、日本人民とじかに触れて、朝日両国人民間の友好親善がどんなに深いものであるかを知ることだといいました。過去の日帝支配者と日本人民とを区別しなさいといっても、どうしても怨みが残っている人がいます。だからこの目で見てくれば、日本人民がどんなにわが人民と友好親善をのぞんでいるかがわかるといったわけです。出発の時、団員がみんな泣きだしました。中国とかフランスとかイタリアとか、世界の各地に出発する時に泣いたことのない彼等が、みんな泣きだしました。日本に行くということで泣くんです。なにをそんなに泣くんだ、泣くことはないといいましたが、その気持はわかる気がします。在日同胞と会えるということは、ほかの国に行くのとはちがいますからね。

帰国してから、団長の電話を受けましたが、わたしはまだ会っていません。万寿台芸術団は、中国で1か月の予定が、ひきとめられて2か月も公演し、休むひまもなくすぐに日本に渡って60日・50回公演をしたわけですから、金剛山にでも行ってゆっくり休養してくるようにはいいました。報告はいつだって聞くことができます。団長の電話によれば、日本人民がこんなに歓迎してくれるとは思わなかった、朝日両国人民の友好にとって大きな意義があったということでした。万寿台芸術団の若い人たちが肌でそのことを知ってくれただけでも、わたしはよかったと思っています。

………

この前の非同盟諸国会議でも、80余か国の参加国が満場一致でわが国の加盟を支持しました。誰がどんな悪口をいっても、歴史はちゃんと進むものです。それにしても、南朝鮮当局は何をやっ

ていますか。白昼公然と日本からキム デ ジュン金大中 氏を誘拐するんですからね。彼等のやることと云ったら、まったく驚くほかありません。わが国にとって最も大事なことは、祖国の自主的平和統一ということです。どうして祖国を分断したまま、子孫に残すことができるでしょうか。祖国を統一すること、これはわたしたちに課せられた重大な責任です。――

日常的な対話を省略すると、金日成主席の談話は、ほぼ以上のごとくである。

わたしは、主席の著書『社会主義的教育論』（未来社刊）を制作して持参していた。つまり、原著者にできあがったばかりの本を日本から持ってきていたのである。共和国に着いてすぐ係の人に見本をわたしてあるので、すでにその本を受け取られたかどうかをわたしが尋ねると、主席は、『確かに本は受け取りました。しかし、創建記念日にあたって何かと忙しく、カバーや表紙をちょっと見ただけで、そのままにしています。カムサハムニダ（感謝します）』と答え、話題はあつという間にほかに移って行った。

そこには、自分に関したことについては、まったくといっていいほど触れようとしない謙虚さがうかがわれた。自分のことには一切触れず、わたしたちの健康状態や毎日の生活状態を聞き、果ては日本にいる家族のことや、仕事の仲間のことまで気づかう主席の思いやりには、ただ感心するほかなかった。

考えてみれば、特に何かの使命も持たないわたしたちフリーの人間には、主席に会うこと自体、大変なことであろう。そういえば、最初の旅の時である。共和国を去るにあたって、主席に直接お礼の言葉を伝える機会がなかったので、わたしは係の人に手紙

を託して帰国した。帰国して1か月余りたった時である。一通の長文の電報が届いた。主席からのものであり、そこには手紙を嬉しく読んだこと、また朝日両国人民間の友好をさらに前進させたいこと、そのために出版活動でがんばって欲しいことなどが記されていた。わたしは驚いた。予想もしないことであった。こんな小さなことにまで心をくばる一国の指導者がいようとは、思ってもみないことであった。

朝鮮革命博物館を見学していた時である。ある期間の10年間に、主席は平壤以外の各地を1700か所現地指導したという説明を聞き、わたしは仰天した。2日に一ぺんは、地方のどこかに出ていることになるのだ。わが耳を疑ったほどである。しかし、たえず『対人関係』を党活動の中心に置く主席としては、あり得ることである。そのようにして、主席は、人民の生活のすみずみにまで心をくばりつづけているのである。

またたく間に3時間が過ぎ、金日成主席に送られて建物を出ると、外はすでに夜で、庭にポツポツとあかりがともり、空気は冷やかだった。別れの挨拶をして10メートルほど歩き、ふとふりむくと、主席が、わたしたちに手をふっていた。主席に対して手をふるのは、何となく馴れ馴れしくて失礼な気がしたが、わたしも思いきって手をふった。車は、まっ暗な農村をつらぬく白い一本の道を、平壤に向け、一気に走り出した。空には無数の星が散らばり、わたしは、なんとなく深海の底にゆったり休んでいるような、心暖まる思いにひたっていた。

その日の前夜、わたしたちは、『明るい太陽の下で』という映画を見ていた。一言でいえば、ダム建設の現場の苦闘を描いた映

画である。しかし、そのダム建設には、抗日武装闘争と祖国解放戦争の歴史的経験が流れこんでいる。主人公である建設現場の支配人は、かつて、抗日パルチザンの一人として戦ったことがある。侵入した日本軍によって家は焼かれ、彼の妻は射殺される。燃える家のなかに投げこまれた幼い娘は、辛うじて近くのオモニに助けられる。その娘は成長して設計技師となり、ダム建設に当たっても革新的な意見をだす。のちに支配人が父だということがわかるのだが、彼女は、祖国解放戦争の兵士として、前線で戦ったことがある。深夜、降りつづく大雨で増水し、建設中のダムが崩壊寸前になる。ダムを守るためには、上流の堤防を爆破して川の流れを変えるほかないという主席からの指示が電話で入る。朝鮮人民軍が出動して待機するが、すべての連絡網は絶たれている。まっ暗ななかで、彼女は高台にたち、松明を手にしてかつての祖国解放戦争の時のように、手旗信号で爆破の合図を送る。かくして建設中のダムは救われる。

土のうを積んだ堤防を守るため、スクラムを組んで水圧と闘う人びとの一人一人の姿は、わたしに、この半世紀に及んだ朝鮮人民の革命と建設の苦闘の歴史を思い起こさせた。わたしなどにはとても、想像のつかないことが、この国で起こったのだ。主席と朝鮮人民とのつながりにおいても、わたしの理解を遥かに越えているといえるだろう。

一路、ひた走りに平壤に向かって走る車のなかで、わたしは、『明るい太陽の下で』朝鮮人民が、南北を問わずがっちりとスクラムを組む日のくることを、ただひたすら思いつづけていた」

61. 万寿台芸術団の日本公演決定

世界の人民から「チュチェの芸術」「ダイヤモンドの芸術」との絶賛を博している万寿台芸術団の日本訪問公演が決定したというニュースは、在日同胞はいうまでもなく広範な日本人民の大きな関心を呼んだ。

万寿台芸術団は、一般の外国劇団の公演とは桁違いの、220名からなる音楽舞踊総合公演と革命歌劇をもって40余日間、東京、名古屋、大阪、広島、福岡、京都、神戸の7大都市で公演することになった。

当時、万寿台芸術団は、毎年のように世界の国々を巡回して公演し、「働く人たちの芸術」として絶賛を博していた。

英国では、「朝鮮の芸術は西側世界でしなびている人たちの心臓に真の芸術への志向の炎を燃え上がらせた」という感嘆を呼んだ。振り付け師メドウェイは、「万寿台芸術団の舞踊の何よりも重要な特徴は、踊りのリズムが真実な人間生活の中から生み出され、それがひとしお美しく魅力的なリズムへと高められている点である。舞踊手の手の先から足の爪先まで、目の精気から身のこなしまで、そのどれもがすぐれて繊細な舞踊言語的表現力をもっている」と評した。

イタリアでは、「人類の知的創造物の特出した手本である朝鮮の芸術は、いかなる泥土にも濁らぬ清い泉のような斬新な芸術」だとの絶賛を博し、ローマ総合大学教授ピエンドロスは、「舞踊、

音楽、舞台美術が総合的に完成され、成功したまったく新しい独特な芸術」だと激賞した。

この有名な芸術団の日本公演が確定した時、朝日新聞社とともに招請を主催した日朝文化交流協会の一人士はこう語った。

——われわれ日本国民は、平壤万寿台芸術団の公演を見れば、チュチェとは何かということをはっきりと理解するであろう、とわたしは主催者の一人として確信している。

平壤万寿台芸術団の日本訪問公演は、朝鮮人民の闘争精神と念願、民族的風習を新しい芸術的技術をもって見せてくれるであろうし、それは両国人民の心と心を固く結びつけることになるだろう。

これは国交の正常化がなされていない現在の状況では“動く大使館”の役割を果たすだろう。わたしは220名のみなさんを芸術団としてばかりでなく、共和国の“文化使節”として熱烈に歓迎する——

広岡知男朝日新聞社社長はこう語った。

——朝鮮民主主義人民共和国の世界に誇る平壤万寿台芸術団が、日朝文化交流協会と朝日新聞社の招待で来る8月から9月にかけて日本で公演することになったのはたいそう喜ばしいことだ。

朝日新聞社は世界のすべての国と友好関係を結ぼうという考えをもって、ジャーナリズムとして長年努力してきた。

われわれは日本と朝鮮民主主義人民共和国との友好関係樹立を心から願い、微力ながら尽力してきた。

数年前、本社編集局長後藤基夫が招請を受けて共和国を訪問したこともその現れの一つであるが、後藤編集局長は平壤で万寿台芸術団の公演を観覧し、その素晴らしさに感動した。

われわれは常に国と国との友好を深めるためには、両国人民の文化交流を深めることがもっとも良い道であると考え、多くの国と文化交流を行い成果を収めてきたので、後藤の話を聞いて万寿台芸術団をきっと招請しなければならないと考えた。

幸い金日成主席閣下と、それに朝鮮民主主義人民共和国政府、平壤万寿台芸術団、総聯など関係者の多くの方たちの理解と協力を得て、長らく待ち望んでいた万寿台芸術団の日本訪問公演が実現する運びとなった。わたしはそうした誠意に対し心から感謝する。

万寿台芸術団はすでに世界45カ国で公演し絶賛を博してきたが、この春は英国とイタリアを、ごく最近では中国を訪問して大きな成果を収めたことをわれわれはよく知っている。

共和国の隣国である日本でこれまで公演できず、今年になってやっと公演にこぎつけたが、遅くなったとはいえ遂に万寿台芸術団の優雅な舞台を見ることができるようになったのは、まことに喜ばしいことであり、その日を指折り数えて待っている。

わたしと主催者は、総聯のみなさんと力を合わせて、万寿台芸術団の日本公演の成功をはかって全力をつくす考えである。

万寿台芸術団の公演は、多くの日本人の宿望でもあるだけに、必ず大きな成果を収めるものと確信している――

作家の松本清張氏はこう語った。

――このたび隣国朝鮮民主主義人民共和国から平壤万寿台芸術団が日本に来ることになったのはたいへん喜ばしいことである。

万寿台芸術団はすでにヨーロッパで一大センセーションを巻き起こしたということだが、われわれ日本人はまだ共和国の芸術を知る機会がなかったので、きっと見るつもりだ。

舞踊と音楽というものは、民衆相互の接触にとって切り離せない重要なものである。

舞踊と音楽は文字をもって読む文学とは違い、目と耳を通じた民衆の心の交わりとなる。万寿台芸術団の公演を指折り数えて待っている——

劇作家の久板栄二郎氏はこう語った。

——朝鮮民主主義人民共和国の万寿台芸術団が日本に来るということだが、実に喜ばしいことだ。朝鮮の芸術が非常に発展しているとしばしば聞いていたが、今度、じかに接することができると思うと喜びにたえない。日朝文化交流を促す絶好の機会になるだろう——

画家の某氏はこう語った。

——朝鮮民主主義人民共和国の平壤万寿台芸術団がいよいよ来ることになった。

このめでたい名を冠する万寿台芸術団は、今年に入ってすでにロンドン、ローマ、北京、上海など、すべて芸術の中心地、文化の発祥地として名を馳せている都市で公演し、センセーションを巻き起こしたという。

万寿台芸術団の公演を観覧した人たちは朝鮮の芸術を「黄金の芸術」と言っているが、早く見たいものだ。

朝鮮民族は昔から芸術的にもすぐれた民族であると思っているが、近代国家として飛躍的な発展を遂げた朝鮮民主主義人民共和国の芸術が、どのようにわれわれの前にその華々しい姿を見せてくれるか、今から胸がわくわくする。

わたしはこの芸術団が日朝文化交流の掛け橋としての重責を果

たすだろうと確信している——

文芸評論家の奥野健夫氏はこう語った。

——日本の雅楽には高麗楽と唐楽という2大潮流がある。高麗楽という名称からしても、朝鮮半島の文化が日本の文化、とくに音楽舞踊に及ぼした影響が大きいことが分かる。

私は小学校に通っていた頃、朝鮮の歌と踊りを見たことがあるが、そのときのことが胸に深く刻まれている。

朝鮮民主主義人民共和国の平壤万寿台芸術団の公演を見ることのできると思うと、今から興奮を抑えることができない——

文芸評論家の臼井吉見氏はこう語った。

——民族的伝統を継承発展させ、華麗で優雅な舞台を見せて世界の注目を引いている万寿台芸術団がついに日本で公演することになった。朝鮮民主主義人民共和国は日本にとって「近くて遠い国」だとしばしば呼ばれている。

こうした不自然な現象が万寿台芸術団の日本訪問によって是正され、これを機に両国人民の友好がいちだんと深まり、両国人民の交流がいつそう促されることを期待する。

万寿台芸術団の特徴は、数千年間、朝鮮民族の愛の中で育まれてきた独特な音楽舞踊の中で、今日まで立派に継承されてきたものと、外国の進歩的なものとが巧みに融け合っていることにある。

わたしは今、日本国民にその燦然たる舞台を余すところなく見せる万寿台芸術団の日本訪問公演の成果を大いに期待している——

詩人の真壁仁氏はこう語った。

——万寿台芸術団はスイス、イタリア、英国、フランスなどでの公演を通じてヨーロッパ人民の絶賛を博した。

わたしは今回の日本公演に先立ち、昨年朝鮮民主主義人民共和国を訪問した際、初めて万寿台芸術団のすばらしい舞台を見た。

朝鮮の芸術は世界最高峰の芸術だと言われているが、わたしが見た万寿台芸術団の舞台も評判どおり、まことに完成された舞踊と音楽であった。

万寿台芸術団の舞踊は、現代世界芸術の中でも類例のない非常に格調の高い芸術である。

実に、万寿台芸術団の音楽と舞踊は朝鮮の民族的特性を生かしているばかりか、単純な民族的範囲を超えた普遍性を帯びている。

万寿台芸術団の音楽舞踊の力は、まさに一つの民族の力、新しい朝鮮の力を立派に象徴している。ヨーロッパで朝鮮の芸術がこのような高い評価を得ているのは当然だといえよう。

わたしは今度の万寿台芸術団の公演を心待ちにしている——
演劇評論家の尾崎宏次氏はこう語った。

——万寿台芸術団の日本公演がついに実現することになったのは非常に喜ばしいことだ。

聞くとところによると、朝鮮民主主義人民共和国では芸術の発展に国家的な支援が惜しみなくなされ、芸術家たちは心ゆくまで才能を発揮しているという。

この国から来る芸術団の日本訪問公演は、朝鮮の民族芸術の真価を余すところなく見せてくれるであろう。

とくに、この公演を機に日朝両国の文化交流が活発になれば、共和国の多くの芸術家たちと交流することができ、相互の理解をいっそう深めることができるであろう——

音楽評論家の園部四郎氏はこう語った。

——朝鮮の芸術が民族的伝統を受け継ぎ、どのように現代的に開花発展したかを直接見るができるので、万寿台芸術団の公演を待ち望んでいる。

わたしはこれまで在日朝鮮公民との交流を通じて、朝鮮人民の潔く明るい姿に深い感銘をうけてきた。

今度日本で公演することになる万寿台芸術団の舞台で、われわれは健全で明るく希望にみちた朝鮮の姿を直接見るができると思い、その公演に大きな期待をかけている——

NHKフィルハーモニー指揮者の岩城宏之氏はこう語った。

——世界各国で優秀な芸術が創造され、それぞれの国特有の民族芸術を発展させていくことはたいへんよいことだと思う。

わたしはすぐれた芸術が全世界の人たちの友好の掛け橋になるべきだと考えている。今回初めて日本で公演することになる万寿台芸術団は、日本人たちに大きな感銘を与え、絶賛を浴びるだろうと思い、公演に深い関心と期待をかけている——

演出家の千田是也氏はこう語った。

——10余年前に朝鮮民主主義人民共和国を訪問した際、国立劇場で舞踊と歌劇、演劇などを観覧し、そのすばらしい成果に感激した。今度日本を訪問する万寿台芸術団が総勢220人で、それも歌劇を持って来ると聞いて、心から喜んでいる。朝鮮で見たすぐれた舞台が今も目の前にあざやかに浮かぶ。

全人民の力をもってすばらしい国を建設し立派な芸術を花咲かせている朝鮮の芸術に大きな期待をかけており、朝鮮の芸術家たちが日本公演で大きな成果を収めることを願っている——

日本芸術院会員の中村鴈治郎氏はこう語った。

——日本と朝鮮の間の友好交流を求める気運が高まっている今日、共和国から初めて文化使節として万寿台芸術団が日本を訪問して公演すると聞いて、たいへん喜んでいる。朝鮮の舞踊家たちの練習風景をちょっと見たことがあるが、日本舞踊とは異なる特色を持っている。この目で早く公演舞台を見たいものだ。

万寿台芸術団は外国でも高い評価を得ているというが、その日本訪問を心待ちにしている——

俳優の杉村春子氏はこう語った。

——昨年、中国を訪れたとき、たまたま中国を訪問中の朝鮮民主主義人民共和国芸術団の歌劇『血の海』を見てたいへん感動した。日本と朝鮮の友好と国交関係樹立のためにも、文化交流は大きな役割を果たすと思う。万寿台芸術団の日本訪問公演はより多くの人たちに朝鮮について知らせ、文化交流を深めるよい機会だと思う。

万寿台芸術団の公演が必ず成功するものと確信している——

オペラ歌手の砂原美智子氏はこう語った。

——わたしは、朝鮮民主主義人民共和国から平壤万寿台芸術団が初めて日本を訪問することになったことを歓迎する。そして、朝鮮の優秀な音楽芸術を直接鑑賞できる機会にめぐり合えたことを、同じ音楽を専攻する一人として非常に嬉しく思う。

私は以前から、日本と一番近い国である朝鮮とはお互い仲よくしなければと考えてきた。

今回の万寿台芸術団の日本訪問公演が、日朝両国の文化交流を活発にし、関係改善を促す大きな力になるであろうことを願ってやまない——

62. 公演を間近にして

マンステ
万寿台芸術団が日本に到着し、公演の日が迫ると、人々の関心はいよいよ高まった。

そんな中で、公演開催地の各知事がそれぞれ談話を発表し、各界人士も競って期待を表明した。

以下はそれら公演を目前にした反響である。

美濃部亮吉東京都知事はこう語った。

——朝鮮民主主義人民共和国平壤万寿台芸術団の日本訪問公演を通じて、現代朝鮮芸術の神髄が日本に紹介される。

朝鮮の美、朝鮮の心がこのように大規模に、かつ楽しく新鮮な姿で広く日本の大衆の目と耳に接するのは初めてのことだ。

わたしは、日朝交流の歴史上画期的な意義を持つこの芸術の使節を諸手をあげて歓迎し、時間をさいて劇場へ駆けつけるつもりだ——

全国知事会会長の桑原幹根愛知県知事はこう語った。

——万寿台芸術団の公演が盛大に行われることを心から嬉しく思う。

豊富な内容と洗練された民族的形式、高い芸術的技巧によって世界各国の好評を博している万寿台芸術団の公演を鑑賞できることを貴重な機会だと思う。

このたびの公演が所期の目的を達成し、大きな成果を収めることを願うとともに、これを契機に日朝両国の文化交流が大きく前

進することを切願する次第である——

黒田了一大阪府知事はこう語った。

——平壤万寿台芸術団の日本における公演を心から歓迎する。

万寿台芸術団は金日成主席の主体的文芸思想に従って、すでに世界の40余の国で公演し、世界の人々から「黄金の芸術」として絶賛を博しているという。

日本訪問公演が日朝両国の文化交流を促進し、相互の理解と親善を深める重要な契機になることを心から願っている——

亀井光福岡県知事はこう語った。

——著名な万寿台芸術団の日本訪問期間に、福岡でもそのすばらしい芸術に接することができることをたいへん嬉しく思い、心から歓迎する。

万寿台芸術団は国内ばかりか世界40余の国で公演し名声を博しているが、地理的にもっとも近い福岡県をはじめ日本の各地で公演するのは、日朝両国間の相互理解と友好親善を深めるうえでも大きな意義があると思う。

220名に達する万寿台芸術団の人たちが、日本各地をめぐる日本人民と友好を深めるよう願う。

わたしは、万寿台芸術団のわが県訪問を機に、より活発な文化交流が行われ日朝友好の実がみのることを心から希望する——

蜷川虎三京都府知事はこう語った。

——日本の隣の朝鮮民主主義人民共和国からやって来る平壤万寿台芸術団を迎えることができることを心から嬉しく思う。

民族芸術である朝鮮舞踊は美しく、広く愛されており、すぐれた伝統的芸術に基づく数多くの創作劇と音楽、舞踊などは世界

各国で高く評価されている。

一点の曇りもない情緒的な歌と、優雅華麗ながらもおごそかな舞踊など、その高い芸術的技術によって磨かれた舞台は、必ず多くの日本人を陶醉させるだろう。

日本訪問公演は8月から9月にかけて各地で行われるというが、世界各国で「世界最高峰の芸術」と絶賛されている万寿台芸術団の公演が大きな成功を収めるよう声援を送るとともに、日朝友好がいつそう固く結ばれることを願う次第である——

兵庫県知事はこう語った。

——万寿台芸術団が神戸を訪問し、9月5日から7日まで3日間われわれにすばらしい芸術を見せてくれるというが、まことに嬉しく思う。

聞くところによると、万寿台芸術団は世界40余か国を訪問して絶賛を浴びたというが、兵庫県民の立場からもこれを心から歓迎する次第である。

兵庫県も宝塚歌劇団などがあって、その方面では発展をみているが、今回朝鮮からの親善の使節団がやってきたことを、そんな意味でも嬉しく思う。

9月といえば兵庫県の芸術祭典が始まる頃でもある。

万寿台芸術団が意義深い9月をいつそう輝かせてくれるものと思う——

音楽家の芥川也寸志氏はこう語った。

——わたしは、万寿台芸術団が世界各国で好評を博している有名な芸術団であることをよく知っている。

遺憾ながら、これまで共和国を訪問する機会を何回も逃し、万

寿台芸術団の公演を実際には一度も見られなかった。

それでわたしは、万寿台芸術団の今回の日本訪問公演に大きな期待をかけている。

朝鮮の自主的平和統一の実現で新たな局面が開かれている今日のような重要な時期に行われる万寿台芸術団の日本訪問公演は、きわめて大きな意義を持つ。

わたしは、朝鮮の芸術を代表する万寿台芸術団が広範な日本人民の熱烈な歓迎を受け、公演が必ず大きな反響を呼ぶであろうことを確信している——

作曲家の服部正氏はこう語った。

——朝鮮の人たちは非常に敏感な感覚を持っている。たいそう立派な演奏を見ることができると期待している——

作曲家の武満徹氏はこう語った。

——外国の文化にふれることなくしては、われわれ自身の文化も衰える。文化はお互いに交流しながら育つものである。日を追って発展する朝鮮民主主義人民共和国の社会主義体制下の文化に、われわれは深い関心を持ち、このたびの万寿台芸術団の公演に大きな期待をかけている。このような文化交流が発端となって、日朝間の関係が一日も早く正常化することをわたしは心から願っている。

万寿台芸術団について言うならば、この芸術団は民族の伝統的な歌唱法、楽器その他わたしたちが大切に愛する多くの優秀な文化遺産を、積極的に歌劇に盛っているという。

今日の民衆の生活にその伝統がどのように生きているかということは、たいへん興味のあることであり、ここからわれわれが学

ぶことも多いと思う——

舞踊家の谷桃子氏はこう語った。

——朝鮮民主主義人民共和国万寿台芸術団の日本訪問公演を心から歓迎する。

今回の万寿台芸術団日本訪問公演は、隣国でありながらも互いに閉ざされている日朝間の文化交流の門を大きく開け放つ画期的な契機になるだろうと思う。

華麗な舞台、すぐれた構成、それらが伝統的な民族的形式と新しい社会主義的内容で具現された独創的な朝鮮の芸術を必ず自分の目で見たいと考えてきた。

朝鮮の舞踊と音楽を満喫できるものと期待している——

舞踊家の松山樹子氏はこう語った。

——長い間待っていた万寿台芸術団の訪問をわたしたちは熱烈に歓迎する。

わたしたちが平壤で親善公演を行ったのは1964年10月であったが、美しい平壤の町並みが今もまざまざと目に浮かぶ。

アメリカ帝国主義者の爆撃によって徹底的に破壊された平壤は、金日成主席の偉大な構想と指導によって今日の平壤に建設された。

朝鮮民主主義人民共和国の人たちの生活力にみちた偉大さ、このたび訪れる平壤万寿台芸術団はその精神を、朝鮮の伝統的な芸術と新しい歌劇の形式を結びつけて発展させている。演目には祖国を守る朝鮮人民の英雄的気象が生き生きと表現されており、革命的リアリズムとロマンチズムがよく結びついていて必ず観覧者の感動を呼び起こすだろう——

俳優の仲代達矢氏はこう語った。

——朝鮮民主主義人民共和国から平壤万寿台芸術団が来るとい
うたいへん喜ばしいニュースを聞いて、その訪問を指折り数えて
待っている。日本と朝鮮は歴史的にも、文化的にももっとも近い
関係にありながらも、これまでは政治的なものが両国間の交流を
遮っていた。

万寿台芸術団の日本訪問公演が実現されることになったことを
芸能人の一人として心から歓迎し、その日を待っている——

63. 『朝日新聞』の特集

マンステ
万寿台芸術団の日本公演を数日後に控えて、主催団体の一つである朝日新聞社は3面にわたる特集を組み、万寿台芸術団を広く紹介、宣伝した。

同紙は、1面トップに「花咲くチュチュの芸術」という見出しで、日本公演を間近にした平壤万寿台芸術団の紹介記事を、革命歌劇『花を売る乙女』の1シーンの写真を添えて掲載し、さらに1面下段に舞踊『リンゴの豊年』のシーンを載せた。その他の面には「伝統を生かした豊かな創造」という見出しで、革命歌劇『花を売る乙女』の主人公コップニが泥棒の疑いをかけられて殴られる場面、舞踊『雪が降る』『協同農場田野の豊年』『祖国のつつじ』の各シーン、芸術団の管弦楽団と女声パンチャン(傍唱)、平壤大劇場の写真を載せた。

また、平壤を訪問した同紙特派員の「民族の歌と踊り、繊細な演出、舞台芸術が迫力を添える」と題して、万寿台芸術団に関する2本の記事を掲載したが、そこには次のように書かれていた。

——朝鮮民主主義人民共和国の平壤万寿台芸術団は、1946年に創立された平壤歌舞団の優秀なメンバーをもって1969年に新しく結成された、多くの人民俳優、勲功俳優を擁する最高峰の芸術団である。

この国の芸術が指針としているのは言うまでもなくチュチュ思想である。

それは民族的形式に社会主義的内容を結びつけたもので、それには思想性と芸術性がともに盛り込まれている。こうして今、その芸術は一輪の大きな花を咲かせている——

筆者は、朝鮮芸術の主体性は音楽、演劇、舞踊、美術を総合した舞台芸術である「革命歌劇」に見られるとし、日本で公演される『花を売る乙女』はその集大成でもあると指摘した。

同紙には、日朝文化交流協会理事、演出家の岡本愛彦氏の話も掲載されたが、氏は、金日成主席が朝鮮の文芸部門の人たちに行った談話と、主体性の確立について語った教示をそれぞれ引用したうえで、「錯綜した国際的環境の中で確固と自主独立路線を貫いてきた朝鮮は、芸術の分野でも伝統を現代的に生かしながら、きわめて個性的に発展させることに成功した国である」と強調し、西ヨーロッパ、アフリカ、ラテンアメリカなど50余カ国で「世界最高峰の芸術」という最大級の賛辞を受けている共和国の芸術は、決して表現がすばらしいことにとどまらず、つねに民族の躍動する魂を誇らしく描き出すことに、その感動的ともいえる偉大さがあると語った。

氏は、日本をはじめとする列強の侵略にさらされながらも確固と未来を展望しつつ人民が創造した輝かしい成果が、万寿台芸術団の舞台に反映されているのだと指摘し、商業主義でない人民が創造した真の芸術、それを万寿台芸術団が余さずわれわれに見せてくれるであろうし、この公演が日朝両国人民の真の理解と連帯の掛け橋になってくれることを心から願うと結んだ。

64. 広島における歓迎

日本の7都市を巡回公演していた万寿台芸術団は、広島でも市民と在日朝鮮同胞の熱烈な歓迎を受けた。

万寿台芸術団を歓迎する広島市民の集会在市立公会堂で行われた。

集会は山田節男広島市長を会長とし、広島市議会議長ら市内の各界人士を委員として構成された「朝鮮民主主義人民共和国平壤万寿台芸術団広島公演歓迎実行委員会」の主催で行われた。

彼らは、万寿台芸術団を熱烈に歓迎して香り高い花束を贈った。

集会では市長代理山田昇広島市教育長、広島県労働組合会議浜本万三議長が歓迎演説を行った。

両氏はともに、全市民の名で万寿台芸術団の広島訪問公演を熱烈に歓迎し、これが両国の文化芸術交流の強化に大いに寄与するものとの確信を表明し、国の自主的平和統一をめざして強くたたかっている朝鮮人民に確固とした連帯を示すとして、金日成主席が新たに提示した祖国統一5大綱領を全的に支持し、「二つの朝鮮」を企むアメリカ帝国主義者とその手先の策動を糾弾した。

集会の終了後、広島放送児童合唱団、広島合唱団、藤浪舞踊研究所、それに広島朝鮮歌舞団が出演する多彩な芸術公演が行われた。

同日、万寿台芸術団は中四国地方の同胞が準備した盛大な歓迎会に招かれた。歓迎会では、「革命の英才であり60万在日同胞の

慈父である金日成元帥に送る手紙」が、参加者の熱烈な拍手をもって採択された。

万寿台芸術団は四国に渡り、そのの同胞たちとも感激的な対面を行った。

一行はまず、松山市にある総聯愛媛県本部と朝鮮信用組合銀行愛媛信用組合を訪問し、その後、四国朝鮮初中級学校を訪れた。同校では、「敬愛する金日成元帥が送ってくださった平壤万寿台芸術団を歓迎する四国地方同胞たちの集い」が盛大に開かれた。

65. 福岡でも

マン ス デ
万寿台芸術団は数百名の総聯活動家と各階層在日同胞の熱狂的な歓送を受けながら広島を出発した。

駅の内外は共和国の旗と花束でうずまり、「万歳！」の聲が上がり、『金日成将軍の歌』『主席の万年長寿を祈念します』の大合唱が響き渡った。

広島駅をあとにした万寿台芸術団は、福岡に向かう途中、岩国、徳山その他多くの駅で在日同胞と日本各界人士の熱烈な歓迎・歓送を受けた。

途中、岩国朝鮮初中級学校と徳山朝鮮初中級学校の生徒たちが列車に乗り込み、歌と詩朗誦で祖国の芸術団の団員たちを喜ばせた。

数千名群衆の熱狂的な歓迎を受けながら博多駅に到着した芸術団は、朝日新聞社福岡総局長と同社西部本社企画部長をはじめ各界人士の心温まる歓迎を受けた。

総聯韓徳銖議長ハンドクスおよび福岡県、大分県をはじめ九州地方各県の総聯委員長など総聯の幹部も一行を出迎え、ついで駅前広場では、福岡県内の各政党・大衆団体の代表と各界人士で構成された「朝鮮民主主義人民共和国平壤万寿台芸術団福岡公演歓迎実行委員会」の主催で、盛大な歓迎集会が開かれた。

日本社会党福岡県本部国民運動部長の司会で進められた集会では、歓迎実行委員会代表委員の自由民主党所属福岡市議会議員石

村貞雄氏が演説した。

氏は、万寿台芸術団の福岡訪問公演を喜ぶとし、これを通じて日朝両国人民の友好親善と連帯がいつそう強まるだろうと述べ、芸術団の福岡公演が大きな成果を収めるよう積極的に協力するとの決意を表明した。

『朝日新聞』をはじめ中央と地方の新聞、ラジオ、テレビは、万寿台芸術団の公演を大々的に報じた。

万寿台芸術団の日本訪問公演は、金日成主席への日本人民と在日朝鮮同胞、日本在留南朝鮮人、各国友人たちの敬慕の念を強め、朝鮮人民と日本人民の相互理解と親善を深めるうえに大きく寄与した。

66. 一家のように

1974年6月30日、金日成主席は関東学院大学教授林要氏夫妻とその孫娘に接見した。

主席は、御高齢にもかかわらず朝鮮を訪問して下さったことをうれしく思うとして、その労をねぎらった。

主席は、氏がこれまで朝鮮人民のため、総聯のためにいろいろと尽力してくれたことに謝意を表し、次のように語った。

「われわれは、先生が朝鮮大学校の認可問題をはじめ、在日朝鮮同胞の民主主義的民族権利を擁護するたたかいに少なからず寄与されたことを忘れずにいます。また、先生が総聯第10回全体大会に列席し、立派な祝賀演説をされたことをよく知っています。われわれは先生の高貴な活動にたいそう感動しています。わたしは最近地方を現地指導している関係で、先生に平壤で会えず、こんな遠くまでご足労を願って申し訳ありません。

わたしは今日、一国の元首としてではなく、外交的な格式を抜きにして、先生と一家のように、家庭的な雰囲気の中でお話もし、食事と一緒にしたいと思っています」

一家のように！

主席のこの言葉に氏は目がしらが熱くなった。

主席は感動している氏にこう言った。

「先生の宿所は平壤市内より郊外の方がよいと思い、^{チャン スウォン}長寿院に決めました。長寿院という地名はわたしがつけたのではなく、

昔からのもので、長生きをする地だという意味です」

氏は、恐れ入りますと重ねて謝意を表した。

主席は腰を浮かす氏を制して「身に余るもてなしを受けて恐れ入るとおっしゃいましたが、朝鮮人民のためにいろいろと尽力されているお方に、わが国の歓待を受ける資格があるのは当然です。われわれの素朴なもてなしに満足したとのことで、わたしもうれしく思います」

主席のこの言葉に氏はまた腰を上げ、自分たちの宿所に衛兵まで配して下さり恐縮の至りです、と重ねて礼を述べた。

主席は明るく笑い、それは大切な客へのわれわれの礼儀です、外国の客の宿所に衛兵をおくのは、そこが安全でないとか危険だからではありませんとして、こんな話をした。

「朝鮮労働党第4回大会のときにあった一つの事実を話しましょう。朝鮮労働党第4回大会には、社会主義諸国の党代表団や資本主義諸国の共産党代表団が多数参加しました。そのとき、彼らがある農村へ行ってみると、農民たちはみな野良仕事に出かけ、家には誰もいないのに、錠をおろしている家は一軒もありませんでした。不思議に思ったある国の党代表団の団長がわが国の幹部に、朝鮮ではどうして家に錠をおろさずに安心して野良に出て働いているのかと質問しました。彼は、わが国には昔から家に錠をおろさずに外出する習慣がある、とりわけ、社会主義を建設している今日、それは至極当然なことになっている、と答えたそうです。わが国では、戸締まりをせずに外出しても、物を盗まれるようなことはありません」

主席はついで、氏が白頭山ベクトゥに登ったことに話題を移した。

「わたしは、先生が御高齢にもかかわらず白頭山にお登りになると聞いて、とても心配しました。元気一杯白頭山に登り、深い感銘を受けたというのは結構なことです。白頭山と三池淵サムジヨンが非常に美しいと言われましたが、三池淵は高齢者が休養をとるのに適しています。それで、医者たちは高齢者にそこで休養することを勧めています。わが国では毎年大勢の人が休養所や療養所で保養しています」

主席は夫妻を食事に招いた。

氏は言うに及ばず、夫人や孫娘も主席の歓待を受けたことが夢のようで、時間が経つのも忘れていた。

主席は別れに際して、こう言った。

「わたしは今日、生涯を教育事業に捧げておられる先生に親友の立場でお会いし、話し合ったことをうれしく思います」

林要氏は主席の言葉の一言一言を噛みしめた。

一家のように……親友の立場で……

なんと深い情愛と意味のこもった言葉であろうか。

氏は、このような偉大な方に会い、話を交わしたことを無上の幸福、喜びとして主席のもとを辞した。

67. 日本の労働者階級に送る挨拶

1974年10月12日、金日成主席は日本総評および中立労連代表団に接見した。

主席は、総評議長を団長とし、中立労連議長を副団長とする日本総評および中立労連代表団のわが国訪問を熱烈に歓迎するとし、あなたがたのわが国訪問は両国の労働者階級と人民の友好団結の強化にとって大きな意義を持つ、それゆえにあなたがたのわが国訪問を今一度熱烈に歓迎すると力をこめて言った。

主席の心のこもった挨拶に代表団一同は大きな感銘を受けた。

感動に包まれている代表団一行を見回して、主席は熱っぽく語った。

「われわれは、日本の労働者階級と人民が、民主主義的民族権利を守るための総聯と在日朝鮮公民のたたかいを積極的に支持声援し、わが共和国の正当な偉業に積極的な支持と声援を寄せていることに対し、あなたがたを通じて日本の労働者階級と人民に感謝を送ります」

主席は、あなたがたと会えたことを非常にうれしく思っているとして、語を継いだ。

「あなたがたとは初対面ですが、旧友に会ったような気持です。朝鮮の労働者階級と日本の労働者階級は、過去にも日本帝国主義の抑圧と日本独占資本の搾取に反対する共同闘争を展開し、今日も日本の軍国主義化に反対する共同闘争を行っています。今後も

両国の労働者階級はともに手を取りあって共同闘争をさらに強化していくでしょう」

主席はこれまで数多くの代表団に会っているが、こんなに大きな喜びと満足の意を表したのは稀であった。

朝鮮人民に接する場合も誰よりも労働者、農民を重視し、いささかの間隔も置かずにあつい愛情を注ぐ主席、平凡な人民であるほどより深い親密感を覚える主席の謙虚な人柄は、日本の労働者階級を代表する彼らの前でもそのままにじみ出ているのである。

主席の人柄にすっかり魅せられた市川誠団長は、平素胸に秘めていた主席の偉大な政治についての所感を述べた。

主席は、団長先生が朝鮮人民のたたかいとわれわれの活動を高く評価し、過分なおほめの言葉をくださったことに謝意を表すると述べた後、日本の労働者階級のたたかいを高く評価するとして、次のように語った。

「朝鮮人民は、労働者階級を先頭とする日本人民が独占資本に反対し、日本の中立と自主独立、アジアの平和のために勇敢にたたかっていることをよく知っています。

あなたがたが日本でアメリカ帝国主義の軍事基地撤廃闘争を力強く展開しており、南朝鮮傀儡一味のファッショ的人民弾圧と、日本反動の犯罪的な総聯弾圧策動に反対する闘争を積極的に展開していることに対し、われわれは非常に感嘆しています。

朝鮮の労働者階級と日本の労働者階級がかたく団結して共同闘争をさらに強化するのはきわめて重要なことです。それは朝日両国の労働者階級と人民の闘争が互いに緊密に結びついており、アジアの平和維持に大きく寄与しているからです」

こう述べた主席は、朝日両国の労働者階級と人民は、ともに世界帝国主義の元凶アメリカ帝国主義と対峙しているとして、アメリカ帝国主義がなぜ朝日両国労働者階級の共通の敵であることを明快に説明した。

「アメリカ帝国主義者はわが国土の半分である南朝鮮を侵略的な軍事基地にかえており、日本にも多くの軍事基地をもっています。アメリカ帝国主義が朝鮮と日本に軍事基地をもっているということは、彼らがいつでも朝鮮と日本、さらにはアジアの他の国の内政に干渉しうる足がかりをもっていることを意味します。朝鮮と日本にあるアメリカ帝国主義の軍事基地が撤廃されないかぎり、彼らはいつでも朝鮮と日本の内政に干渉するでしょう。言いかえれば、朝日両国にアメリカ帝国主義の軍事基地があるのは、われわれ両国がアメリカ帝国主義者の干渉を受ける前提となります。

南朝鮮反動層の主人もアメリカ帝国主義者であり、日本軍国主義者の主人もアメリカ帝国主義者です。同じ主人の指図によって動く南朝鮮反動層と日本軍国主義者は今、アメリカ帝国主義者のテコ入れのもとに朝日両国人民の革命闘争の弾圧に狂奔しています。このような意味からすれば、朝鮮革命の対象と日本革命の対象、言いかえれば朝鮮労働者階級の闘争対象と日本労働者階級の闘争対象は同じだと言えます。

今日、朝日両国の労働者階級と人民は、ともに反帝戦線にしっかりと立っています。アジアの反帝戦線はきわめて広域にわたっています。日本から朝鮮、中国、インドシナ、そしてイラクとシリアに至るまでの広大なアジア地域に強力な反帝戦線が形成され

ています。

アメリカ帝国主義は、朝鮮人民と日本人民の敵であり、世界の革命的人民の共通の敵であります。今日世界のどの地域をとわず、アメリカ帝国主義者の黒い触手がのびていないところはありません。とくに、アメリカ帝国主義は侵略のほこ先をアジアに向けており、アジアにおびただしい侵略兵力を常時駐留させています。沖縄は形式上、日本に返還されたとはいえ、いまなおそこには多数のアメリカ軍がとどまっています。タイにもアメリカ帝国主義の軍事基地があります。アメリカ帝国主義者は朝鮮戦争とベトナム戦争、中近東戦争で甚大な打撃をこうむり下り坂を転げおちていますが、いまなお侵略の野望を捨ててはいません。帝国主義の侵略的本性はけっして変わりません。

………

最近アメリカ帝国主義者は、南ベトナムとタイから一部の軍事基地を撤去してフィリピンとグアム島に移していますが、これも一つの欺瞞策にすぎません。アメリカ帝国主義者がアジアの緊張緩和をはかろうとするならば、フィリピンやグアム島に侵略兵力を移すのではなく、自国に撤収すべきです。また、彼らは南朝鮮と日本を『前哨基地』と称して、そこからは軍事基地を撤廃しようとしていません。こうした事実は、アメリカ帝国主義者がアジアに対する侵略の野望を捨てておらず、アジアにおける緊張緩和を望んでいないことを如実に物語っています。

アメリカ帝国主義者が核実験の禁止を唱えているのも、核兵器を彼らの独占物とし、他国にはそれを持たせないようにするための陰險な術策にすぎません。核実験を禁止するくらいのことでは、

世界の人民を核兵器の脅威から救うことはできません。核戦争の危険を完全になくすためには、現有の核兵器をことごとく破壊し、核兵器の製造そのものを全面的に禁止しなければなりません。

先ごろ、アメリカ国防総省のある男は、アジア問題を『同盟国』に依拠して解決すべきだと言いました。アジアにおけるアメリカの『同盟国』とは日本、南朝鮮、フィリピンといった追随国と傀儡です。アメリカ帝国主義がアジア問題の解決において『同盟国』に依拠するということは、日本や南朝鮮、フィリピンなどの追随国や傀儡を前面におし立てて戦わせ、彼らは死地から身を引き、後ろで指揮をし、兵器の供与でもして戦争で漁夫の利を得ようということです。これは、アメリカ帝国主義者がアジアではアジア人同士をたたかわせ、アフリカではアフリカ人同士をたたかわせ、ラテンアメリカではラテンアメリカ人同士をたたかわせようとする狡猾な『ニクソン・ドクトリン』を追求していることを示しています。

朝日両国間の国交正常化をはじめ、朝鮮と日本の関係改善の問題が解決されないのも、その直接の原因はわが共和国に対する日本反動層の敵視政策にあります。後ろでアメリカ帝国主義者が日本反動層を操っていることにも重要な原因があります。

労働者階級はアメリカ帝国主義者の掲げる『緊張緩和』の欺瞞的なスローガンに絶対にあざむかれてはなりません。われわれは、アメリカ帝国主義者の『緊張緩和』のスローガンが、世界人民の革命意識を麻痺させ、労働者階級の団結を破壊するための陰謀であることを明確に認識する必要があります。

われわれはともに帝国主義に反対し、人民の自由と幸福のため

にたたかう人たちです。したがって、われわれは常に帝国主義者の陰謀策動に警戒心を高め、反帝闘争をいささかも緩めてはなりません。

日本の労働者階級と人民が繰り広げている勇敢な闘争は、世界の労働者階級と人民、とくに朝鮮人民を大いに力づけています。われわれは、日本の労働者階級の勇敢な闘争を高く評価するものです」

主席の言葉に全的な同感を表して団長は、日本の労働者階級は日本の反動勢力に反対し、労働者階級の利益を守るためのたたかいを引き続き強化すべきだと確信していると語った。

主席は、朝日両国の労働者階級と人民は団結し、南朝鮮と日本にあるアメリカ帝国主義者の軍事基地撤廃闘争を積極的に進めるべきだとして、その必要性を説いた。

「南朝鮮と日本からアメリカ帝国主義者を完全に駆逐してこそ、朝鮮人民と日本人民は自分の問題を自らの手で解決する条件をつくることができます。また、われわれ両国の労働者階級と人民は全世界の労働者階級や人民と団結し、アメリカ帝国主義が踏みこんでいる世界のすべての地域でその軍事基地を完全に撤廃するため、断固たたかわなければなりません。

アメリカ帝国主義者が世界の革命的人民をあざむき、人民の団結を破壊するため狡猾に策動していますが、世界の革命的人民をあざむくことも、反帝戦線にかたく団結している革命勢力を分裂させることもできません」

しばらく間をおいた主席は、日本でも自主性を要求する声が日ましに高まっている、今日本の反動勢力はかたくなにアメリカ帝

国主義への追随政策を追求しているが、これは歴史の流れに逆行することだとして、いずれは日本にも、日本人民の闘争によって歴史の流れに合致する自主的な政権が樹立されるものとわれわれは確信している、他方、南朝鮮でも社会の民主化と国の自主的統一をめざす愛国的青年学生と人民の闘争が力強く展開されていると強調し、こう続けた。

「古い帝国主義勢力が淘汰され、新興勢力が成長するのは今日の歴史の流れです。帝国主義者はこの歴史の流れをおしとどめようとあらゆる卑劣な陰謀をこらしていますが、それは絶対に不可能なことであり、新興勢力は歴史とともにますます成長するでしょう。

朝日両国の労働者階級がこのような歴史の流れに歩調を合わせて力強くたたかっていくならば、日本の革命も勝利し、南朝鮮における社会の民主化も実現し、わが国の統一も必ず実現するでしょう」

主席は確信に満ちた面持ちで代表団の一人一人を見回し、力をこめて言った。

「終わりにわたしは、あなたがたが朝鮮の労働者階級と人民の挨拶を日本の労働者階級と人民に伝えてくださるよう望みます」

代表団一行はこの言葉を、日本の労働者階級に対する主席の深い信頼と情愛の表現として深い感動をもって受けとめた。

68. 金日成主席の揮毫

朝鮮の統一と平和のための国際連帯委員会名誉委員長であった市川誠氏は、1931年早稲田中等夜学校を卒業して軍隊生活を送り、戦後ジョンソン飛行場に就職した。48年全国進駐軍労組同盟書記長、53年中央執行委員長、70年総評議長に就任し、退任後朝鮮統一国際連絡委員会副議長、日中民間人会議顧問を務めてアジアを中心とする国際舞台で活躍した。80年代以降、太田薫、岩井章両氏と共に総評三顧問として連合主導型の労働戦線統一に反対してたたかい、一方労働研究センターを結成して代表幹事となった。

1974年10月12日の会見で金日成主席の揮毫を得た市川誠氏はいたく感動し、帰国後、映画の画面のように流れる接見の思い出を原稿用紙に一字一字書き記していった。

「1958年4月、私は中華全国総工会の招待により、日本労働代表団長（総評、中立労連、新産別で編成）として北京メーデーに参加した際、たまたま朝鮮職業総同盟代表団から熱心に訪朝を要請され、東京の総評本部に連絡の結果、3団体の数十人が朝鮮を訪問しました。

訪朝団は総工会の了承を得て10月8日北京を出発し、新義州^{シンイジュ}を経て大歓迎を受けながら、まだ朝鮮戦争の生々しい傷跡を残している沿線の田畑に散在しているクレーターを眺めながら、大復興作戦展開中の平壤駅に到着しました。訪朝団は職業総同盟本部表

敬後、万景^{マンギョンド}台見学、職業総同盟代表団との2回にわたる会談を行い、いくつかの工場、板門^{バンムンジョム}店、咸興^{ハムフン}肥料工場等を見学、視察し、10日間程友好交流を深めて、再び中国に戻りました。この訪朝では残念ながら尊敬する偉大な領袖金日成主席に拝顔する機会に恵まれませんでした。

中国訪問を終えて帰国後、私は全国駐留軍労働組合の指導者として在日米軍を相手として日本人労働者の待遇、権利の向上のために奮闘しました。たまたま1970年に総評議長に選出され、図らずもその後中立労連議長に就任された堅山議長とともに1974年10月、第2回目の訪朝の機会を与えられ、団員諸君とともに、尊敬する偉大な指導者金日成主席に拝顔する機会を得ました。

10月12日会談終了後、午餐会の栄に浴しました。私は主席の右隣の椅子に席を頂きました。主席は右足を軽く曲げて自分の椅子に乗せて話しかけられました。主席は常ににこやかな態度で、私が人参酒のグラスを乾すと、すぐに右手で徳利をとり上げてグラスを満たしてくれました。また、私の皿に『これは雉子の肉ですよ』と何回もとってくれました。美味しく頂きました。人参酒はたしか5、6杯位頂きました。私は以前から一つの願いを秘めていました。主席が余りに開放的ににこやかな笑顔なので、甘えてお願いをする決心をしました。勇気を出し、思い切って主席にお願いを申し上げました。『恐縮ですが是非、日本の労働者階級のために一筆揮毫を頂きたい』とお願いしました。

主席はニコニコ笑いながら『条件があります』と言われました。いささか心配したが静かに御言葉を待っていたら『先例にしないことです』とおっしゃられました。私はほっとしながら喜んで『お

約束します』とお答えしました。私は大きな役務を果たしたので人参酒が一段と美味しく頂けました。

いよいよ翌13日、お土産の伝達式の日になりました。^{キムヨンナム}金永南先生に呼ばれて部屋の前に進み出てびっくりしました。金永南先生が両手で捧げ持っている揮毫の額は正式に表装されており、しかも1間以上の大きい立派な扁額です。瞬間、私が立ち止まって大きな額をジーツと見ていましたら……。金永南先生が『市川さん、心配ありませんよ。帰りは主席専用の大型機で北京まで送りますよ』と言われました。私はようやく落ち着いて先生の前に進み出て大額を有難く頂戴致しました。

大扁額には墨痕淋漓として次のように雄大な健筆で書かれていました。

『全世界の労働者階級は団結して、帝国主義とあらゆる圧力に対し、また搾取のない新しい社会を建設するために闘争しよう！すべての人民の幸福のために。』

金日成 1974年10月』

なんと素晴らしい贈物か。まさに偉大な革命指導者の人民、労働者に対する暖かい期待と激励、先進的教導ではないか。私は思わず『よかった』と胸の中で叫びました。

この記念の大額は以来、総評の応接室に飾られているが、やがて私は責任をもってこの大扁額を守らなければなりません。大きな太陽をしっかりと守り抜いてゆきます」